



# 茜天の鱗鎖

和里かりん

## 第1章 比奈国の遠見

---

美玻（ミツハ）は暗闇の中で目を覚ました。

少女の五感が最初に感じ取ったのは、湿った土の匂いだった。次いでそう遠くない所で、湧水が岩の隙間をちょろちょろと流れている音に気付く。朦朧としていた意識がもう少しはっきりとしてくると、外で木々が風に煽られて擦れ合う音や、草叢に潜む虫たちの声が耳に入り始めた。

闇だと思っていたその場所も、いつしかほんのりと白色が混じり込んだような薄い闇に変わっていた。どこか小さな隙間から、月明かりが入り込んでいるのかも知れない。ぼんやりとそんな取りとめのないことを考える。それでも周囲の様子が見えてこないのは、自分が目隠しをされている所為なのだと気づく。そして不意に、今、自分がどういう状況に置かれているのかが、すくと頭の中に落ちて来た。

――ああ・・先に目が覚めてしまったんだ。

そう悟った途端込み上げた恐怖に、美玻は思わず身を固くする。その途端、  
――痛っ。

僅かに身じろぎをただけであるのに、手首に打たれていた縄が皮膚を擦って、小さな悲鳴を零す羽目になった。痛さのせいなのか、怖さのせいなのかは判然としなかったが、美玻の目からはじんわりと涙が染み出した。

意識のない間に、何もかもが終わっていてくれれば・・そんな淡い期待を抱いていた。それがどうにも仕様のないことだと理解していても、死というものに対する恐怖が心に湧きあがるのを止めることは、まだ十五の少女には難しかったのだ。

美玻は、龍神への生贄として、この祠に捧げられたのである。せめてもの情けだと、ここに運ばれる前に眠り薬を嗅がされた。もう二度と目覚めぬ眠りに落ちた筈だったのに、自分はどうして目を覚ましてしまったのだろう。やるせない思いに苛まれる。例え目が覚めても、祠の入り口は、岩を積み上げて塞がれている筈だから、美玻一人の力では逃げることは出来ない。それはつまり、自分はただこの場所で、この命を奪いに来る神がやって来るのを、恐怖と闘いながら待ち続けなければならないということだ。

――どうして。

その問いの答えは分かっている。美玻が祟り者（たたりもの）だから。

それでも、問わずにはいられない。

どうして、

どうして、

どうして、と・・

美玻が生まれたのは、比奈国（ヒナのくに）の遠見（とおみ）と呼ばれる山あいの集落だった。この集落の呼称にもなっている遠見を名乗る一族は、遥か遠方を見ることが出来るという特別な目を持っていた。そして遠見はその能力によって、比奈の王の為に、龍を探すという役目を与えられていた。

比奈国は世界の辺境に位置する小国である。そして、この世界の中心に座する鴻（コウ）という大国の朝貢国であった。

この世界には、七宝と呼ばれる希少品がある。七宝はその希少さゆえに、希物（まれもの）とも呼ばれている。宗主国である鴻国の皇帝は、周辺の国々が、その希物を朝貢品として納めることを望んでいた。表向きは望みであるから、もちろんそれは強要ではない。強要されたとして、そもそも希物なのであるから、そうそう簡単に手に入れられる筈もない代物である。それでも、貢物として納められた希物の量や質によって、あからさまに国に序列が付けられ、希物の代価として支払われる鴻札（鴻国発行の紙幣）の額が、その序列に少なからず影響を受けるとなれば、どの国の王も、無理をしてでもより多くの希物を集めるしかなかった訳である。

ちなみに、鴻札は鴻国とその周辺地域でしか流通していない紙幣なのであるが、鴻には、他のどの国よりも、希物に限らずあらゆる物品を高値で買い取ってくれる鴻商人たちがいたから、この世界の大半の物品は鴻へと流れ集まる様になっており、鴻札はそれらの品物を購入するための重要な資金となり得たのである。

ところで、比奈国が鴻から望まれたのは、『龍ノ鱗（りゅうのうろこ）』という希物であった。比奈国では、龍は神の御使いとも言われ、また、それ自体を神と崇めもする神聖な生き物であった。一方で、その鱗は万病に効く薬の材料になるとも言われていた。更に一説には、それは不老不死の秘薬とも言われ、世界でもっとも入手困難な希物とされていた。それは、数十年に一度、僅かばかりの量しか納められない希物でありながら、他国を抑え、比奈国を常に序列の最上位に位置づけるほどの逸品だったのである。

そして遠見の一族のみが、その特別な力によって鱗の持ち主である龍を探すことが出来た。美玻は、その一族の長の末娘だった。

それは五年前の夏至のことだった。

遠見の郷では、一年で最も昼の長い一日を、神が天より下り地上の災いを祓い清めていく特別な日として、毎年祭祀を執り行っていた。彼らは、まだ夜の明けぬうちから、郷から少し離れた所にある、果て見の頂と呼ばれる高みへ登った。

そこでまず、昇る陽に祈りを捧げ、神への感謝を示す祝詞を奉った。それから、遠見という、神からの授かり物を与えられた者たちが、一人ずつ順に喜びと感謝を申し述べる祝詞を唱えていく。その祝詞の奏上は、夏至の太陽が山の向こうに消えるまで、延々と続けられるのだ。

その特別な日は又、遠見の者たちが、それぞれの子供が遠見としていかほどの能力を有しているのか、頂に登らせて見極める『試し』を行う日でもあった。美玻はその年、ちょうど十になったばかりで、初めてその祭祀に参列することを許された。その年は美玻の他にも、数人の子供が祭祀への参列が許されていた。

父に手を引かれ、急な山道を草木を掻き分けながら登って行った先で美玻が目にしたのは、遠く霞が掛かるほどに彼方まで拓けた、これまでに見たことも無いような美しい眺望だった。

――世界はこんなにも広いものなのか。

四方を山に囲まれた小さな集落の中しか知らなかった少女の胸は、その大きな感動に踊った。

ところで、遠見の素養を見る試しとは、前もって遠くの村々に送っている郷人が、そこで掲げる色旗を、どこまで見分けられるかというものだった。

その日の試しで、一番遠方の村まで見分けられたのは、美玻ただ一人で、流石に族長の血筋は他の追随を許さぬ素晴らしいものであると、周囲の大人たちから口々に称賛された。

自分も遠見として、いずれ父のように比奈の役に立てるのだと、その時は、そんな証を貰えたような気して大きな嬉しさが込み上げた。そして、高揚していく気分が酔ったように、ただ幸せな気持ちで空を仰いでいた。

やがて訪れた夕暮れ。彼方の山に陽の帯びが差しかかり、その輝きは静かに弱くなって行く。天を朱に染めながら、背後から迫る濃紺の帳から逃れる様に、稜線を黒く浮き上がらせ始めた山の向こう側へ、太陽はするりと滑り込んだ。そこから朱色の空は、急速に濃さを増して茜の色へと移りゆく。その美しさに見入っていた美玻は、その茜の空に金色の帯のようなものが光ったのに気づいた。

――何だろう。

そう思って目を凝らした刹那、美玻の眼を強烈な反射が刺した。自分でも何が何だか分からな

いままに全身の力が抜けて、そこに倒れ込む。

「どうしたっ？」

父の声にそう問われて、体が抱き起こされたのが分かった。だが、目の前には白い光が明滅するばかりで、何も見ることが出来ない。

「お前・・・何を見た」

そう問われた父の声は、怖い程に低く響いた。

――見た？

そう言えば、光が目に入る前に見えたもの。あれはそう・・・

「・・・蛇みたいな生き物・・・でも角が生えてて・・・」

多分、周囲に集まっているのだろう人々の間に、一瞬ざわめきが広がって消えた。

――ああ、そうだ。それから、きらきらと光る真紅の眼がこちらを見ていた。

その真紅の色が、本当に宝玉の様にきらきらとあまりに綺麗だったから、つい見入ってしまったのだ。この世のものとも思えないその美しさに、自分はどうしても目を反らすことが出来なかった。

「・・・まさか・・・お前の目はそんな果てまでも・・・」

――果て？

「美玻・・・お前が見たのは、龍だ」

「・・・龍・・・？」

――あれが、龍。

郷では先祖からの戒めによって、その畏れ多い姿を直に見ることは、神に対する不敬であり冒瀆とされていた。その姿を見た者は神によって崇られ、天罰が与えられる、と。そう言い伝えられていた。郷に伝わる戒めが頭を過り、血の気が引いた。気が遠くなる。

「・・・とんでもないことをしてくれた」

父の苦渋に満ちた呟きを聞きながら、美玻の意識はそれきり遠退いた。

その日から、美玻は崇り者として龍神を祀る社に封じられることになった。神の裁きを待つ間、郷の他の者に災厄を広げぬようと、そこから出ることを禁じられたのである。

社の世話をする婆の他は、誰とも話す事もない。そんな生活が五年ほど続いたある日、お前は龍神様に生贄として捧げられることになったと、婆は言った。

そして夏至の陽が昇る前の晩に、美玻は捧げの祠に運ばれて封じ込められたのだった。

失意に項垂れていると不意に、額にぬるりとした感触があった。反射的に背筋に悪寒が走る。

——な、何？

すぐ近くに、何かの気配を感じた。小さくて生温かく湿ったものが頬の辺りに押し付けられ、同時に鼻孔に獣臭い呼気が広がる。

——何かの・・・獣・・・？

ふんふんという短い呼吸を繰り返しながら、ソレは鼻先を押しつけて獲物の様子を確認している・・・そんな感じだろうか。

犬のような狼のような・・・そう考えて、そこまで大きい獣が、ここに入り込むのは無理そうだと思う。積み上げられた岩の隙間から入ってきたのだとすれば、自分に危害を加えられる程大きな獣ではないだろう。そう気付いて、少し安堵する。ならば、鼠か猫か・・・

「いやだ、くすぐったいってば・・・ひゃああうう」

言った側から鼻先をぺろりと舐められた感触に、美玻は思わず素っ頓狂な声を上げた。すると、ぴんと張り詰めていた緊張の糸がふっと緩み、気が付けば可笑しさに口元を緩めている自分がいた。

「変なの・・・あたし、笑ってるなんて・・・」

——こんな所で。こんな時に。本当に変だ。

変と言えば、目隠しをしている布の向こうに、暖かな朱色の光を感じ始めていた。ゆらゆらと揺れるそれは、目の前で次第に大きく膨らんでいく。

——ああ、そうか・・・

もしかして、死ぬってというのはこういうことなのかと思う。

それならば、変なことも大歓迎だ。だって、どうしたって、痛かったり苦しかったりというのは嫌だから・・・だから、こんな風に穏やかなままで逝けるのなら・・・逝けるのなら・・・

「無事かっ？美玻」

「・・・え？」

誰だと思いう間もなく、肩に手が掛けられて少し乱暴に体を引き起こされた。そのまま体を抱き寄せられると、耳元で安堵のため息・・・のようなものが聞こえた。

「・・・無事で・・・よかつ・・・」

——誰？

体が抱きあげられた気配がして、それに狼狽したせいで、その問いを口にする暇はなかった。下ろせと言う前に、美玻の体はひんやりとした岩の上に座らされ、何が何だか分からないままに、今度は手と足とに、数人がかりが同時に縄を解いて行く気配がした。そして、美玻の体は直ぐに自由になった。

——あたし・・・いいのかな。生贄なのに・・・外に出ても。

戸惑いながらも、まだ少し痺れの残る手で目隠しを外そうと、両の手を頭の後ろに回す。だが、その結び目は思いの外固い。美玻が、なかなか解けない結び目に難儀していると、その手が誰かに掴まれて、膝の上に置かれた。そして、誰かの手が頭の後ろで結び目を解く感触があって、すぐに目を覆っていた布が取り払われた。

初めに目に入ったのは、近くで揺れる松明の光で、その眩しさに美玻は目を細める。と、  
「お前が、遠見の娘か」

目の前でそう訊く声がした。慌てて視点をそちらに合わせる。まだ良く見えていない目に、ぼんやりと男の顔の輪郭が映る。

——誰？

その顔を確認しようとして、眉間に皺を寄せる。すると、目の前の人物から軽い失笑ともいべき気配が伝わって、美玻は気恥ずかしくなって赤面する。

——あ、たし・・・そんな変な顔した？

「無理に見ようとするな。目が慣れるまでは、しばらくぼやけたままなのだろう」

見えないままなのは落ち着かなかったが、そう言われてしまっては、自然に元に戻るのを待つしかない。

それにしても・・・

「・・・あたし・・・どうして？」

この状況は、助けられたと言っていいのだろう。だが、崇り者である自分が生贄にならなければ、郷に災厄が降りかかる。自分が祠を出てしまったら、郷はどうなるのか。そんな不安が生じる。

「訊いているのは、この私の方だ」

「・・・はい」

「そなたは間違いなく、遠見の娘なのか？」

「・・・そうです」

「よし、上々だ。沖斗（オキト）、この娘を馬に乗せよ。我らにもまだ、運は残っているようだ」

「承知致しました、洗由様」

——コウユウ・・・サマ・・・？

その名には覚えがあった。比奈王の何番目だかの息子の名だ。何となく尊大な物言いをすると思えば、そういうことなら納得出来る。洗由は立ち上がると、美玻の側から離れて行く。代わりに、洗由に声を掛けられて、暗がりで見守っていた少年・・・沖斗が姿を見せた。

「・・・立てるか？」

声を掛けられて頷き、立ち上がったものの、足を踏み出した途端に、美玻は小石を踏みつけてよろめいてしまった。すると、腕が掴まれて体が支えられる。

「ありが・・・とう」

見上げた沖斗に表情はなく、美玻が体勢を立て直すか否かという間合いで、その手はすぐに離される。

そして——

「もたもたするな、行くぞ」

固い声を残して、沖斗は踵を返し、松明を掲げて待っている仲間の方へ足を向けた。

——ああ、そうか・・・

この空気には覚えがあった。この五年、嫌という程感じ続けていた空気。社守の婆の元にやって来る人々は例外なく、こんな空気を纏っていた。

崇り者には関わりたくない。

崇り者は怖ろしい。

そう思っている者の纏う空気だ。

——そうだよな。

関われば、関わった者もまた崇りを受ける。そう言われているのだから、それは当然のことだった。

「・・・ごめんなさい。ごめん・・・なさいっ・・・」

馬に乗れと言われて、乗り方すら分からなかった美玻は、決して大柄ではない沖斗に、下から体を支えて押し上げて貰っているのだが、そうまでしても、美玻の手は馬の横腹を撫でるだけで、そこをよじ登ることが出来ない。

自分になど関わりたくないのだろうに、こんなにまで手間を掛けさせてしまうのが心底申し訳なく思えて、謝罪の言葉が絶えず美玻の口を付いて出る。

「黙れ、ごめんなさい、ごめんなさいと、連呼するなよ、鬱陶しい」

「ごめ・・・」

下から不機嫌そうな声を掛けられて、また謝罪の言葉が出掛けた所で、視線を向けた沖斗がこちらを睨んでいるのに気づき、その言葉を半ばで飲み込む。

——ごめんは禁句。禁句だから。

美玻が自分に言い聞かせていると、体を支えていた手が離されて、美玻の体はずるずると地面に引き戻された。また一からやり直し。そう思うと、情けなくてため息が出た。言葉にはしないまでも、申し訳ないという目を向けた美玻の前で、沖斗は手綱を掴み、鐙に足を掛けたと思ったら、いとも易くひらりと馬に跨った。

「凄い」

思わず感嘆の声を上げると、沖斗が顔を顰める。

「馬鹿言っていないで、手を出せ」

「手？って・・・こう？」

美玻がその意味を飲み込まないまま、手を差し出すと、手がぐっと握られて美玻の体がいきなり浮き上がる。

「・・・えっえ？」

沖斗のもう一方の手が、器用に美玻の腰のあたりを抱えると、その小さな体は、あっという間に馬の上に引きあげられていた。

「変な声を出すなよ」

迷惑そうな沖斗の声が、いきなり至近距離から聞こえた。そのことに、動揺が更に増幅される。

「え・・・だっ・・・て一緒に乗る・・・って・・・」

「お前、一人で乗れるのかよ」

「それは・・・無理だけどっ・・・でもっ」

——嫌じゃないの？あたしと一緒には・・・崇り者と一緒は・・・きつと嫌・・・よね？

そこへ、すでに騎乗を終えていた仲間から声が掛かる。

「沖斗、準備は出来たか？」

「はいっ。問題ありません」

その応えを合図に、前方で次々に鐙を蹴る音と馬のいななく声が聞こえて、洗由を先頭に十人程の隊列が走り出す。美玻の乗った馬はその隊列の最後に続いた。

走り出してすぐ、何かが焼け焦げたような嫌な臭いが鼻に付いた。振り落とされたら、またこ

の人に迷惑が掛かる。そんな思いで、馬上で想像以上に跳ね上がる体が滑り落ちないようにと、必死にたてがみにしがみついていた美玻だったが、その臭いに不穏なものを感じて顔を上げ、辺りを見回した。

いつの間にか夜は明けて、西の空に僅かに星が残るばかりの朝が訪れていた。陽はまだその光を見せていなかった。辺りには朝靄が立ち込めており、視界が悪かった。それでも、その白い靄の中に、不気味な黒い影が浮かび上がっているのが分かる。一旦そう気付いてしまうとすぐに、同じような影がそこらじゅうにあることに気づいた。よくよく見ればそれは、黒い炭のような塊で、靄はその黒い物体から湧き出していた。そう気づいた時、その光景が何を意味しているのか、美玻は悟った。

これは何かが燃えた跡で、この靄はその煙がまだ燻っているせいなのだろう。では、視界を白く遮る程にいったい何が燃えたのか。それは、生贄の祠から山を下った場所にあったもの・・・ここは・・・まだ遠見の筈だ。ならば、それは――

目の前の腕を縋る様に掴んでいた。それでも、沖斗は表情一つ変えず、前を見据えたまま、馬を走らせている。

「・・・郷は・・・遠見の郷・・・は」

息苦しさを感じながら、ようやくそれだけ声を絞り出す。事実を確認するよりも先に、もう何かを確信してしまっている心が、悲しみを膨れ上がらせて涙で喉を詰まらせた。

「遠見の郷はもうない。全て焼け落ちて無くなった」

沖斗の淡々した声がそう告げた。

「生き残った遠見は、お前だけだ」

――あたし、だけ・・・？

自分だけが死ぬ筈だったのではないのか。それが崇り者の定め of 筈だったのに。何故自分だけが生き残るのだ。喉が締め付けられるような感覚に、息が出来なくなる。

――崇り者が生き残ったから。

だから、郷が代わりに消えた。そうではないのか。そう思った所で、美玻は意識を失った。

不意に腕に重みが掛かったのを感じて、沖斗が眉根を寄せて視線を落とす。

「・・・おい、ちゃんと掴まっていないと落ち・・・」

言い掛けて沖斗は、美玻が自分の腕の中ですでに気を失っていることに気づいた。その顔に、丁度昇って来た朝陽が差しかかり、涙の痕を浮かび上がらせた。

「・・・裁きの夜が明けた、か」

呟いて仰いだ空は、あの日と同じ蒼い空。そして、天から降り注ぐ夏至の日の眩しい光が、また地上に満ちていく。

その光と共に神は龍に乗り、天より下り来るのだ。地上の災いを祓い清めるために。

「・・・美玻、生き残ったのはお前の方なんだ・・・」

――運命を決める長い一日が・・・五年前と同じ夏至の日が、また始まる。

「だから・・・生きろ・・・」

それもまた、辛い定めとなるのかも知れない。それでも、神は多くの犠牲と引き換えに、美波が生き残ることを許したのだ。

だから――

湿り気のある暖かい・・というよりも少し暑さを感じるほどの、どちらかと言えば不快な空気に全身が包み込まれた感覚に、美玻は意識を取り戻した。

白い湯気の立ち上る中を、脇と足とを誰かの手に支えられながら、美玻の体は運ばれて行く。肌を撫でた湯気の感触に心許なさを覚えた瞬間、自分が着衣を何ひとつ身につけていないことに気づく。

――ええっ？あたし何で裸っ！？

ぽちゃん。尻が温めの湯に触れた。

「うえっ・・」

珍妙な悲鳴を上げるよりも先に、ざぶりと全身が湯に落とされた。

「な・・っ？」

「ああ、気が付いたわね・・」

背中若くは若い女の声がして、脇を支えていたらしい彼女の腕が抜き取られる。

「良かった。これで少しは仕事がやり易くなるわ。目が覚めたなら、あなた一人でも平気ね、ユウラ？私は着物の用意をしてくるから」

「了解です、ナミさま」

ナミと呼ばれた若い女は、そのまま湯気の向こうに姿を消して行く。それを見送る間もなく、ユウラが袖をまくり上げた腕を湯に突っ込んで、美玻の足を掴んで持ち上げた。

「あ、あの・・」

「陛下の御前に出ても、粗相のない程度の体裁を整えさせろ、と。沖斗様のお申しつけなのよ。だから、じっとしてて」

いかにも肌になめらかな感触の布で、せっせと足を擦りながらユウラが言った。

――沖斗様・・

ああ、あの一緒に馬に乗っていた人か、と思う。そんなことを考える間にも、ユウラの手はせっせと動き、美玻の体を磨き上げていく。

「ああ、あのっ。あたし、自分で洗えますから・・」

「・・いいのよ、これが私の仕事だし。今日は私、これのお陰で、薪運び免除されてるし・・あれって結構重労働なのよ。だから、気にしないで任せてて」

「・・いえ、そういうことではなくて・・単純に恥ずかしいというか・・」

「いいから、いいから」

「でも・・っ・・」

頭の上から湯を浴びせられて、懇願の声は水音に飲み込まれる。

――というか、あたしの意志みたいなものは、そもそも考慮の外ってことなのか。

ユウラの手が、自分の絡まった長い髪を丁寧に解いて行くのを感じながら、美玻は諦めて湯に身を少し沈める。この場合、彼女にとっては沖斗、そしてナミの命じたことを忠実に守ることが何より重要なのだ。たとえそれがお願い程度のものであっても、美玻はユウラに何かを頼める立場ではないということなのだろう。

「・・あの。訊いても構わないですか？」

「え？ああ、何？」

「沖斗様というのは、どういうお方なのですか？」

「沖斗様？ああ、あのお方は、比奈国第五王子、洸由様のご配下で、年はまだ十八とお若いけれど、洸由様のご信頼篤く、城仕えをして五年足らずで、すでにその右腕と言われるお方よ」

「・・城仕えの前には何を？」

「さあ・・そこまでは知らないわ。真面目すぎてあまり愛想があまりにならないけれど、年頃の娘たちには、人気があるのよねえ・・兵の調練の時など、それはそれはかっこいいんですもの」

そう言いながら、ユウラがうっとりとした表情を浮かべる。大方、ユウラも他の娘たち同様、沖斗に好意を抱いている口なのだろう。

「・・もしかして、あなた。沖斗様が気になる、なんてことは・・」

「あ、いえ。そういうことでは・・」

「そうよねえ・・無いわよね。あり得ないわよねえ」

安堵したような声の後で、くすりと笑いが漏れ落ちた。

「あなたをここに置いて行かれた時も、何て言うか、完全に荷物扱いで、肩に担いでいたのをそのまま床にごろり・・だったものねえ」

女以前に人間扱いすらされていないのだから、余計な夢は見るなど、そんな含みを感じる。美玻が気にしていたのは、全くそんなことでは無かったのだが、そこは当たり障りなく笑ってやり過ごした。

髪を洗い終えたユウラが、仕上げに桶に湯を汲み、美玻の体に注ぎかける。湯に香油が混ぜられているのか、全身がふわりと心地の良い空気に包まれて、美玻は目を閉じた。そこに、沖斗の顔が浮かぶ。

――前に。

会ったことがあるような気がするのだ。

美玻は生まれてこの方、郷の外へ出たことはなかった。だから、可能性があるとするれば、沖斗の方が郷にやって来たことがあるのだということになる。更に言えば、この五年、美玻は社に籠っていた訳だから、会ったのだとするれば、それよりも前・・ということになるのか。それは、自分がまだ、何も考えずに自由に空を仰ぎ見ていた頃――

社に入れられてから、もう二度とは戻れない暮らしのその記憶が辛くて、なるべく考えないようにしていた。忘れるようにしていた。その甲斐あってと言うべきか、その頃の記憶は、美玻の中ではもう遠いものになっていて、結局、彼女には何も思い出すことができなかった。

湯浴みを終え、ナミの持って来た着物――それは地味なものだったが、仕立ては良い代物だった――を、やはりこれも自分の意志とは関係なく着せられた。そして、ユウラが美玻の長い髪を、器用に結び上げて整え終わった頃、沖斗が姿を現した。

沖斗は、表情一つ変えず、美玻の姿を検分するように確認した後で、ただ「付いてこい」とだけ言った。

長い板張りの廊下を、無言で歩いて行く沖斗の後を、美玻は言われたままに、ただ付いて行

く。やがて辿り着いた広間の入り口手前で、沖斗が立ち止まり、そこで何かを確認する様に振り返って、美玻を見据えた。

「・・・何でしょうか？・・・あたし、どこか変・・・ですか？」

ただ見られているばかりの沈黙が落ち着かずに、思わず訊くと沖斗の両手がすいと伸びて、美玻の肩に乗せられた。

「え・・・あのっ？」

「・・・小さい肩だな」

そう呟いた瞬間に、肩を掴む手に力が込められた気がした。沖斗の手はすぐに離れてしまったから、それは美玻の気のせいだったのかも知れない。

——小さい肩って・・・どういう意味？そりゃ、小柄なのは確かだけど、それが一体・・・

「遠見の娘を連れて参りました」

沖斗の良く通る声がそう告げた。

——遠見の娘。

その言葉で、美玻は自分がここに連れて来られた理由を悟った。

『生き残った遠見は、お前だけだ』

沖斗に言われた言葉が脳裏に浮かぶ。

美玻は、遠見として王に呼ばれたのだ。たった一人の生き残りだから。自分がその名を、背負わなければならない。もう自分しかいないから。自分が遠見として、比奈王の役に立たなければならない・・・そういうことなのだ。

急に、肩にのしかかる、遠見の名の重さを感じた。

——ああ、この人が言いたかったのはそう言うことなのか。

遠見の名を負うには小さな肩だと。沖斗はそう言いたかったのか・・・

「入るが良い」

広間の中から、男の声がそう言ったのが聞こえた。だが、心の準備も何も無いいきなりなのに、足が竦んで前に出ない。体が小さく震え始めたのが、自分でも分かる。でも、その震えを止める術さえも分からない。

「早く行け。陛下をお待たせするつもりか」

せつ突くように、沖斗が言って、美玻の背を押した。

「・・・で、でも、あたしはっ・・・ずっと社にいて・・・そりゃ、父は遠見の長だったけど・・・あたしは遠見なんかじゃ・・・」

「お前は、龍を見た遠見なのだろうが」

「え・・・」

郷の者でもないのに、沖斗は何故それを知っているのか。

「いいか。ここまで来て、私は遠見じゃありません、なんて言ってみろ。命はないと思え」

「・・・でもっ。無理なもの。あたし・・・何も分からないし、何もでき・・・ない・・・」

「お前はっ、折角拾った命を、捨てることになってもいいのかっ」

語気を荒くした沖斗に、それでも美玻は無理なのだということを訴えるように必死に首を横に振った。

だって、自分は遠見ではないのだ。遠見になりそこなった、出来損ないなのだ。存在することすら許されない崇り者の身で、国王の御前に出ることなど許される筈もない。

美玻がもたもたしていると、入口から壮年の男が顔を出して、こちらに声を掛けた。

「何をしている、早くせぬか」

「申し訳ございません、宰相閣下、只今。さあ・・・」

しかし、そう促されても、美玻は立ち竦んだまま震えるばかりで動けない。その有様に業を煮やしたように、沖斗はいきなり美玻の腕を乱暴に掴むと、そのまま強引に広間の中へと引き摺って行った。

「いや・・・離し・・・」

抗議も半ばに、沖斗の手が離れて、体が床に投げ出された。美玻はその場に平伏させられた格好になる。

「そなたが遠見か」

頭の上からやや不機嫌な色を帯びた威圧感のある声が降ってきた。そのたった一言で、心臓が飛び跳ねて体が硬直する。ただ、頭を垂れている事しか出来ない。

「構わぬ、面を上げよ」

「・・・」

怖くて声が出せない。ましてや顔を上げることなど望むべくもない。広間には大勢の人の気配があった。そのせいか、熱気に包まれていて、体に押し掛かる空気自体が、とても重く感じられた。

「・・・どうした？早くせぬか」

苛立ちを含んだ声が急かす。

「・・・」

汗が額を伝って床に落ち、そこに小さな染みを作った。それでも、顔を上げることが出来ない。すると、

「恐れながら・・・」

頭上で別の声があった。

「昨夜は何しろ強行軍で、火急の事態とて、我ら、僅か半日でここへ舞い戻った次第」

「うむ。そなたの働きには感心しておる、洸由」

「お言葉、有り難く存じます陛下。ご報告致しました通り、遠見の郷の有様は、誠に酷いもので・・・恐らくこの娘も、まだ気が動転しておるのでございましょう」

「さりとして、夏至の太陽も、もう中天を過ぎて西へ傾き始めておる。そう悠長なこともしておられぬ」

「承知しております・・・」

洸由の声が近くなったと思うと、傍らに膝を付く気配がして、顎に手を掛けられた。そしてそのまま、ぐいと無理やり顔を上げさせられる。そんな扱いをされて、美玻は竦み上がり更に身を固くする。そんな美玻の耳元に洸由の声が囁く。

「・・・陛下が顔を見せろとおっしゃられたら、すぐにお見せするのだ、この無礼者めが・・・」

「・・・申し訳・・・ござい・・・ません」

「立て」

顎を掴まれたまま、よろめきながら、それでも洸由の恫喝めいた囁きに怯えて、美玻はよろよると立ち上がる。

何かに救いを求めるように、美玻の目は広間に控えている人々の間を泳いだ。そこに彼女を助けてくれる者がいる筈もなかった。

広間の奥の玉座に腰を下ろしている初老の男が比奈王だろう。その右側に、先ほど沖斗が宰相と呼んだ壮年の男が立っていた。そしてその反対側には、洸由と同じか、もう少し上の年頃の、比奈王の子息息女と思しき若者たちが数人並んで立ち、一様にどこか冷めた目で事の成り行きを見ていた。

「・・・そなた、遠見の役割は承知しておろうな」

洸由の鋭い声が言う。

「・・・あたし・・・はっ・・・」

「承知しておろうな？」

有無を言わせぬ強い口調で、念を押すように重ねて問われた。緊張に口が渇き、喉が張り付いて、容易に声を出すことが出来ない。それでも、美玻を見据える洸由の鋭い瞳は、彼女が何も言わずにいることを許すものではなかった。

「・・・我ら遠見の者は・・・比奈王の御為に・・・龍の・・・探索を・・・」

「そうだ。龍を探すのが、そなたら遠見の役目だ。そして、今やこの国には、そなたの他に遠見がおらぬ。となれば、そなたがその役目を果たさなければならぬという道理は理解出来よう

な？」

自分の他に、遠見はもういない。

改めてその事実を突きつけられて、血の気が引いた。

——あたしが・・崇り者だったから。郷が・・皆があんな酷いことに・・あたしのせいで・・あたしが・・

そう思うと、足の力が抜けて、美玻はそこに座り込みそうになる。しかし、その体を泷由の腕が咄嗟に支えた。自分は倒れることすら、許されていないのだと感じる。

「しっかりしろ。そなたが遠見の役目を果たせなければ、この比奈は傾くのだぞ。足に力を入れて立たぬか」

——・・あたし・・が・・何・・？

「いいから来い。そして、見るのだ。夏至に天より下るといふ龍の姿を」

泷由は、まだ足元の覚束ない美玻の腕を掴むと、そのまま引き摺る様にして広間を横切って行く。広間の後方に控えていた臣下の者たちが、その様に驚き慌てて左右に避け、二人の行く道を空ける。

泷由の背が、開け放たれた扉から差し込んでいた夏の強烈な光に飲み込まれて、美玻は眩しさに思わず眼を閉じた。

そのまま、腕を引かれるままに数歩足を踏み出したところで、頬を清涼な風が掠めた。目を開くと、彼らは見晴らしの良い露台に立っていた。

「・・・凄い」

瞬間、美玻は何もかも忘れてその光景に見入る。

もともと城自体が、丘陵の高台に作られているのだろう、果て見の頂には比べるべくもないが、そこからの眺めも素晴らしいという言葉で表わされることに、何ら遜色のあるものではなかった。

遠く地平の先に、きらきらと紺碧の光が反射しているのが見える。あれはもしかしたら、海というものではないだろうか。文献で読み、想像するだけだったものが、今、目の前に見える。本当は、見ることなど叶わぬ筈だった景色を自分は見ている。そう思うと、否も応もなしに胸が苦しくなった。とりもなおさず、それは美玻が、この世界でたった一人の遠見となったせいには他ならないのだから。それでも、目の前に広がる景色の見事さに、見ることを止められない。哀しみと喜びと、相反する感情が同時に心を締めつける。あまりに多くのものが目に飛び込んで来て、頭がぐらくらし始めた。それでも尚、手摺にしがみつく様にして美玻はその景色を見ていた。

露台の手摺に手を掛けて、そこに体を預けているのは、矢張り体が辛いせいなのか。そう思いながらも、洸由には美玻が身を乗り出しているようにも見える。

一寸前までは、怯えきって全く生氣のない顔をしていたものが、今はその琥珀の瞳がいかにも生き生きと輝いている。洸由は口元を歪め、僅かに笑みを浮かべて確信した。

——間違いない、こいつは遠見だ。

世界の全てを見るために、生まれて来た者なのだ。

「何が見える？」

「・・・海が」

「海、だと？」

この娘は今、海と言ったのか。洸由が問い質すと、美玻がこちらに顔を向けた。その瞳は思いがけず、涙で潤んでいた。

「・・・何を泣く」

「・・・分かりません・・・ただ・・・色々な気持ちが込み上げて・・・良く分からな・・・」

「・・・まあいい。それよりも今、海が見えると言ったな？」

「・・・はい。あちらの谷のずっと先の方に・・・あれは、海というもので宜しいのですよね？」

「ああ・・・」

本当に、見えるらしい。この娘には、隣国の十季（トキ）をも越えた先にある海までもが。もちろん洸由には見えていない。知識として、そちらの方角をずっと行った先に海がある、ということを知っているだけだ。

——これは、もしかしたら、とんでもない力の持ち主なのではないのか。

そんな思いに、心がざわめく。また再び、景色に取り込まれるように、無心に遠くを見詰めている娘の姿に、洸由は畏怖・・・のようなものを感じた。

それは、この春先のことだった。

宗主国である鴻から、皇帝の親書を携えた使節が比奈国に下った。それはありていに言えば、希物の催促をするために送り込まれた使者だった。

前回、比奈の希物である龍の鱗を献上してから、すでに三十年に近い時を経ていた。故に、そろそろ催促が来てもおかしくはない時節ではあったのである。特別に驚く事柄でもなく、王宮の者は皆、ああ、またその時期が来たのかというぐらいの感覚だった。

慣例に則り、すぐに、遠見の郷に龍探索の為の遠見を差し出すように触れが出された。その使者に立ったのは、沖斗である。彼がその重要な仕事を任されたのは、洸由の王宮での、現在の立場と関わりがあった。

洸由は比奈国では、第五王子という微妙な位置にいる。王位継承の可能性があるのは、せいぜい三番目ぐらいまでが関の山だ。現王太子とその次兄は、共に文武に秀で優秀な人物であったから、現実問題として、ここはまあ抜けないだろうと考えているのだが、自分の上二人ぐらいは、実力的に何とかかなりそうなのではないかと、ここ数年考えるようになっていた。

ちなみに、比奈では継承順位は年の順ではないから、可能性は無いことも無いのである。戦や不慮の事故や病。そういったものは、少なからずある。三番目に付けていけば、もしかして・・・という確率は、ぐっと高くなる。洸由は常からそんなことを考えていた。

――手柄さえ立てれば。

鴻よりの使者が来た時、隣国との国境の小競り合いの制圧の為に、王太子は城を空けていた。第二王子は、前年より人質の名目で鴻へ遊学中である。武芸に秀でていた洸由は、王太子の供をして国境の制圧へ赴いていたのだが、戦況報告のために、ちょうど城へ戻っていたところだった。

希物探索に関われば、大きな手柄を期待できる。すぐさまそう判断した洸由は、遠見の郷に程近い村の出であり、その辺りの地理に明るいという沖斗を、迷わず使者に推挙したのである。

沖斗が持ち帰った遠見の長からの返答は、郷では次の夏至までに、為さねばならぬ祭祀を控えているから、探索はそれまで待つて欲しいというものであった。

何でも、郷には現在崇り者と呼ばれる忌人（いみびと）がおり、それを祓い清めておかねば、神聖な探索に悪い影響が及ぶことになるという話だった。それに、そもそも龍の探索は、夏至に天下る龍の残す痕跡を手掛かりに行われるもので、夏至から時間が経ち過ぎてしまっている今の時期では、その痕跡を見つけにくいのだという。

そんな理由を付けられれば、比奈王としても納得しないわけにはいかず、探索はその祭祀がつつがなく執り行われた後、即ち、夏至を待つて行われる、ということで決まった。

そして、洸由が正式な出迎え役として、遠見の郷へ出立したのは、夏至を数日後に控えた日のことだった。

城を出る所から、もうすでに儀式のうちであるから、洗由たちは宮中の正装姿で、遠見を運ぶ螺鈿細工の施された特別の輿をしたがえて、馬を常歩でゆっくりと進めなければならなかった。だから、郷までの道程には、徒歩とさほど変わらない日数を要した。

そうして彼らは、夏至の前日、その陽が暮れ落ちる頃に郷に到着したのである。

翌日の夏至に、彼らは探索を担う遠見と共に果て見の頂と呼ばれる遠見の聖地に登り、まず龍の気配を見る。そして、いったん王宮に戻り、王へその首尾を報告した後、本格的な探索へと赴く。大まかにはそういう手筈であった。

ところが、郷に着いてみれば、出迎えの者がいないばかりか、郷はひっそりと静まり返り人の気配すらなかった。不審に思った洸由は、沖斗と他数名の者に郷の中を探らせた。そして――やがてもたらされた報告に、洸由は驚愕させられることになる。

郷では、数百はいたであろう人々が皆、一人残らず絶命していたのである。外傷もなく、皆一様に、眠る様に事切れているという。赤子から年老いた者まで、一つの例外も無く、郷は完全に死に絶えていた。原因は分からない。ただ、これが疫病の類であった場合に、この状況をこのまま放置することは、他所への被害の拡大を意味する。それを防ぐためには、このまま郷を燃やすしかない。洸由はすぐにそう決断し、躊躇わずにそれを実行した。

――我らは、龍探索のための遠見を失った。

郷を飲み込んで行く炎の渦を、洸由はそんな思いを抱きながら苦々しい表情で見据えていた。いかなる理由があろうと、事を成せなかったという事実は、この比奈では、それを指揮した者の不徳とみなされる。大きな手柄を期待して関わった事が、一転して、洸由を失墜させる大きな失点となったのだ。この汚名をそそぐのは容易なことではないだろう。それに、この比奈はどうなる。遠見の力なくしては、希物を探すことは出来ない。希物が献上できないとなったら・・比奈そのものの存亡に関わる事態にもなりかねない。

――そのきっかけを、この俺が作ったということになるのか・・

洸由が暗澹たる気持ちになっていくのを嘲笑うかのように、炎は龍のようにうねり踊りながら、暗い夜の闇へと昇って行った。

その時、失望の淵に立っていた洸由に一つの希望を示したのが、彼が最も信頼を寄せていた沖斗だった。

今宵、姿返しの儀と呼ばれる祭祀が、郷から少し離れた山腹の祠で行われることになっているという話を、自分は以前郷長に聞いた。その祭祀には、遠見の一人が、神への生贄として捧げられるという話で、もしかしたら、その者が、生き残っているかもしれない。沖斗はそう言った。望みは薄いかもしれないが、もしかしたら、或いは・・と。

そうして、彼らが岩を積み上げて塞がれていた生贄の祠から掘り出して来たのが、この娘だったのだ。

容赦なく照りつける夏の日差しが、不健康に白く透き通った娘の肌に降り注ぐ様が見るに痛々しい。沖斗の話では、この娘は、生贄として、この五年を、郷の龍神を祀る社から出ることを禁じられ、ずっとその中で過ごしていたのだというから、色の白さもそのせいなのだろう。

崇り者として忌み恐れられていた存在。夏至を迎える前の晩に、姿返しという祭祀によって、天へ捧げられる。それが、この娘の運命の筈だった。遠見独特の野蛮な風習など知ったことではないが、常識的に考えて、これほどに見える娘を生贄にするなど、どうかしているとしか言いようがない。

――なぜ崇り者などと。

娘は、熱心に遠くを見据えている。その目には一体、何が映っているのかと考える。

「・・・どうだ、娘。今度は何が見える？・・・そなた、ちゃんと龍の手掛かりを探しているのであらうな・・・」

遠見は、夏至に天下ると言われる龍の残す痕跡を見るのだと聞く。龍が各地に残していくその痕跡を辿り、年ごとに変わる、龍の巣と呼ばれる龍の棲みかを突き止める。龍の痕跡は、夏至を過ぎると次第に薄くなって行く。だから、その痕跡を探るならば、夏至の日が最良であるとも。

「・・・」

美玻からの返答はない。

「おい・・・」

洸由が声を掛けると、天空を仰いでいた美玻が、驚いたように目を見開いて、ぶるっと身を震わせた。

――何だ？

その様子を不審に思い、美玻の見ていた空を同じように仰ぐ。

と、遠くの空で、不意にゆらりと空気が揺れた。只ならぬ気配に視線を戻せば、美玻は腰が抜けたようにその場に座り込んでいた。

「・・・見てない・・・あたしは何も・・・見てません・・・」

顔に怯えたような色を浮かべ、美玻は、何度も首を横に振って、うわ言のようにただ否定の言葉を繰り返す。

「・・・見た・・・のか？まさか・・・」

――痕跡ではなく。まさか、そのもの・・・？

「何を見た？本当のことを言え」

元々白かった顔が、みるみる生気を失って更に蒼白になっていく。そして、気の毒なぐらいに怯え震え始めた。

「・・・見てない・・・そんなもの・・・見たら・・・みんな死んでしまう・・・またそんなものを・・・見たりしたら・・・祟りが・・・」

――見たら、祟る？・・・それは、龍を見たら祟る・・・という意味か・・・

祟り者として生贄にされかけていた娘。もしかして、祭祀がきちんと行われなかったから、郷に災いが降りかかったとでも言うのか。

――馬鹿な。そんな話があるものか。

この娘は、何かを見たのだ。遠見として、龍に関わる何かを。それなのに、何故、口を閉ざす。ここで美玻が何も見えなかったと言えば、洸由は、遠見を失った責任を取らなければならない。

「言え、何が見えた。言わぬかっ」

怯える美玻の肩を掴み、強く揺さぶる。

「そなたは遠見なのだろうが。比奈の王に仕える遠見でありながら、見えたものを告げぬということは、万死に値する所業であるということを理解しているのか・・・この場で、死にたいのか」

洸由の強い口調にも、美玻はただ首を横に振るばかりで、その口は閉ざされたままだった。

## 第2章 王女の絵師

「・・・洸由。よもや、お前は遠見を失った責を逃れようと、遠見ではない者をここへ連れて来たのではあるまいな」

背後から、洸由のすぐ上の兄である第四王子、瀬津（セツ）の嘲笑うような声がした。日頃、自分よりも何かと目立つ弟を目ざわりに思っていた瀬津は、その失態を見つけるや、嬉々として追い落としを始めたい。そんなあからさまな揚げ足取りに、洸由は唇を噛む。娘がこのまま何も言わなければ、洸由に反論する術はない。

元々小さな体を、小動物のように更に小さく丸め、頑なに全てを拒むような娘の姿勢に、洸由は困惑と苛立ちを抱えたまま、ただ立ち竦むばかりだ。

この状況に、比奈王はどう裁可を下すのか。張り詰めた空気がその場に流れていた。

そこへ――

「全く、洸由兄さまのなさり様は、粗雑でいけませんわ。かわいそうに、娘が怯えているではありませんか」

そう言って露台の入り口に姿を見せたのは、第三王女の波紅（ハク）だった。陽に焼けることを嫌ってなのだろう、波紅は庇の影の落ちる際へ立ち、それ以上は近づいてこない。

洸由よりも三つ下の妹であるが、その性格は案外したたかであり、油断のできない相手であった。女にしてはややきつい気性ゆえに、もう二十を数える年となっても、未だ嫁ぎ先が決まらない。女子は王位を継げないから、洸由がこの妹を競争相手に数えることはないが、もし彼女が王子であったなら、好敵手となったであろうと思う。

「恐れながら申し上げます、陛下」

波紅が広間へ向き直って膝を折り、比奈王へ奏上の許しを求める。広間の奥からそれを許す旨の言葉が返ってくると、波紅は透き通った綺麗な声で、自らの考えを申し述べた。

「私の抱えております絵師で、スズリと申す者がおりますのはご承知のことと存じますが・・・この者は、物腰は柔らかく、心細やかな配慮も出来、そして何より、その筆で描けぬものはないという、誠に才長けた者にございます」

――絵師、だと。

洸由は、波紅の話に眉を顰める。その絵師ならば、良く知っている。絵の才は確かに目を見張るものがある。しかし、洸由の印象はあまり良いものではない。女ならば、例外なく見惚れてしまうような美丈夫で、性格も穏やかな優男であり、愚かにも、そんな男にこの妹は入れ上げているという。常に側に起き、身の回りの世話のみならず、夜伽までもさせていると、そんな噂までも耳に入っている。一度、その件に関して、宰相から王へ苦言が奏上されたが、絵師の類まれな才を手放すことがいかに国の損になるかという波紅の巧みな弁明が功を奏し、絵師に関しての事は些事であるとして捨て置かれた。実直な宰相は、それに関して、未だに不満を漏らしているという。

「その者に、この娘と話すことをお許し頂けますれば、娘の見たものを寸分違わず描いて見せることをお約束いたしましょう」

もし、波紅の言うように、絵師が娘の見たものを描くことができれば、この王宮において、も

はや絵師の存在をとやかく言える者はいなくなるだろう。

――しかし、絵師ごときに。

自分の足元でうずくまったままの娘を見下ろして、洸由はまだ半信半疑だ。しかし、王は波紅の突飛とも言える言い分を認めた。そして、広間の後方に控えていた絵師が、波紅の呼び出しに応じて姿を見せた。

相変わらずの涼やかな顔で、口元には穏やかな笑みを浮かべている。そんな男が洸由の元に近づいてくる。洸由が苦虫を噛み潰したような顔をして脇へ避けると、「失礼いたします」と、洸由に対して礼儀正しく頭を垂れて、絵師スズリは美玻の側へ膝を付いた。

「ご気分はいかがですか？」

スズリはまず、そう声を掛けたが、反応はない。

「ここは日差しが強うございますね。宜しければ、あちらの日陰へ参りましょうか。お立ちになれますか？手をお貸し致しますか？それとも、抱き抱えてお運び致しますでしょうか・・・」

言いながら、美玻の肩にそっと手を置いた。それに反応して、美玻が僅かに体を強張らせた。

「大丈夫、何も心配はいりません。私は、波紅様にお仕えしております絵師で、スズリと申す者です・・・」

「・・・絵師・・・さん・・・？」

美玻が顔を伏せたまま、小さく声を発した。

「スズリです」

「スズリ・・・様・・・」

「いえ。私は、あなたと同じで、官位など特に持たぬ身ですから、どうか、そのままスズリ、と」

「・・・スズリ・・・？」

「はい・・・あなたのお名前を伺っても構いませんか？」

「・・・あたし・・・は・・・」

美玻の声がそこでふっと途切れて、その体が傾いでスズリに寄りかかった。

「・・・この暑さに、気を失われたようです。この娘を、涼しい場所にお移ししても宜しいでしょうか？」

顔を上げたスズリに、洸由が頷くと、美玻の小さな体は、スズリに抱き上げられて、日陰へと運ばれて行った。そして、波紅の命で程なく長椅子が運ばれてくると、そこへ横たえられた。傍らに付き添う形で脇に座ったスズリが、運ばれて来た冷水に布を浸し、丁寧にその顔を拭い、額を冷している。

美玻の存在はもう完全に洸由の手を離れ、波紅の手の内に入ってしまったと言えるだろう。洸由は口元を歪めて、そんな状況を見据えていた。

額から伝わる冷気の心地よさに、美玻はすぐに意識を取り戻した。

「お加減はいかがですか？」

傍らに、先程スズリと名乗った青年がいて、そう訊いた。その後方には王女である波紅が立ち、どんな感情を当てはめればいいのか分からないような、静かすぎる澄んだ瞳で美玻を見下ろしていた。

スズリが、美玻の腕を取り、脈を確認するような仕草をする。

「・・・怖いものを・・・ご覧になりましたか？」

何の前触れもなく、スズリがいきなりそう言った。

「・・・どう・・・して・・・」

「・・・龍が・・・怖いのですか？」

重ねてスズリが問うた。

「・・・」

今まさに、心に抱え込んでいる恐怖の理由を、そのまま覗き見たかのようなスズリの言葉に、美玻は戸惑いを隠せない。そんな美玻に聞かせるように、スズリが続ける。

「遠見の伝承にはこうあります。たかが人間ごときが、神の御使いである神聖な龍の姿を見てはならない。その禁忌を犯した者は、神により祟りを受ける。その姿を見るという事は、その姿を盗む行為なのだと、そう解釈されるようですね。よって、その忌まわしき祟り者は、盗んだ姿を返す為に、その身ごと神に捧げられなければならない。即ち、生贄として命を捧げるという事です」

「・・・相変わらず、色々と面白い話を知っているのねえ、私の絵師さまは・・・」

波紅が感心したように言う。

「一介の絵師風情が、その様な博学を、一体どこで、どのようにして身に着けたものなのかしら」

「私は、長く諸国を流れ歩いておりました故、あちらこちらで、様々なことを見聞きして参った次第で。波紅様のように、寵を与えて下さる方も様々に・・・」

「あら、それは穏やかではないことね。面白くないわ」

波紅が、口元に笑みを浮かべながらも、その形の良い眉を不満げに吊り上げたので、スズリは慌てて付け加える。

「勿論、波紅様ほど私を大切に扱って下さったお方は御座いませんでしたよ」

「・・・まあ、その弁明は後で、私の部屋に来た時にでもなさい。それよりも、その子の見たモノが気になるわ」

「・・・ええ」

波紅に催促されて、スズリが再び美玻の方に向き直る。

「・・・五年前、遠見の郷で、その祟り者が出たという噂を耳にしたことがあります。神の怒りを収める為に、その者はすぐに生贄とならなければいけない筈でした。ところが、その祟り者は郷長の身内で、しかも幼い子供であった。そのせいで・・・情が動いたのかどうかは分かりませんが、郷長は決断を先延ばしにしてしまった。この五年、その祟り者は、郷の社に張った結界に封

じられ、未だ命を永らえていると、そういう話でしたが・・・それが、あなたですね？」

スズリの静かな目が、美玻の姿を映している。言われるまでも無く、龍を見てしまった自分は、ここにいることを許されない存在なのだと思われ、美玻は、その目から逃れるように俯いた。

「あら・・・それじゃあ、遠見の郷の壊滅とやらは、この娘が原因だということになるの？」

波紅の容赦のない声に、美玻はびくりと身を竦める。

「神の祟りなどというものが、本当にあるのなら、そういうことになりましょうが・・・遠見はこの比奈にとっては、国の行く末を左右する大切な存在。つまり、その存在を消すことは、比奈の国力を削ぐ、有効な手段なのとも言えます。しかも、ちょうど探索の話が出たのと時同じくして、その存在が消えた・・・」

「ふふ・・・その話も面白そう。我が国を目障りに思っている、どこかの国の陰謀説という訳ね」

「・・・まあ、郷の壊滅の真相はともかく、この娘が本当に龍を見たのかどうか、それは確かめねばなりません・・・」

「どうやって・・・？」

「それは、この・・・ええと・・・ああ、まだ、名前を伺っていませんでしたね・・・この私に、教えて頂いても構いませんか？」

「・・・」

「心配しなくていいよ。これ以上、お前が怖い思いをしなくて済むように、私が何とかしてあげるから・・・だから・・・」

そう言って向けられた柔らかい笑顔は、その持ち主が本当に優しげで人が良さそうな人間であると思わせる、そして、この人ならば信じて大丈夫なのではないかと、相手にそう思わせる力を持っていた。

後に、洸由が、『誑しの宝刀』と命名することになるこの笑顔は、他人との接触を断たれた十歳の時からそのまま、世間知らずの子供のままで大きくなった美玻には、文字通り赤子の手をひねるが如く、てきめんに効力を発揮したのである。

「・・・美玻・・・」

「美玻？そうか・・・美玻というんだね。かわいい名前だ」

自分の顔を覗き込むようにして語りかけるスズリの笑顔に美玻は、今度は気恥ずかしさから顔を反らした。陽に当たり過ぎたせいだろうか、頬が変に熱く感じられて、頭がぼおっとし始める。堪らずに、美玻は身を起こした。

「・・・ああ、無理をせずともいいよ」

「・・・もう平気です」

しかし、起き上がると否応なしに、目の前に広がる、抜ける様な蒼い空が目飛び込んで来る。

そしてその、蒼穹の彼方には・・・  
——見てはいけない・・・のに。

そう思えば思う程、目はそこに張り付いて、視線を反らすことが出来なくなる。そして、心の

奥からまた、怖さがせり上がって来る。思わず、傍らにあったスズリの手を掴んでいた。

「・・・何が、見える？」

スズリの声は気遣うように優しくだったが、やはり美玻には答えられない。

——こんなものが見える自分は、やはりまともではないのか。

恐怖に重ねて絶望感が押し掛かる。

——怖い・・・どうしよう・・・怖くて堪らない。

スズリを掴んだ美玻の手が小さく震え出す。それに気付いたスズリは、そこにそっと自分の手を重ねた。そして、美玻の耳元に言い聞かせるように囁く。

「一人で抱え込むから、怖いと思う。その怖さを、声にして体の外に出せ」

「・・・でもっ」

これは、見てはいけないものなのだ。そんなものを、自分の外に出したら・・・どれ程の、祟りが・・・自分だけではない。周りの人間にだって、どれ程の災厄をもたらすのか。

「美玻」

「・・・見てはいけないものを見たら、祟られるんです。だから、郷だって、あんなことに・・・あたしのっ・・・せいで・・・」

涙で空の蒼色が揺らいだ。

「・・美玻」

目の前にふわりと着物の袖が翻った。そのまま視界が遮られて、何も見えなくなり、美玻は、スズリの腕に抱き寄せられていた。広間がざわめく気配がして、美玻はようやく自分の状況を飲み込む。身を振ってその腕の中から逃れようとしたが、柔らかく美玻の体を包みこんでいるばかりに思えるスズリの腕は、それを許さなかった。

「・・こんなに重たいものを、こんな小さな体で抱え込むなんて・・お前もたいがい無茶が過ぎる」

――こんなに重たいものを・・

何故、自分だけが抱え込まなければならないのか。そんな心の最奥にある本音を、心を覗かれたようにそのまま言い当てられて呆然とする。

「・・どうして・・」

この人には、分かるのだろう・・自分の思いが。もしかしたら、本当に・・分かって貰えるのかもしれない。そんな思いが募る。

この人になら、話しても大丈夫なのだろうか。

本当のことを・・話しても・・縋っても・・

それでも、ギリギリのところで、決心が付かない。

「・・お前が言わなければ、私には分からない。お前が何も言ってくれなければ、私はお前に何もしてやる事が出来ないよ、美玻」

「・・あたし・・」

「・・夏の光を孕んだ空は、どこまでも蒼く・・澄み渡って・・そう、彼方には、白い雲がたなびいている。それから風が吹いていたね・・天高く吹く風は少し強い風だ。大きな雲が吹き流されてしまうほどに。その雲の更なる高み・・そこは陽の光が煌く、眩き場所か・・」

「・・どうしてそれを」

「私にも見せてくれないか。お前が見たものを。それで祟りを受けると言うのなら、共に受けよう・・」

――・・共に・・

その一言に、大きく心が揺らされる。しかし、美玻が尚も迷っていると、その耳元で、ふっとスズリが笑ったような気配がした。

「絵師とはね、美玻。至高の美を追い求めずにはいられぬ、因果な人間なのだ。それで天罰を受けることになっても、きっと本望だと言って、笑って逝ける」

「・・」

「・・蒼穹の果てに、お前は何を見た？美玻・・」

不意に強くなったスズリの口調に、固く閉ざしていたものが、弾けた。

「・・・・・眩い陽の光を纏った・・龍・・とりどりの色彩を放ちながら、沢山の龍が空を渡っていく・・」

「上出来だ、美玻。よく、頑張ったな」

すうっと、自分を包み込んでいた力が緩んだ。途端に全身から力が抜けたようになって、美玻はそのまま長椅子の上に崩れ落ちる。しかし、もう彼女を抱き起こす者はいなかった。

—自分は役目を果たせたのだろうか・・

こうして横になっていても、無理やりに起こされる気配がないのは、そういうことなのだろう。そう思うと、安堵のため息が漏れる。しかし、同時に自分を守るように押し包んでいたスズリの存在を失ったことが、妙に心細く感じられた。

—あんな風に・・

優しく労わられたことなど無かった。あんな風に抱き締められることで、不安で一杯だった心がこんなに楽になるなんて、思わなかった。抱き締められていた時の感覚が、まだ体に残っている。それがせつないような気持ちを呼び起こして胸が一杯になり、美玻はぼんやりと天井を見ながら、再びため息を漏らした。

スズリを探して顔を巡らせると、その姿はまだ、すぐ傍にあって、美玻は少し安心する。

スズリは帯の様に長くて大きな紙の両端を下っ端の文官二人に持たせて、その上に筆を走らせていた。まるで生き物のように、スズリの筆先はするすると動いて行く。美玻の所からは、紙の裏側しか見えないのだが、そこに浮き出てくるとりどりの顔料の色彩に、美玻は目を奪われる。自分の見た光景がそのまま、スズリの手によって、寸分の違いも無く、紙の上に鮮やかに描き取られて行くのが分かった。

—凄い・・こんなものを描く人がいるなんて・・

やがて、描き上がった一幅の絵が披露されると、途端、その場に感嘆の声やため息が広がった。

「・・国王陛下、これが、遠見の娘の見た景色でございます」

その場に優雅に一礼をして、スズリはそう締めくくった。

「これは・・見事な」

紙の上に踊る龍の見事な姿に、比奈王も感歎の言葉を漏らす。

「その娘は間違いなく、遠見の力を備えているようだ。ならば、娘が早々に龍の探索へ向かえるように、万事つつがなく取り図らうように」

「畏まりまして」

王の言葉に、宰相が恭しく頭を垂れた。一方、

—娘が、探索に、向かえるように、万事・・

同じ言葉を聞いて、美玻は驚いて身を起こした。これで終わりなどではなかった。その事実打ちのめされる。ここから、龍を探しに行かなければならない。遠見である美玻自身が、だ。そして龍の鱗を持ちかえらなければならないのだ。そもそもそれこそが、遠見の役目に他ならないのだから。

—あたしが。

そんなの無理だ。何をどうすればいいのかすら分からない。誰からも、何も教えて貰っていないのだ。龍の探索なんて、郷の偉い人の仕事だったのだ。美玻みたいな子供が関わるなど、これまでにあっただろうか。

「恐れながら、陛下」

呆然とする美玻の傍らに、人の立つ気配がして、顔を上げるとそれは洗由だった。

「遠見の護衛役として、この私めを探索にお加え頂けませんでしょうか」

そう言って、洗由が自己の売り込みを始めた。

探索は国の秘事であるから、秘密の漏えいを恐れて、そもそも少人数で行われる。しかし、それはまた国家の重大事であるから、十分に信用のおける者・・つまり、王族のうちの誰かが随行することが、習わしとなっている。更に、それは大きな危険を伴う旅でもあるから、随行者は、それなりに腕の立つ者でなければならない筈だ。即ち、自分ほど、その条件に当てはまる者はいない、と。矢継ぎ早にそうまくしたてた。

「・・遠見の郷を失った失態を、挽回したい一心からとは言え、成り振り構わぬその言い様、見えてあまり美しいものではありませんわね」

揶揄するように口を挟んだ波紅を、洗由が睨みつけたが、彼女は涼しい顔をしている。

「波紅、戯言は慎むのだ」

「申し訳ございません」

王にたしなめられてようやく、王女は神妙な顔で頭を下げる。

「さて、確かに、此度の探索は、まだ不慣れな遠見が行うという異例のものである。洗由の言い分を認めよう。探索への同行を許す」

「ありがとうございます、陛下」

「今度こそ、失敗は許されぬと、肝に銘じよ」

「はっ。重々承知致しております」

折角、手の中に入れた遠見という駒を、あっさり兄に持っていかれたのが、面白くない。そんな気持ちが透けて見える様な不機嫌な顔をして、波紅は優雅に一礼すると、絵師を伴って広間から去って行った。

その後ろ姿を、美玻は縋るような目で追いかける。もう、スズリに助けて貰うことは出来ないのだ。そう思うと、言いようのない心細さが募った。

――共に。

優しい声で囁かれた言葉が、いつしか刺を纏って心の中を転がり始める。スズリは波紅王女の絵師だから、この城で、王女の元にいるべき存在なのだ。そう自分に言い聞かせても、その刺が消えることは無かった。

香木を焚いた煙がゆらゆらと漂う中で、波紅は、相変わらず不機嫌そうな顔のまま寢所に身を横たえていた。

「失礼いたします」

部屋の外から声が掛かり、スズリが茶器一式を載せた盆を手に部屋に入って来た。盆の上の急須には、特別に配合されたお茶が入れられている。波紅が日頃から、美容の為に愛飲しているものだ。その茶が器に注がれると、甘い花の香りを含んだ湯気が立ち上って、波紅の昂ぶった気持ちを、少し和らげてくれた。その香りにつられたように身を起こせば、そこに、いつも通りの微笑みが波紅を待っていた。

スズリから受け取った茶碗を、波紅が両の手で包み込むようにしながら、軽く揺らす度に、心地の良い香りが辺りに満ちる。それを楽しむように、王女はしばらく手の中で琥珀色の液体を転がしていた。

——今日のことは、ちょっと城の中に野分が吹き抜けただけ。

ぼんやりしながら、そんなことを考える。退屈しのぎにはなったではないか。明日からまた、何も起こることのない、平穏で退屈な日常に戻るのだ。

——だから、たまにはこういうことがあっても、いい……。それでも——

「……お前が優しくするのは、この私だけでいいのよ。分かっているのしょうね？スズリ……」

不意にそう呟いた波紅に、スズリは優しい笑みを返して言う。

「勿論でございます、波紅様」

——その笑顔。

最近、気づいてしまった。

その笑顔にはどうやら、嘘が混ざっているようだということ。

この男は、自分に忠誠など寄せてはいない。そう気付いた目で見れば、スズリの言動には不自然に作り込まれた点が多かった。そして波紅は、今日の騒動で、また新たに一つ確信した。その確信が、間違いなく彼女の気分を良く無い方へ傾けている。

「……それを、あのような娘に、あそこまで……」

——この男は、その気になれば、誰にでも、笑顔を安売り出来る。

そんな風に最初から疑って掛かれば、

「それは、波紅様が、そうせよと、ご命じになったからではございませんか……」

その言い訳も、どこか白々しく響く。

「私は、ただ娘の口を開かせると言っただけだわ」

「しかし、ああまで頑なでは、他に術を思いつくことが出来ず……波紅様には、それでご不快な思いをさせてしまったご様子。誠に申し訳ございませんでした」

神妙なようすで、そんな風に素直に頭を下げられれば悪い気はしない。何と言おうか、この者は、場の空気を操るのが上手いのだ。一言で言えば如才なく、世渡りが上手いのだろう。ただ、あの娘に対するやりようは、いつもの冷静なスズリらしからぬ、少し度を越したものだっような

な気がした。いつもなら、こんなふうには波紅に付け込む隙を与えるような、あんな馬鹿な真似はしない。

――まさか、あれが・・・スズリが決して見せたことのない、本心・・・なのか。

だとしたら、何が彼をそうさせたのだろうかと思う。

「・・・龍、か」

つい、声が出た。

「はい？」

聞き返したスズリに、何でもないという風に首を振ってみせる。結局、口を付けなかった茶器をスズリに突き返すと、波紅は物憂げに寝所にうつ伏せになった。それを合図に、スズリが波紅の体に指を這わせ、節々を丁寧に揉み解していく。その心地よさに、小さく吐息を漏らす。

――今更・・・理由などどうでもいい、か。

どんなに才気であろうと、王女というだけで、国の大事に関わることはない。いずれ政の道具として他国へ嫁ぐまで、綺麗な置物でいることだけを望まれている。日常を、美しいものに囲まれて過ごすことぐらいしか、そんな自分の境遇を慰める術はないのだ。そこに嘘が混じっていようが構わない。美しいものを描き出す、美しい手を持つ、美しい男。私の心を慰めてくれるものなら、何でもいい。そんな刹那的な考え方をするようになったのは、自分が大人になったということなのか。嘘つきでも、ここに心がなくても、それでも、この美しいものを手放すのは、まだ惜しいと思う。微妙な女心である。

体に触れられる心地よさに、うつらうつらしていると、戸口の方から、使い走りの呼ばれる声が出た。

「・・・恐れ入ります、波紅様」

スズリの気配がずっと遠くなる。声を掛けた者の方への対応の為、戸口へ行ったのだろう。スズリが相手と二言三言交わす声が出て、その気配はすぐに傍らに戻って来た。

「・・・何事なの？」

波紅が顔を上げると、スズリが膝を付き、うやうやしく薄い書状を波紅に差し出す。

「使いの者は、宰相閣下からの文と・・・」

その名に波紅が顔をしかめる。あの男は、どうせろくな事を言って来ない。これまでの経験から嫌という程分かっている。

書状を開き、そこに書かれている文言を目で追うと案の定、である。波紅の表情は次第に険しくなっていく、仕舞いには書状をくしゃりと丸めるに至った。書状は彼女の手の中で、気の毒なほど見事に握りつぶされていた。握った拳の力の入り具合から察するに、波紅の怒りが相当なものであるのが分かる。

「やられたわ。宰相の奴っ。全く、忌々しいったら・・・」

「如何なされました・・・？」

声を掛けたスズリを見上げた顔は、怒りに満ちた声とは裏腹に、案外落ち着いているように見えた。が、スズリを見る波紅の目が、すうっと細くなる。それはどこか、うすら寒さを感じさせ

るような表情だった。

「・・・お前を、龍の探索の一行に加える様にと、陛下からそうお達しがあったそうよ」

「私が・・・ですか？」

唐突な話に、スズリも驚いた様だ。

「ああ、もう。話が見えるようだよ。がさつな洸由兄さまでは、あの娘を持って余すかもしれない。娘の心を開いたお前なら、娘の扱いも安心だから、とか何とか。尤もらしい理由を付けて、お父様をその気にさせたに決まってるんだから」

「・・・しかし、何故私なんです」

「宰相はきっと、お前を私の側に置いておきたくないのでしょうよ」

「ははあ・・・そういう・・・」

スズリが苦笑する。

王女に関する醜聞の類は、スズリも承知している。自分が、王宮で何と言われているのかも。情夫、間男、男娼・・・その他諸々だ。そんな彼がここに居られるのは、波紅の我儘を比奈王が黙認しているからに過ぎない。そもそも、隣室に常にお付きの女官が控えている状態で、睦事など出来よう筈もないのだが、噂などというものは、刺激的な話題であればあるほど、まことしやかに面白おかしく伝わっていく。宰相にとっては、そんな噂が立つ事自体がもう問題なのだろう。

「あの堅物、まだ諦めていなかったんだわ。この機にとばかりに、厄介者を追い出しにかかるなんて。姑息な真似を」

「・・・それでは、私はまた旅に出なくてはならないのですね」

スズリがため息混じりに言う。しかし、旅という言葉に、隠しきれない嬉しさが乗っているのが波紅には透けて見えた。それが、どうしようもなく気持ちを逆なです。それでも、制御が利かなくなりかけた感情を、彼女は辛うじて押し留めた。感情に振り回されて醜態をさらすなど、王女としての自尊心が許しはしなかった。

「・・・スズリ、一旦お下がり。用が出来たら、また呼ぶわ」

「・・・はい。畏まりました」

お辞儀をして退出するスズリを見据える波紅の目に、剣呑な光が宿る。

――私は、ここにいななければならないのに。この男はまた、自由に外の広い世界へ出ていく。

行ったら最後、スズリはもうここには戻っては来ないだろう。波紅には、そんな確信があった。そんなことを、自分はみすみす許すというのか・・・

――許せる筈はなかろうな。

いつしか王女の口元には、不気味な笑みが浮かんでいた。

数刻の後、スズリは再び波紅に呼ばれて、その居室を訪れた。

いつもの様に勝手知ったる様子で気安く踏み入れた足は、しかしすぐに止まる。いつもの芳しい香りに変わって、部屋は鉢物を焼いたような、鼻を付く嫌な臭いに満ちていたからだ。そして王女が、普段あまり馴染みのない・・・この部屋にいるには不自然な男たちを従えているのを認めて、彼は眉を顰めた。出で立ちを見れば、城の下級役人であることが分かる。更に言えば、彼らは、罪人を仕切っている牢番たちであろうと思われた。

「・・・波紅様・・・これは一体」

自分に不審の目を向けるスズりに、波紅は絵に描いたような笑みを返して言う。

「私には今、とても気掛かりなことがあるのよ」

「気掛かり・・・でございますか？」

「そう、気掛かり。ねえ、スズリ、ずっと諸国を流れ歩いていたあなたは、きっと旅が好きね？」

「・・・それは・・・私は絵師でございますから、様々な場所へ赴き、自分の見た事もないような景色や花や動物たちを、描いてみたいという思いはございます。でも、それは、絵師としての業のようなもので・・・」

「要するに、好き、よね？」

「・・・はい」

「まあ、それは絵師ならば当然、といったところかしら。それはいいの。ただね、今度のことで、ここを出て行ったあなたは、もうここへは戻って来ない・・・私にはそんな風に思えるのよ」

「・・・波紅様、何をおっしゃいます。どこへ参ろうと、私の戻る場所は、ここより他にございませんものを」

「ええ。分かってはいるのよ？でも、心配で心配で堪らないの。もし二度と戻って来なかったらって・・・」

「・・・波紅様は・・・私の心をお疑いなのですね」

スズリが、傷ついたような恨みがましいような顔を向けると、波紅が艶やかな笑みを返す。

「疑っている訳ではないのよ、ただ心配なだけで」

「・・・波紅様」

「だから、旅に出る前に、あなたに印をつけさせてくれない？あなたが間違いなくこの私のモノで、必ずこの場所に戻ってくるという証を・・・刻ませてくれないかしら？あなたのその体に・・・」

「・・・印・・・って」

笑みを湛えた口から紡がれた言葉の意味が、直ぐには理解出来なかった。しかし、波紅の合図で、両側から男たちに乱暴に腕を掴まれて体を押さえつけられ、床に跪かせられるに至り、スズリは自分の置かれている状況を理解した。

「・・・波紅様っ・・・どうか、おやめ下さい」

「あら、あなたのそんな余裕のなさそうな顔、初めて見るわ・・・そんな風に顔を歪めていても、美しいのね。面白い」

波紅がそういう間にも、別の男が焼き鑊を熱している気配がする。炭の擦れるシャリシャリという音と共に、鉄の焼ける嫌な臭いがみるみる濃くなっていく。その不快な臭いが、体に絡み付いてくるような感覚に悪寒が走る。不幸にも、スズリはその意味する所をよく知っていた。せり上がってくる恐怖を押し込め、己に気丈であることを課したが、

「・・・どう・・・か・・・お許し・・・下さい・・・」

そう言った自分の声は震えていた。

平静を失わされた屈辱に唇を噛む。しかし、波紅はそんなスズリの様子など気にも留めていない風だった。王女の様子は、どこか楽しげですらある。そんな残酷な一面を持っていることを、

自分は見抜けなかったのだ。迂闊だったと言わざるを得ない。

「そう、ね。利き手は止めておいてあげるわ。あの優美で繊細な線が描けなくなったら、大ごとだから。さあ、そちらの手を、左手を出しなさい」

「・・・波紅様・・・どうか・・・」

「あなたが私の物だという印をつけておいてあげると言っているのよ。あなたがどこへ行っても、比奈国第三王女であるこの波紅の大切な所有物として、丁寧な扱いを受けられるようにね・・・それは、とても名誉なことなのよ？嬉しいでしょう？嬉しいわよね？」

「・・・波紅・・・様・・・」

「さあ、スズリ。その手を出して」

スズリの意志など関係なく、左手が腕ごとぐいと引っ張られ、牢番の太い腕に抱え込まれるようにして押しえつけられる。もう、どうやっても逃げようのない所へ、自分は入り込んでしまったのだと悟る。何でも器用に、そつなくこなして来たつもりだった。自分でも、そんな才能があるのだと、どこかで奢っていたのかも知れない。他人に隙など見せたことはなかったのに。こんな風に、無様に虐げられる羽目になるとは。

――全く、とんだ失態だな。

床とお見合いしながら自嘲したスズリの、その不敵な笑みに気づいた者はいなかった。

「・・・くっ・・・」

想像以上の激痛が左手の甲に来た。もしかしたら、手首から先、無くなってしまったのではないだろうか、と思う程の痛みに、しかし悲鳴はどうにか押し殺した。ここで無様に泣き叫ぶなど、スズリの矜持が決して許さなかったのだ。スズリの意識はそのまま、暗い闇の中に飲み込まれた。

(・・ごめんなさい・・ごめんなさい・・ごめん・・なさい・・)

声が、聞こえた。

――何だ・・この声・・誰の・・

(迷惑かけて・・ごめんなさい・・あたしのせいで・・ごめんなさい・・)

女の子の声が、聞こえた。

――なんてえ・・辛気臭い声・・出しやがる・・

(・・こんな目に遭わせて・・あたしが・・駄目な人間だから・・一人前に役に立つことなんて出来ない・・のに・・一人だけ生き・・残って・・本当は私が死ななきゃいけなかったのに・・私が生き残ったせいで・・祟りが・・郷の皆が・・)

――ああああ、もうっ。鬱陶しいっ・・

そう思った瞬間、目が覚めた。

スズリの体は、石の床に横たえられていた。

一応薄い布団の上に乗せられているようだったが、その薄さ故に背中はずっと強張っていた。

(・・ごめんなさい・・)

また、辛気臭い声が聞こえた。

痛い方の手が、誰かに握られているせいで、ズキズキと痛みが増幅されていることに気づく。

薄暗いこの場所は、牢の中か。

――随分と、待遇が悪くなったものだな。

自嘲気味にそんなことを思いながら、顔を傾けると、例の娘・・美玻という名だったか、その娘が、スズリの痛い方の手を自分の両手で捧げる様に持ち上げたまま額に当てて、何かを祈るように目を閉じていた。

――成程、そんなところから、この私に辛気臭い思念を・・

「・・あの・・さ・・手・・」

声が思いがけない程に掠れていて、うまく喋れなかった。焼き鑊の痛手は、思ったよりも大きかったようだった。

「・・手・・お、い・・頼むから・・お前・・手え・・」

「えっ？」

スズリのしわがれ声に気づいて、美玻がようやく顔を上げた。が、

「・・あ・・」

と、一音発した途端、美玻の目に涙が盛り上がって、見る間に涙粒が頬を滑り落ちた。

――だから、何で、お前が泣くんだよ。

(・・良かった・・ほんとに・・よかった。ごめんなさい・・ほんとにごめんなさい・・)

――あ～もう、またっ。

「手っ・・手、離して・・痛い、からっ・・」

「あ。ああああ、ごめんなさいっ！」

美玻が狼狽を絵に描いたような顔をする。包帯を巻かれた手が、体の側に戻されて、スズリは、ほうっと大きく安堵の息を吐き出した。

――これで、あの辛気臭い声を聞かずに済む。

「あの・・う、痛みますか？」

おずおずと、美玻が聞いてくる。

「・・痛い・・」

と、言い掛けた途端に、美玻の顔がこれ以上はないという悲壮な表情を浮かべる。

「・・いや、痛い痛いですが・・触らなければ取り敢えず、大丈夫・・ですから。だから、ええと・・そんな、この世の終わり、みたいな顔しないで下さいますか？そんな顔されたら、こちら、気が滅入ります・・」

「・・ごめんなさい・・でも、あたしの・・せいで、あなたに・・こんな災厄・・」

「あのですねえ・・私のこの傷は・・気位の高い王女様の恩賜のお陰というか、所為というかであって、しかも、半分は自業自得というか・・ともかく、あなたの所為ではないことだけは確かですから」

「・・だって、あたしがまた龍を見たりしたから、祟り・・っ・・きっと、周りの人に災いが・・起こるんです。・・郷の人たちが死んだのだって、龍を見たのに、あたしが生贄にならなかったせいで、祟りが・・」

「・・あなたが生き残ったのは、その遠見としての能力が、比奈の王に必要だったからでしょう・・要するに、あなたはそういう運命だったというだけのことですよ。誰が悪い訳でもなく・・」

「だってあたしは・・遠見の郷のために死ななきゃいけなかったのに・・遠見としても半端なままで・・何で生き残って・・る・・のか・・って・・」

美玻が涙声になる。そんな娘の様子に、スズリは、また大きくため息を付く。

――置かれた境遇を考えれば、無理も無いのだろうが、何でこんなに後ろ向きなんだ、この娘は。

こちらまで、何だかどんよりした気分になる。それでも、彼女が今現在、ただ一人の遠見なのだというなら、突き放す訳にもいかないのか・・

――龍の鱗を手に入れる為には、この娘の存在は欠くことが出来ない。

「いいですか、よく聞いて下さいね。あなたは今生きている。それは必要があって生かされていると言ってもいい。神様は生贄の命を取らなかった。つまり、それ自体がもう、神様の意志なの

ですよ。私はそう思います。それに、龍が崇るなんていう伝承は、世界中でこの辺境の比奈の、しかも山間の小さな郷の中でしか聞かないものなのです。龍がそこまで神聖な生き物だと言うのなら、その身の鱗を剥がすなど、そもそも許されないことではないのですか？」

「・・・それは」

「約束して下さい。この先、もう金輪際、崇りだの生贄などと口にしないことを。あなたはもう、比奈の王に正式に認められた、国の命運がその肩に掛かる、大切な遠見なのですから」

スズリはそう言ったが、美玻の中で燻る思いは、簡単には消せなかった。なぜ、自分なのだろう、と。その答えを求める問いは、美玻の心の中で、この先、幾度も繰り返されることになるのである。

「・・・大丈夫ですよ」

尚も不安そうな表情を浮かべている美玻に、スズリが重ねて言う。

「・・・あなたは一人ではないのですから」

「・・・え？」

「あの時、共に・・・と申しましたでしょう」

そう言いながら向けられた笑顔に、美玻は胸の辺りが苦しくなるような感覚に囚われる。

「共に・・・」

「ええ、共にです。龍の探索に同行するようにと、陛下からご命令を頂きました。それで、王女様が癩癩を起されて・・・この傷は、そのせいなのです」

スズリが、痛みに顔を歪めながら包帯を巻いた手を持ち上げて、美玻に示す。

「だめです、痛いのに動かしたりしたら・・・」

「・・・大丈夫、何とかなる、と。そう思っていれば、大抵のことは乗り越えられるものですよ。私は、そう信じています。もうだめだと、心を折ってしまえば、多分、そこで終わりです。だから、私は護符のように、その言葉を自分の心に貼り付けています。きっと、大丈夫と」

「・・・きっと・・・大丈夫」

「はい」

スズリが頷くと、美玻は心持ち安心したような表情になった。

美玻はスズリの額に乗せられていた布を外し、傍らに置かれた水桶で冷やすと再び額に戻した。手の傷のせいで発熱しているのだろうか。そのひんやりとした感触を心地よさそうに、スズリの口から大きなため息が漏れた。そんなスズリの様子を見て、美玻が心配そうに眉根を寄せる。

「・・・でも、無理はだめですよ。やはり、痛いことは痛いのでしょうか？」

「・・・まあ・・・痛いです・・・ね・・・」

スズリがそう白状して、はにかんだような笑みを浮かべた。その様子が何だか可笑しくて、美玻はようやく小さな笑みを零した。

「・・・どうして、あなたが私の介抱を？」

そう訊くと、美玻がどこか困ったような情けないような表情を浮かべた。

「・・・あたしには・・・遠見なんて無理だから・・・龍の探索なんて出来ませんって・・・」

「言ったんですか」

スズリが呆れ顔になる。

——そうか、この娘が変にごねたから。私にお鉢が回ってきたのか。

「・・・はい。それで多分、逃げ出すと思われたんじゃないでしょうか・・・旅の支度が整うまで、ここに入っているって言われて」

『お前、迂闊なことを言うのも大概にしろよ。この期に及んで、冴由様のご機嫌を損ねる様なことを口にするとは、愚かとしか言いようがない・・・そこでしばらく反省している』

沖斗にたしなめられた言葉が脳裏に蘇って、美玻はやるせない思いを抱く。

——そんなことを言ったって、本当のことなのにな・・・

嘘でもいいから、遠見として振る舞えと、そんなことを言う沖斗の方が、無茶ではないのか。

「それで・・・？」

スズリに促されて先を続ける。

「・・・そうしたら、あなたがここに運ばれて来て、牢番の方が、どうせ暇なのだろうから、お前が面倒を見てやれと」

「それは、お世話をお掛けしましたね。ありがとうございます」

礼を言うと、美玻が複雑な顔をする。

「だって、それは・・・あたしのせい・・・だって、そう思ったから」

スズリはああ言ったが、自分のせいだという思いは、まだ美玻の中から消えていない。

「・・・私は、もう一度、痛い思いをして手を持ち上げて、そんなことはないと言わなければなりませんか？」

スズリが、いかにも心外だと言う声で問う。

「え・・・いえ・・・そんなことっ・・・ごめんなさい。・・・もう言いません」

思っている、それはもう口にしてはいけないことなのだ。そう悟って美玻は項垂れる。スズリも沖斗と同じだ。本当のことを言っただけとはいけないという。それはやはり、自分の方が間違っているということなのだろうか。

——よく・・分からない。

「大丈夫、あなたは立派な遠見ですよ」

その言葉に思わず顔を上げる。

「誰も見たことのない、あんなに見事な龍を見たではありませんか」

「あれは、ただ、見えただけで・・あたしは遠見のことなんて、何も分からないし、龍の探索だって、どうすればいいのか・・」

「見えるのなら、何も問題ないじゃないですか」

「・・？」

「私は、伊達に諸国を流れ歩いていた訳ではないのですよ。龍の探索に関する知識ぐらい、知らないとお思いですか？」

「え・・？」

「だから、探索の方法はこの私が承知しているのだし、あなたは見えるのだし・・何も問題はないでしょう？」

「・・本当に？」

「ええ。だから、大丈夫だと、そう言っているではないですか、さっきから・・嫌だな、また何でこの間合いで泣くんですか」

美玻はまた、豪快に涙を零していた。

「だ・・って・・安心したら・・勝手に・・」

それ程心細かったのかと思うと、少し哀れな気もした。それに、そこまで隙だらけだと、付け込むのにどうにも罪悪感が生まれるではないか。

——やりにくい。

こんな世間知らずで、人を疑う事を知らない純真な娘を、自分はこの先欺いていくことになるのか。この巡り合わせを、自分は神に感謝している。探し続けた龍の鱗の手掛かり。それをようやく見つけたのだ。それでも、感謝以上に感じる、この後ろめたさは何だろう。自分にもまだ、良心などというものが残っていたのかと思う。

——こういう巡り合わせ・・ということか。

これまで自分は、感情を殺すことで、色々なことを乗り越えて来た。他人を欺くことに、罪悪感など持たなかった。だが、今回はどうにも、その感情がいちいち呼び戻される・・心が掻き回される。要するに、今度は感情を持ったまま、その痛さを抱えながら、最後の試練を乗り越えろということなのだろう。

——それが、罪を犯す者に与えられた罰、か。・・それでもいい。・・この願いが叶うのなら・・他には何も望まない。どんな痛みにでも、耐えてみせよう・・

スズリは自由になる右手を伸ばして、美玻の涙を拭った。いきなりのことに、美玻が驚いたように身を引いた。

「・・・泣いてばかりなんです、あなたは。悲しくても泣き、辛くても泣き、おまけに嬉しくても泣く」

「・・・すみません」

「いえ。ある意味、うらやましいなど」

「・・・？うらやましい・・・ですか」

どこからどう見ても、ダメダメな自分をうらやましいと言われて、美玻が良く分からなという顔をする。

「まだ泣けるのですから」

スズリが軽く笑いながら言う。

言われた意味が、やはりよく分からずに、美玻は首を傾げる。単純に解釈すれば――

「・・・スズリは、もう泣けないの？」

そう問うと、スズリが瞬間驚いたような顔をして、そこから盛大に笑い出す。

「そうだな、私はもう、泣き方を忘れてしまったのかも知れませんね・・・」

「・・・そんなこと・・・忘れてしまえるものなのですか？」

「忘れる努力をしたのですよ」

「なぜ・・・ですか？」

「そう・・・生きていくのに必要だったからですかね」

笑顔のまま言われたその言葉は、美玻の胸に重く響いた。涙がまた、目の淵から溢れ出しそうになる。

「ああ・・・また。今度は、どうしました？」

「・・・だっ・・・て・・・そんな哀しいことを、笑って言うから・・・」

――しまったな。こいつは、こんなことでも泣くのか・・・素直すぎるというか。

これは面倒くさくて、自分が一番嫌いな種類の人間かも知れない。これまで自分の周りには、こんな奴はいなかった。というより、そんな人間はすぐに淘汰され、何時の間にか姿を消していく。スズリはそういう環境で育ったのだ。

「もう、泣かないで頂けますか？その涙の塩気が、傷に染みますから」

「え？塩気・・・？ですか」

真面目な顔で聞き返されて、スズリは苦笑する。

「・・・いや、そこは冗談なんですけど」

「え・・・？」

「本当に、困った人だなあ・・・」

そう言って、スズリの右手が、美玻の手を掴んで、いきなりぐいと引いた。

予期しないことに、美玻はそのまま体勢を崩す。怪我をしている手は何とか避けたものの、手を付く間もなく、スズリの体の上に覆いかぶさる格好になる。慌てて身を起こそうとしたが、スズリはそれを許さなかった。

「あの・・・」

自分の体の上で、困惑する声がある。スズリはそれにお構いなしに、今度は美玻の頭に手を掛

けると、強引に自分の胸の辺りに押し付けた。

「泣いている子供は、心音を聞かせると安心して泣き止むのだと、そう聞いたことがありましたので、試しに・・・」

「・・・あ、あたしはっ・・・そんなに子供じゃありません」

「おや。これは失礼いたしましたね。そんなにべそべそ泣いてばかりいるので、てっきり」

そう言いながらも、美玻の抗議は無視で、スズリの手は美玻の頭を掴む手を更に力を込める。

「・・・どうです？聞こえますか？私の心音が・・・」

「・・・だから・・・離し・・・」

トクン。

耳にその音が届いた。

トクントクン。と、一度捕らえた音は、規則正しい間隔で美玻の耳に次々と届き出す。同時にそこから、平素よりはだいぶ高いスズリの体の熱が、頬を伝って感じられた。

「・・・」

これを心地よいと思うということは、自分は子供なのだということになってしまう。そう思うと、居た堪れない程の恥ずかしさを感じて、体中が火照り始める。

「・・・お願い・・・離して・・・もう泣かないから・・・」

そう言うのと、頭を抑え付けていた手が離れた。美玻は呆けたように身を起こす。

「落ち着きましたか？」

穏やかな笑みを浮かべたスズリが訊いた。美玻はただ力なく、それに頷くばかりだ。

――もう、この人の前で泣くのはよそう。

全身の力を吸い取られてしまったような疲労感を感じながら、美玻は猛然とそう思う。泣く度に、こんな風に抱き寄せられていたのでは、身が持たない・・・。スズリと目を合わせることさえ、何だか気まずい。

「・・・少し休みます」

美玻は俯いたままそう言うと、四つん這いで牢の隅まで行く。少し距離を取った場所から見れば、スズリが顔だけこちらに向けて、気遣うような視線を向けて来る。それを見なかったことにして、美玻は壁に寄りかかって目を閉じた。体がひんやりとした壁の冷たさを吸い取って、体の火照りが落ち着いて行く。同時に、訳のわからない気持ちの方も少しずつ落ち着いて行く。

――子供・・・あたし・・・本当にそうだ。

今更どうしようもないことを、嘆いて怨んで、駄々をこねて。

『そこでしばらく反省している』

沖斗に叱られても、仕方がなかった。

遠見として、龍の探索に行く。それは出来ないからと逃げるのが許される程、軽いものではないのだ。

『大丈夫、何とかなる、と。そう思っていれば、大抵のことは乗り越えられるものですよ』

今度は、スズリの言葉が胸の奥から響いてくる。

「・・・大丈夫」

小さな声で呟いてみる。

――あたしには、見えるから。それに、一人じゃないから・・・きっと大丈夫。大丈夫・・・

もう、今更出来ませんと言うことは許されないから、その言葉を信じて行くしかないのだと、自分に言い聞かせる。

――あたしは、遠見なのだから。

「・・・頑張らないと・・・いけ・・・ないから・・・」

呟きながら、いつしか美玻は眠りに落ちていた。

### 第3章 玫瑰（まいかい）の獣

---

彼らの出立は、夏至の日から五日ほど後のことになった。それというのも、翌日からスズリが高熱を出し、起き上がることもままならぬ容態になってしまったからである。

夏至の翌朝、美玻が牢で目を覚ました時、その体にはスズリが掛けていた箒の上掛けが掛けられていた。スズリはといえば、その側で、壁に身を持たせかけるようにして、意識を失っていた。

朝一番に、美玻の様子を見に来た沖斗が、それを見つけた。

スズリの様子が深刻なのを一目で見て取った沖斗は、すぐに洗由に掛けあって、彼らを城の一室に移してくれた。当然、部屋の外に見張りは付けられたが、風通しのいい清潔な部屋は、牢の中とは比べものにならないほど快適だった。洗由に命じられてやってきた薬師が、上質な薬を使って手当てをし直し、解熱作用のある薬草を煎じたものを飲ませると、スズリの容態は間もなく落ち着いた。

ただ、しばらくは大事を取って安静、旅に出るなどもっての外と言われて、スズリには大人しく寝ている他の選択肢はなかったのである。

それから日に数度、食事と薬を持って、沖斗が部屋を訪れるようになった。本来、下っ端がやるような雑用を、洗由の右腕とも言われる沖斗が直に行っているということが、美玻に自分の存在の重さを改めて再認識させ、ついでにその気分をも重くさせた。それでも、幾度か言葉を交わすうちに、初めは怖く感じた沖斗の言動も、前に下働きの娘が言ったように、ただ愛想が無いだけで、気遣いの行き届いた、実に細やかなものであることに気づいた。

――本当は、優しい人なのかも知れない。

そう気付くと、彼の实直さは、美玻の中でそのまま信頼に変わって行った。

初めて出会った時のよそよそしさも、美玻が正式に遠見と認められてからは、もう感じることはなかった。そもそも、自分の方が崇り者という負い目を背負いこんでいたから、沖斗の態度が事更に冷たく感じたのかも知れないと、今ではそんな風にも思う。

ところで、基本、必要最小限のやり取りしかしていない沖斗から、美玻が苦心して聞き出したところによれば、スズリの件は、波紅が勝手にやったことの様で、洗由はその気紛れな振る舞いに大いに腹を立てていたという。洗由としては、今日明日にでも旅に出たかったのだ。大任を任されて、今度こそ手柄を立てるのだと、大いに気負いもし、気持ちも逸っていた。それなのに、忌々しい妹姫にその出鼻を挫かれた格好になった。

その当人・・波紅王女に関しては、比奈王に叱責された上に、しばらく山裾の離宮へやられたとか、へそを曲げた王女の方が自分から城を出て行ったのだとか、そんな噂が聞こえてきていた。それから、美玻たちが部屋に籠っていた数日の間に、遠見と龍の探索の件は、公然の秘密として扱うようにという王の意向が示された。これにより、城では彼女たちの存在は、そこにあってもないものとして、話題に乗せることすらも禁じられたという。

これについては、自分たちの世話をしてくれる沖斗に、例の如く、美玻が無暗に恐縮するものだから、困った沖斗が説明したものだ。

自分がこの役を任されたのは、そういう経緯で、洗由の配下の者数名の他は、この件に関わってはならないとされた為だと言った。だから、そんなに恐縮しなくてもいいのだし、逆にそんなに恐縮されるとやりづらいから、普通にして貰えないかと、最後にそう付け加えられた。――ごめんなさいと、言い過ぎても良くない。

そう諭されて、美玻はまた少し落ち込んだ。どこまでが良くて、どこまでが駄目なのか。そのさじ加減が良く分からない。・・・難しい。

眉間に皺を寄せて、考え込んでしまった美玻に、スズリが言ったことは、「あれは、単に照れ臭かっただけだろう。当人にとっては、やって当たり前のことで、これまで、それを感謝されることなど、ほとんど無かったのだからね」――それは、本当は嬉しいということなのか。でも言われると困る・・・？嬉しいのに困る・・・余計分からなくなった。悩んでいると、美玻はそのままでいいのだと言われた。「感情がすぐ見えて分かりやすい方が、扱いやすいからね」優しそうな顔をして、スズリは結構口が悪い。・・・というのは、一緒にいるようになって発見したことだ。

「・・・それは、あたしが単純だってことですよね？」ムツとした顔をすると、スズリがふふっと忍び笑いをする。

――本当に分かりやすい。そんな単純さが気に入ったなどと言ったら、この娘はまた更に頬を膨らませるのだろう。

「一応、褒め言葉のつもりなのですからけれどね」  
「そうは聞こえません・・・」

口を尖らせて、更に拗ねたような顔を見せる。困って泣いてばかりだった顔が、ちょっとつつかと、色々な表情を見せる。寝ているばかりで詰まらないから、退屈しのぎにそれが面白くてついからかってしまうのだ、などとは、口が裂けても言えない訳だが・・・

代わりに、  
「そのまま、変わらずにいて下さいね」と。

つい、本音が漏れた。  
――この先、どんなことがあっても・・・深い深い傷を負うことになっても・・・

「変わらずに・・・いて下さい」

「や、です、そんなの。あたしはっ、あなたに子供扱いされて、馬鹿にされないように、早く一人前の、大人の女になるんです。そう決めたんですからっ」

「・・・大人の・・・」

こいつ、意味を分かって言っているのかと、思った途端に、猛烈な可笑しさが込み上げて来て壺に嵌った。

「わ、笑うなんて・・・」

――しかも、そんなに気合いを入れて笑うなんてえ・・・

「いや、済みません・・・本当に・・・苦し・・・」

スズリは布団の上で身を二つに折って、息を切らしている。

「ホント失礼、大嫌い」

「・・・私は好きですよ、今の美玻が。側にいると、実に実に楽しくて・・・どうかそのままで、素敵な大人の女性になって下さいね」

「それ、馬鹿にしていますよね？」

「とんでもない」

「・・・顔が笑ってます」

「あれ、おかしいな・・・」

スズリが、いかにもにっこりにっこりとした笑顔をしながら、首を傾げる。

――笑いすぎて、普通の笑顔が作れない。営業用の、優しい笑顔。って、こんな感じだったっけ？

「口元が引きつってますよ」

「え？そう？」

スズリが、両手で頬の辺りをむにむにと揉み始める。やがて、その顔が、にこりといつもの笑顔になった。

「・・・その笑顔って、そうやって作り込まれていたものなんですか・・・」

――あの時のも、あの時のも、あの時のも・・・？

何だか一気に、ありがたみが薄くなったような気がした。

――泣き方はもう忘れていて、笑顔は作った笑顔で。それは、生きていくのに必要だったから・・・

そんな風にしか、生きて来られなかった。そのスズリの境遇が、どんなものだったのかなど、美玻には想像も付かない。

「第一印象で笑っていると、割と簡単に信用してもらえるからね・・・つい、癖になってしまっているというか」

「・・・信用」

それが、色々な国を流れ歩いて来たスズリの処世術なのだろう。

「・・・あたしには、信用されなくても構わないってこと？そういう種明しをするってことは・・・」

「うん？ああ・・・美玻は、こっちが頑張らなくても、勝手に大笑いさせてくれるから・・・素のまま

までいいかなと」

——ええと、それは・・・喜んでもいいことなのかしらっ？

「・・・でも素のままだと、何となく性格悪そうなスズリのままで、意地悪なこと言ったりする訳よね？」

探る様に美玻が言うと、スズリが苦笑する。

「性格が悪いと言われたのは、初めてですよ」

これまで、当たりの柔らかい、いかにも優しそうな性格で人が良さげな人間を、そつなく演じて来たのに。

「・・・だって、どう見たって、良くはないでしょう？優しくないし、遠慮もないし、時々、意地悪だし」

面と向かって意地悪と言われて、今度は軽く嘖き出す。それは美玻のせいでもあるのだ。この娘が、つい、苛めてしまいたくなるような素直すぎる性格だから。

「まあ、どちらにしる、私たちは一心同体なのでですから、仲良くやるしかないのでしょうか？」

「そうだけど・・・」

美玻がどことなく不服そうな顔をする。

「分かりました。出来るだけ優しくします。少しは遠慮もするし、意地悪もなるべくしないように、努力します。これでどうですか？」

——そういうの、前もって言われるのも、何だか誠意がないというか、嘘くさいというか・・・

努力をしてくれるというのなら、それに越したことはない。それに、スズリの存在があったから、自分は立ち止まらずに済んだ。遠見として頑張ろうと思えた。それは紛れもない事実なのだ。だから、言うべきことは言っておこうと思う。

「本当はね・・・いてくれて良かったなって・・・思ってるのよ？・・・あなたで良かった・・・って」

「・・・」

はにかんだような笑顔で言う美玻に、そんなことを言われたスズリの方は、少しばかり胸が痛んだ。優しく装ったまま騙すのが、やはり後ろめたくて、ならばいっそ素のままに少し意地悪なぐらいで接していれば、罪悪感が多少薄まるのではないかと、安易に考えていた。それなのに・・・

——何でそんなに簡単に・・・信頼しているみたいな顔をする。

そんな簡単に、人を信用するものじゃないと。いつか、別離の際にそう言ったら、この娘はどのぐらい絶望するのだろう。

その絶望を、出来ればなるべく小さくしてやれたら・・・などと考えている自分は、矢張り甘いのか。今ここで、本当のことをぶちまけてやったら、どんなにかせいせいすることだろうと思った。勿論、そんなことは叶わないことなのだが・・・

「スズリ？」

「あ、ああ。私も、一緒に行くことが出来て、嬉しいですよ・・・楽しい旅に、なりそうだ」

——色々な意味で。

美玻にとっては、楽しいの意味は、単純にただ楽しいというばかりなのだろう。

そう思いながら返した微笑みは、彼女の目にはどう映っているのだろう。  
ふと、そんなことを考えていた。

その旅立ちの日、夏至を越えた日差しは、いっそう眩かった。

日除けにと頭に載せられた市女笠から垂れ下がる麻布の隙間から、晴れ渡った空を見上げた美玻は、その見事な蒼に、思わず感嘆のため息を漏らした。

正直、まだ不安はあった。

だが、こんな空の下を、自分の思う様に歩いていいのだという解放感は、そんな不安など小さく丸めて心の隅っこに押し込めてしまった。

少し歩いて、思い出したように振り返った比奈の城は、ただ日常の穏やかな営みの中にあっただ。そんな日常に紛れて、遠見とその一行はいつの間にか、城から姿を消しているのだ。もちろん、彼らの旅立ちを見送る者など、一人もいない。それが秘密裏に行われる、龍の探索なのだという。美玻に同行しているのは、絵師のスズリと、比奈国第五王子の洗由、そして、洗由が独断で一行に加えた沖斗であった。

どうして沖斗が同行しているのかと言えば、そもそも美玻は、歩くだけが精一杯で荷物など持てないし、スズリはといえば、本人曰く・

――絵師とは、筆より重たいものを持たぬもの。

であるらしく、洗由とて、最低限自分のものは持つにしても、そこまでが譲歩の限界であり、結局、もう一人、重点的に力仕事を担ってくれ人間が必要となったせいである。要するに、荷物持ちということである。

彼らの旅は、そんな風に始まった。

「おい、娘。まだ後ろを振り向きたくなる程、歩いてはおらぬぞ、さっさと歩かぬか、このたわけめが。日暮れまでに目的の村に着かねば、野宿になるのだぞ」

気が付けば、洗由が不機嫌そうな顔をこちらに向けていた。美玻は慌てて前を向いてまた歩き出す。

「おやおや、洗由様ったら、随分と気が急いでいることではございますねえ。辺りの景色に目もくれず、ただ黙々と歩くだけとは、旅の面白味が半減してしまいますものを」

「誰のせいで、予定が大幅に遅れたのだと思っているのだ、貴様は」

「これはこれは・・・」

直截的な切り返しに、スズリが苦笑する。

「それに、だ。そなた、絵師ごときが、この俺に対して、随分と遠慮のない物言いではないのか」

「おや・・・この探索は極秘ゆえ、洗由様もご身分を伏せての旅なのだと、そうおっしゃられておいではありませでしたか？それ故、旅の間は無礼講で構わぬからと」

「それは・・・そうだが」

なるべく目立たぬよう、平民の旅を装う。確かにそう言った。だが、実際に目の前でそれをやられると、微妙に腹立たしいのだ。

「身分を取り払って考えれば、目下のものが目上を敬うのが世の習わし」

「何が言いたい」

「私は、今年二十五となったのでございますが。ちなみに洸由様は・・・？」

「・・・二十三」

「では、そういうことで、ひとつよしなに」

「そういうこと、とは、どういう意味だ？」

「流石に、スズリ様と呼べとは申しませんが」

スズリが含み笑いをしながら言う。

「大変畏れ多いことながら、たった今から、あなた様を、敬意を込めて呼び捨て、とさせていただきます。宜しいですね、洸由」

「・・・ああ、何やら波紅がそなたを忌々しく思った心情がたった今、理解できた気がするぞ」

洸由が、眉間に幾本もの縦皺を刻みながら言うが、スズリは意に介さない。

「それに、あくまで我々は、遠見様を補佐する者としてこの旅に同行しているのですから、この中で、最も敬うべきは、美玻なのだと思いますが」

「・・・あ、あたし？」

いきなり引き合いに出されて、美玻が身を竦める。

「と、とんでもないです。あたしなんかをどうこうって。お願いですから普通に、普通に扱って下さいっ。でないと、却って落ち着きませんからっ」

「我らが遠見様は、実に寛大なお心の持ち主でいらっしゃる」

「・・・止めてください、もう。恥ずかしい・・・」

大概『スズリ慣れ』して来た美玻は、流石にここからかわれているのだと気づいたらしく、頬を膨らませている。

「遠見様は、普通がお望みだとのことですが、どうなさいますか、洸由？」

「分かったよ。我らの間では、上下なく何事も平らかにすればいいのだろう。それで構わぬな？・・・沖斗、お前もだぞ、いいな？」

唐突に洸由にそう宣言されて、沖斗が面食らった顔をする。

「しかし、洸由・・・さ・・・」

「沖斗」

「承知・・・いたしました、洸由・・・」

——様

と、せめて心の中で付け加えて、沖斗は申し訳なさそうに頭を垂れる。

「美玻も、宜しいですね」

スズリに念を押されて、こちらも困ったような顔をして渋々頷いた。

その日は、そんな具合で、途中幾度かの休憩を入れながら、一行は夕暮れ間近にようやく予定していた村に着くことが出来た。宿の湯に浸かって体をほぐし、食事を取ってひと心地つくと、美玻は疲労に勝てず、そのまますぐに眠りに落ちた。

夜が明けてすぐ、一行は身支度を整えてまた歩き出す。前日の疲れが取れていないのか、はた

また目的の場所に近づいて行くことが憂鬱なのか、美玻の口数は朝から少なかった。

彼らが目指しているのは、遠見の郷だった。

城に残されていた過去の探索の記録によれば、探索の起点は常に、果て見の頂と呼ばれる、遠見の郷に程近い場所にある山の頂であるとされている。

洸由が最初の目的地を告げた時に、美玻は目に見えて動揺していた。郷があんなことになって、そんな場所に美玻を連れて行くのを可哀相に思わない訳でもない。だが、そこに行かねば、何事も始まらないのだと言われれば、洸由が躊躇う理由はなかった。美玻も、遠見としての役を全うすると腹を括ったのだろう。辛そうな顔をしながらも、この期に及んで、否とは言わなかった。

――少しの間に、随分と強くなった。

美玻の様子に、洸由はそんな事を思った。逃げることばかりを言っていた娘が、いかなる心境の変化があったものなのか。・ ・或いは、逃げられないと諦めて、ただ開き直っただけなのか。

――まあ、どうでもいいことだが・ ・

自分が龍の鱗を持ち帰る為に役に立ってくれば、それでいい。洸由は、前に行く娘の背を見ながら、そんなことを考えていた。

その更に翌日、一行は人里を離れ、とうとう山へ入った。

ここより先は、元々、遠見の者以外には住まう者のない山地である。龍との関わりを持つ為の、聖なる地であるとされているこの場所に、遠見以外の人間で立ち入る者は滅多にいない。理を知らぬ者が不用意に立ち入れば、災いを受ける。そんな言い伝えが、この地方では古来から伝えられているからだ。

遠見もすでにいない今となっては、そこは比奈の国の内とはいえ、人里の穏やかさとは無縁の、すでに異境の空気を漂わせる場所であった。気を張り、自身の存在はこの場所では異質なものののだと意識しながら行かねば、この山の気に飲み込まれてしまう。気を緩めたら、二度とここから抜け出ることが出来なくなりそうな、そんな心許ない気持ちにさせられる。そんな厳粛な空気に、彼らは互いに口数も少なく、ただ無心に山道を登った。

生い茂る木々に光は遮られて、まだ陽は高い筈であるのに、道は薄暗い。だが、そのお陰といおうか、暑さは幾分和らいで、歩くことをだいぶ楽にしてくれていた。時折、沢から吹き昇って来る清涼な風が心地良かった。道を行くほどに、そんな自然の光や風や水音に体が馴染んで、美玻は自分の気持ちが落ち着いて行くのを感じていた。そして気づく。自分は、生まれてからずっと、この空気に包まれていた。それを体が覚えているのだと。

道の先で木々が途切れ、まだ中天を過ぎる前の鮮烈な陽の光がそこに差し掛かっていた。吸い寄せられるように明るいその場所へ近づくと、視界が拓け、下方に集落が見えた。正確に言えば、それは、集落が燃え落ちた後の廃墟であった。

「・・・ここが、遠見」

美玻がぼつりと呟いた。その表情に感情は見えなかった。これまで郷の外に出たことがなかった美玻にとっては、ここから、以前には郷がどのように見えたのかということも知らなかった。だから、自分の記憶の中の郷と、目の前の廃墟が同じものだということが、良く飲み込めなかったのだ。しかし、その横で、この場所について最近立ったことのある洸由と沖斗は、共に複雑な表情を浮かべていた。

あの時はただ夢中で、自分たちが夜の中に何を残して来たのかなど、考える余裕もなかった。朝靄にぼんやりと見えた光景も、彼らに何も語りかけては来なかった。

だが、今・・・

夏の鮮明な光に、くっきりと浮かび上がった廃墟の姿は、その惨状を、やむを得ないこととして簡単に片付けることを許さないような、凄絶さを彼らに突きつけていた。

「・・・郷に下りてみますか？」

無言のまま佇む三人に、スズリが声を掛けた。ここで道は、頂きへ至る上り坂と、郷へ向かう下り坂に分岐している。その下り坂をしばらく見据えてから、洸由が首を振った。

「・・・いや。無暗に近寄らぬ方がいいだろう。探索に影響が及んでも困るしな」

「・・・穢れ・・・という訳ですか」

「まあ、そういうことだ」

そんな会話の間に、ふと、美玻が小さくしゃくり上げる声があった。

見れば少女は、今にも泣き出しそうな顔をしていた。それでも、ぎりぎりの所で、堪えているのだろう、涙で一杯の目から、まだその雫は落ちていなかった。スズリがため息を一つ落としてから、何も言わずに美玻を抱き寄せた。

目を反らせずにいた惨状から解放されて、強張っていた体が、スズリの腕の中で解されて行く。それでも、美玻は唇を噛みしめて、肩を震わせながらもまだ涙を堪えていた。

「・・・今は、泣いても構わない。誰も文句は言わなから」

これ程のことを黙って抱え込めるほど、美玻が強くないことを、スズリは良く分かっていた。手取り早く泣かせて、気持ちを吐き出させてやった方が、気持ちの沈み方も少なく済むだろうと思ったのだ。ところが・・・

「・・・もう・・・なかない・・・て・・・きめ・・・た・・・のにつ・・・」

涙を堪えているせいで、まともに喋れもしないのに、美玻はそんな事を言う。

「・・・どうしてそんなことを」

「だ・・・って・・・よわい・・・じぶんは・・・いや・・・それに・・・ないたらスズリは・・・」  
——私が・・・？

「・・・いじわる・・・する・・・し・・・」

瞬間、洗由に軽蔑したような視線を向けられたのを感じた。スズリとしては苦笑するしかない。

「・・・今日はそんなことしませんから・・・」

「・・・ほ・・・んとう・・・に？」

「はい」

「・・・」

「本当です。大丈夫ですから」

言って、とんとんとその背を軽く叩く。その途端、堰が切れたように、美玻は泣き出した。号泣といってもいい程の、感情の発露に、思いがけず胸が突かれた。美玻の感情に引き摺られた自分を腹立たしく思いながら、スズリは空を見上げる。

蒼空を眺めていると、動揺した気持ちはすぐに収まった。そして、時折思い出したように、子供をあやすようにとんとんと、美玻の背を叩きながら考える。

——本当に、この遠見は・・・何だってこんなに小さくて弱い・・・

その現実が何とも腹立たしい。こんな事では、いざという時に、こちらの決心が鈍りかねない。そんな危惧さえ覚える。

——こんなことでは、駄目だ。こんな未熟なことでは・・・

スズリはまた、小さくため息を付いた。

一方、美玻は、そんなスズリの腕の中で豪快に泣きながら、時折、あやすように背を叩かれる度に、結局、泣けばやはり子供扱いなのだと、そんなことが馬鹿みたいに悔しく思えて、涙の量を余計に増やす羽目になっていた。

美玻が泣き止んで落ち着くのを待って、彼らは更に山を登った。

そして今、彼らは果て見の頂に立っていた。

五年前に見たのと、ほとんど変わらない風景が目の前に広がっている。それだけで、美玻の胸は一杯になる。遙か天空を、陽を受けて白く輝く雲が、ゆるりと流れて行く。龍が天を下るのは、夏至の日だけと知っていても、どこかで畏れを感じながら空を見渡す。無論、そこに龍の姿は無かった。美玻は小さく安堵の吐息を落した。

「何が見える？」

背中から洺由の声が訊いた。

「・・・何って・・・言われても・・・」

ただそこにある山や川や、草原に荒地、人が手を掛けた田や畑・・・それから、人里の家々。そんなものが、あるがままに見える。少なくとも、龍に関わりの有りそうなものは、特には見えないような・・・気がする。美玻が困ったような顔で振り向くと、スズリが笑みを浮かべて言った。

「龍は、水を司ると言われる生き物です。夏至に天下った龍は、行く先々で雨を降らせていくと、そう言われています。それも、ほんの僅かな時間で、尋常ならざる量を降らせるのだと。時に、その土地の形を変えてしまう程に」

「・・・つまり、そこには大きな水溜まりか、それに準じたものが現れるということか？」

洺由が確認するように訊く。

「ええ、その通りです」

「水・・・たまり・・・」

美玻が周囲を見渡した。少し離れた山の谷合いに、陽を受けて碧く輝く、鏡のような水面を見つけた。

「それは一説に、天鏡（てんきょう）の名で呼ばれ、神が天よりその姿を映す鏡であると。夏至の後、一夜にして現れて、数ヶ月のうちに消えていくと言われる、神の鏡です」

「鏡・・・って、あれのことでしょうか・・・」

美玻が一点を指し示す。

「見えるのか？」

洺由が、その横から身を乗り出した。

「あちらの方角に、いくつか・・・それらしきものが見えます」

美玻の指の先を辿って、三人は一様に目を凝らしたが、彼らには見つけられなかった。

「・・・成程。やはり、遠見ありきの龍探索ということなのですね」

スズリが得心のいったという顔をする。いくら知識を集めても、見えなければ龍を見つけることはできないのだと、改めて思い知らされる。

——故に、希物。

とは、よく言ったものだ。

各国の王は、それぞれに、自国の希物を探す特別な力を持った者たちを従属させている。遠見を始めとする、そのような能力の持ち主は、七宝五鍵（しっぽうごけん）と呼ばれ、それぞれの

国で、それぞれに秘匿されている存在なのだ。だから、通常は他国の者が、他国の希物を手に入れることは、まず出来ない。スズリが美玻と巡り合えたのは、本当に幸運だったのだと言わざるを得ない。

ちなみに、遠見の他には、地中のものを探り当てる石見（いわみ）、相手の心の内を覗き見る心聞（しんもん）、遠くの音を聞くことが出来る相聞（そうもん）そして、希物の匂いを嗅ぎわけるといふ芳聞（ほうもん）といった者たちが存在する。

「あちら、という西の方ということだな」

洗由が、傾きかけた陽の落ちていく方角を見定めて言う。

「・・・美玻の言い様では、山を二つ三つ越えた先、ということになりましょうか・・・」

「まあ、行って見ればわかることだがな」

言いながら、洗由は踵を返しもう歩き出している。その洗由を、沖斗が留めた。

「どうした？」

「しっ」

返事の代わりに、沖斗は人差し指を口に当てた。その刹那、茂みの中でカサリと小さな音が鳴った。

——何かいる。

美玻は思わず息を飲む。そして、無意識にスズリの袖を掴んでいた。

その二人を残して、沖斗と洗由が目配せを交わして腰の剣を抜くと、気配を殺して茂みを挟みこむように移動する。その間にも、カサリカサリと、何かがゆっくりと茂みを移動していく音が聞こえている。沖斗はその音を頼りに目標を見定め、思い切りよく茂みに剣を刺し込んだ。瞬間、遠慮がちだった音が、ガサガサッと大きなものになった。それと共に、茂みの枝が揺れ、今度は洗由がそれを目掛けて剣を振り下ろした。

刹那——

「ぐわえっぐわえっ」

という、珍妙な獣の声が辺りに響いた。

「・・・今宵の夕餉は肉、ですかね」

スズリの声がどこか嬉しそうなのに、美玻が顔を顰めた。

沖斗と洗由が、剣で茂みを掻き回す度に、ガサガサと派手な音を立てながら、獲物は「ぐわえっぐわえっ」と耳に馴染みのない妙な鳴き声を上げながら逃げ回っている。その鳴き声を聞きながら、スズリが、はて・・・と首を傾げる。

「・・・兎ではないのかな。鼠とも・・・違うか。狐狸の類・・・にしても、妙な声だし・・・一体、何なのだろう」

思案を巡らせるスズリの横で、茂みで動く影を目で追っていた美玻が断言した。

「・・・猫」

「猫・・・？」

と、彼が怪訝そうな顔をした所で、茂みから小さな獣が転がり出た。大きさ的には、確かに猫ぐらいだが、それにしても尾が、体長の数倍はあろうかという程、異様に長かった。動きはかなり敏捷で、普通なら容易には捕まえないところであろうが、その妙ちくりんな尻尾のせいで、獣は捕獲の憂き目を見ることになった。獣は物凄い勢いで暴れまわるが、長い尾の先端を捕まえた沖斗の手は、それをしっかりと掴んで離さない。

「これは・・・山猫、の一種でしょうかね」

スズリが、遠巻きにその珍しい獣を検分するように眺めて言う。まるで蛇のようにうねうねと動く尾を除けば、一番近いのはそれだった。だが・・・

「それにしても、変わった毛色をしているなあ・・・」

この辺りで生まれ育った美玻も、そんな色の獣を見たことがなかった。濃い茶色と言えなくもないが、それを乗り越えて、どちらかといえば・・・いや寧ろ、赤と言った方がいい色だ。

「・・・これは、玫瑰（まいかい）の獣かも知れません」

「玫瑰？」

美玻が聞き慣れない言葉を聞き返すと、スズリが頷いて説明してくれた。

「北の夕李国（ユイのくに）では、この様な毛色の獣は、幸福をもたらす有り難い獣とされていて、大事に崇め奉られていると聞きます。玫瑰というのは、夕季の高地にだけ生息する、初夏に花開く真紅の花の名なのですが、それにちなんで、その花色と同じ美しい赤色の毛を持つ獣を、玫瑰の獣と呼ぶのだと」

「玫瑰の獣・・・」

陽を弾いて艶々と光るその赤色は、美玻に、郷で祭祀の折に用いられていた法具を飾っていた柘榴石を連想させた。

——綺麗・・・こんなものが現実にいるなんて。

その姿を見詰める。

と、毛色に紛れて気が付かなかったが、獣の前足から血が流れ出ているのに気づいた。

「やだ、怪我してる・・・沖斗、この子を離してあげて」

「え・・・いや、それはしかし」

沖斗が折角捕まえた獲物に、未練がましい視線を送る。

「スズリだって言ったじゃないの。とっても有り難い獣なんだって・・・幸運をもたらす獣なのよ？まさか、食べようなんて思っていないわよね？」

「・・・それは・・・まあ・・・そうだけど・・・」

そこまで言われてしまうと、本音では、たまたま珍しい毛色だというだけの肉の塊だと思っ  
ていても、そうとは言えなくなった。沖斗は、余計な博学を披露したスズリを恨みがましい目で見上げる。

何しろ育ち盛りなのだ。それに、ただ歩いているだけの美玻やスズリと違って、荷物持ちから食料調達から水汲みから、ほとんどの力仕事を引き受けている身なのである。肉を食べねば、力が出ない。

——折角の肉なのにつ。こいつが余計なことを言ったせいでっ。

そんな心の声は、口にせずとも簡単に向こうに伝わったようで、スズリはどこか申し訳なさそうな顔をして笑っていた。

「大丈夫、今、手当てをしてあげるから・・・」

美玻は膝を付いて屈みこむと、暴れる獣の体を上手に掴んで、あっという間に懐に抱え込んでしまった。そして、尚も尻尾を掴んだままの沖斗を睨む。

「ほら、早く離して。獣は尾に触れると、機嫌が悪くなるのよ」

そう言われてしまうと、いい加減、沖斗も手を離さない訳にはいかなくなった。彼が渋々と手を離すと、尾はするすると巻き上がって薇の新芽のような形状を成し、腹の辺りに上手いこと収まった。

「ほーら、もう大丈夫」

美玻が声を掛けながら、獣の喉をさする。しばらくすると、獣はごろごろと喉を鳴らし始めた。

「・・・やはり、猫の類か」

スズリがどこか神妙な顔をして、少し離れた所から美玻の懐を覗きこむ。獣が警戒心を解いた所で、美玻が手早く前足の手当てを済ます。そして、獣をそっと地面に下ろすと、獣はそのまま

茂みの中に姿を消した。

肉を逃してしまったので、その日の夕餉は沢へ下りて魚を取った。沖斗が川辺で火を起こし、美玻が魚を焼いていると、いつの間にか、先刻の猫もどきが側に来ていた。火に炙られて、じんわりと脂の染み出し始めた魚を、真剣な眼差しで凝視している。

「やらんぞ。人数分しかないんだから」

すかさず沖斗が牽制したが、「くれ」と言わんばかりの強力な視線は、目の前の獲物を捕らえたまま動かない。

「・・・ねえ、沖斗・・・私の分なら、あげても構わない？」

美玻がお伺いを立てるように、少し上目遣いになりながら訊く。

「あのな、俺が苦勞して魚を捕まえたのは、こんな猫に喰わせる為じゃなくて、お前に・・・」

美玻が、「お願い」という顔のまま、自分を見つめているのに気づいて、沖斗は言葉に詰まったように黙って視線を外す。ややあって、目を合わせないままで続けた。

「・・・途中でへたばられたら困るから、お前にはちゃんと食べさせろって、言われてんだよ。そもそもお前は体力ないくせに、食べなかったら、明日、歩くのがもっとしんどくなるんだぞ。そういうこと、分かって言ってるのか？大丈夫とか、気持ちの持ちようでどうにかなるなんて、甘いこと考えてる訳じゃないだろうな？お前の足が遅くなれば、探索の日数はどんどん延びていく。つまり、洗由・・・に迷惑を掛けることになるんだぞ」

「・・・それは、分かってるけど・・・」

美玻がふてくされたように下を向く。たかが魚一匹に何でそこまで・・・という空気が沖斗にも伝わる。

「・・・」

——たかが、魚一匹のことに・・・何故、そんな大仰な物言いになるのか。

沖斗自身、軽い自己嫌悪を感じて、ため息を付いた。要するに、焼もちと照れ隠し・・・なのだど自覚する。自分は、猫ごときに焼もちを焼き、それを気取られぬように、妙なへ理屈を並べて、魚を死守しようとした。猫に魚をやりたくないが為に。だってそれは、美玻のために獲った魚なのだ。それを美玻が、簡単に猫なんかにするなどと言うから・・・

「・・・あ」

美玻が短く声を上げた。そちらに視線を戻した沖斗が目にしたのは、猫が獲物をくわえて暗がりへ逃げっていく後ろ姿だった。

「・・・ああ」

沖斗の口から気の抜けた声が出た。

「ごめんなさいっ・・・本当に、上げるつもりはなくて・・・一瞬で、気が付いたらもう・・・」

「・・・いいよ、もう。何て言うか・・・魚に対する執念が半端ない奴に、隙を見せたこちらが拙かったってことだろうし」

沖斗があっさりと言って立ち上がり、そのまま川の方へ歩いて行く。

「・・・沖斗？」

「もう一匹ぐらい、すぐ捕まえる」

ぶっきら棒に返された声は、でも、怒ってはいない様だった。

日暮れにはまだ時間はあったが、谷間にあたるこの場所では、陽は山の影に入り、すでに薄暗い。川の中も見づらくなっているだろうと、美玻は心配したが、沖斗は、短刀を川に投げ込む動作を何度も繰り返しながら、程なく、先程のものよりも小ぶりではあったが、数匹の収獲を手に戻って来た。

そこで、また美玻が「凄い凄い」と連呼したものだから、沖斗はバツの悪そうな顔をしたまま、魚を焼かなければならなくなった。そこへ、薪を拾いに行っていた洸由とスズリが戻った。

「何やら、そこの茂みに、金色に光る獣の双眸が見えるようですが・・・この香ばしい匂いに引き寄せられましたかね」

スズリの言葉に、沖斗と美玻がそちらを見ると、成程、茂みの間に獣の目が浮いて見える。

「・・・あいつ、まだいやがったのか」

「よもやとは思いますが、餌付けなどしていないでしょうね？」

「え、まさか、ねえ？沖斗」

「お、おう。まさかだぜ」

「・・・ならば、隙を付かれ、魚の一匹でもくすねられましたか」

「どうしてそれを・・・」

思わず答えてしまった沖斗に、スズリが失笑する。

「お二人とも、挙動が不審でしたので」

「情けない。猫ごときに、獲物を掠め取られるとはな」

洸由が大げさにため息を吐く。

「・・・それで、いま少し分け前を寄越せという所なんですかね、あれは」

スズリが、横目に猫を観察しながら言う。

「冗談じゃないぞ」

「いずれにしろ、我々の側にいれば、美味しいものにありつけると、あれはそう認識したのでしょうか」

「・・・ごめんなさい。私がうっかりしていたからですよ」

「まあ、別にそう凶暴なものでもないようですし、さほど問題はないと思いますが・・・」

「・・・本当に？」

「ええ、心配しなくても大丈夫でしょう」

美玻がほっとした表情になる。そんな様子を見ていて、沖斗は複雑な表情を浮かべた。

大丈夫だと、美玻にそう言ってやれる余裕が自分にはない。スズリは旅の経験も豊富だし、何でも良く知っているし、何より自分よりずっと大人だ。それは単に年齢の差というだけでなく、それ以上に、これまでの人生で蓄積された経験に大きな差があるのだ。そのことを思わずにはいられない・・・

「成程、大丈夫、大丈夫と、そうやって女を手懐けていくのだな、そなたは」

洸由にからかうような口調で言われ、スズリが笑いながら顔を顰める。

「これは、人の悪い言い様ですね」

「いや、単純にそなたの人誑しの才に興味があってな。跳ね返りと悪名高い、我が妹を手懐けた手管など見事なものだと、常々感心して見ていた」

「波紅様を手懐けるなどと、畏れ多い」

「無礼講だ、本当のところを申して構わぬぞ」

「私は、ただ誠心誠意お仕え申し上げていただけです。それに、本当に懐かれていたのですから、このようなことにはなりませんように・・・」

スズリが口元を僅かに歪め、包帯を巻いた手を示す。

「それは、されるだけのことを、そなたがしでかしたから、ではないのか・・・」

「・・・だから、そこが未だに良く分からない。これは、自分のものだという印なのだと、そう言われましたが・・・」

「・・・あの・・・波紅様は、スズリのことが好きだったから・・・スズリがご自分の元から離れていくのが、お寂しかったのではないのでしょうか・・・だから、いつでも思い出して貰えるようにと、ご自分の印を・・・」

「好き・・・？波紅が、この男のことを？」

美波の意見に、洸由が思い切り意外だという顔をした。

「え・・・いえ・・・そうなのかなって、単純に思っただけなんですけど・・・」

「まあ、あの性格では、素直に惚れているのだとは、認めそうにはないが。そうか、好きか。・・・それ程に惚れられている気分はどうだ？色男どの？心当たりはあるのであろう？惚れられるだけのことは、したのであろうからな。もう抱いたのか？」

ここまで来ると、洸由はもう完全に興味本位で訊いている。

「あの、ですねえ・・・一介の絵師ごときが、一国の姫様に手を出したりしたら、命に係わることになるんですよ？・・・私はそんな愚かな真似はいたしません。第一、いっつも側に侍女が控えている状態で、何がどうなるとそういうことになる訳ですか」

もの凄く真剣な顔をして反論したスズりに、洸由が苦笑する。その様子に、スズリがからかわれたのだと気づき、慙然とした顔になった。

「好きは好きなのだろうよ。あれは、美しいモノを事更に好んで、集めまくっていたからな」

「モノ・・・ですか」

『これはあなたが、間違いなくこの私のモノである証』

包帯の下、梔子の花を象った波紅の印に、それを刻まれた時の言葉をその痛みと共に思い出す。

「波紅は、遠からず十季へ輿入れになるだろう。父上には、あれの浪費癖によって、十季国の財政を傾けさせるお積りらしい」

冗談めかして洸由が言う。

『これはあなたが、必ずこの場所に戻ってくるという証』

「・・・知っている」

輿入れの話が本当なら、スズリが城に戻る頃には、波紅はもうそこにはいないということになる。梔子の花の持つ純白の気高さと、人を惹きつける濃密な香りは、間違いなく波紅を思い起こさせる。そして、今更ながら、彼女が自分に対して誠実であったのだと気づく。スズリの描く絵に感動し、それを純粹に愛した。

『自分が見たこともない世界の風景を、こんな風に見ることが出来る。それがどれ程素晴らしいことか、あなたには分かる？』

初めてスズリの絵を見た時に、波紅は瞳をきらきらとさせながら言った。その顔を、今更ながら思い出した。自分はそんな人間に対し、口先では誠心誠意と言いながら、不誠実に対していた。それを、見透かされていたのかも知れない。

——これは、その戒めか。

彼女の信頼を・・・心を裏切ったことへの、戒め。自らの所業に、そんな風に、正面から否と言われたことはなかった。それは、波紅以外、スズリに対して、そこまで真摯には向き合っていなかったということになるのだろう。

——波紅様だけが・・・気づかれた。

美しいものに殊更執着するという波紅は、スズリが心に秘めている、美しくない部分に気づき、それを戒めたのか。完璧に美しくあれと。そんなものは幻想の中にしか存在しないことは、彼女も承知していて尚、それでも敢えて、スズリの心に爪を立てて見せた。その傷によって、スズリに何らかの変化が訪れることを望んだのか。

——美しいものは、美しいままにあらねばならぬ、と。そう申されるのか。

そこまで買い被られていたのかと思うと、自嘲せざるを得ない。自分はそこまで立派な人間ではない。ただ、そこまで気合いを入れて思いを込められたのだと思えば、心のどこかは確実に痛んだ。その辺りは、波紅の思惑通りという訳か。

「・・・話を戻すが、この娘は波紅ほど頑丈ではないのだからな。無暗に弄ぶような真似はしてくれるなよ」

不意に自分の話になって、美玻が驚いた顔をする。

「それこそ、杞憂でしょうよ」

洗由の言葉を、スズリがすかさず笑って返したので、それは冗談だったのだと知り、ほっと肩を落とした。そして、この一件で、案外、洗由にも本心を冗談で誤魔化すような所があるのだと知った。スズリも、美玻に対しては、からかい口調が多い・・・気がする。真面目な沖斗は、冗談などはほとんど言わないが、こちらは得てして口数が少ない。

——嫌だわ・・・まともな会話の出来る人が、一人もいないじゃないの・・・

そうになってしまう原因が、自分にあるのだということには、まだ気づいていない美玻だった。

## 第4章 猫と心聞

夏とはいえ、山中での夜明け前には、さすがに肌寒さを感じて、美玻は体の熱を逃がさないように無意識に身を丸く縮めた。ついでに、手に触れたふかふかした温かいモノを、自分の身に引き寄せる。

——何だろう、これ・・・あったかくて・・・何か気持ちいい・・・

腕の中にすっぽりと収まった、ふかふかの毛玉のような代物の心地よさに、本能のままに頼ずりをする。

「ゴロゴロゴロ」

首の下辺りで、獣が喉を鳴らす音がした。

「ん？」

それを訝しんで目が開いた。見れば美玻の腕は、赤い毛玉を抱え込んでいた。

——・・・うっ・・・わああ・・・

毛玉が驚かない様に、声を上げそうになったのを堪え、それを抱えたままゆっくりと身を起こす。

「起きたのか・・・」

火の番をしていたらしいスズリが、美玻に気づいてこちらを向いた。

「・・・お前、何っ・・・を・・・」

「しいっ」

何かを言い掛けたスズリを、美玻が慌てて制止する。そこから、ひそひそ声の応酬が始まる。

「（お、き、ちゃう、からっ・・・）」

「（手懐けて、どうするんだっ？）」

「（手懐けた訳じゃ、なくて、これは、勝手にっ）」

「（って、すでに懐かれてるってことだろうがっ）」

「（え・・・ああ、そうなのかな・・・）」

「（そんなあからさまに、嬉しそうな顔を・・・）」

「（え・・・だって、かわいいし、あったかいし、ふかふかだし・・・）」

「連れて行きませんよっ」

スズリが地声できっぱりと言った。

「え～でもお～」

「これ以上荷物を増やしたら、沖斗が気の毒でしょう」

「荷物って・・・足があるのだから、自分で歩けるわよね？柘榴（ザクロ）」

「柘榴っ？って、すでに名前まで付けているんですか？呆れた・・・」

「名前っていうか・・・柘榴石みたいに綺麗な色だから。あのね、柘榴石は挫けそうな心に勇気を与えてくれる守り石って言われてるのよ？」

「・・・それは、知っていますけれどね。迷いを打ち消し、目標を見失しなわないように、守り導くという、有り難い石だというぐらいは。でも、それは、ただの獣でしょう」

「でも、この子はきっと、あたしには柘榴石なんだもの。スズリだって言ったじゃない。玫瑰

は、幸運をもたらす有り難い獣だって」

「言いましたが、それは・・・」

「・・・何事だ、朝っぱらから騒々しいな」

次第に、言い合う声が大きくなっていったらしい。洸由と沖斗が共に目を覚まして身を起こした。そして、

「そんなモノ、付いてくるというなら、勝手にさせればいいだろう」

という洸由の一言で、事の決着はあっさり付いた。スズリが顔を顰めたのに対し、美玻の表情がぱっと輝く。が、

「・・・もしもの時に、非常食にもなるしな」

という洸由の一言がさらりと付け加えられて、美玻もまた顔を顰めることになった。

「しかし、洸由・・・」

何故か尚も食い下がろうとするスズリに、洸由が何か思い当たったような顔になり、ふふんと思わせぶりな笑みを零した。

「・・・お前、もしかしなくても、猫が苦手なんだろう？」

「・・・いや・・・まさか・・・」

洸由の言に、美玻はスズリがこの獣のそばに、決して近寄らなかったことを思い出す。  
——そうか、スズリは猫が苦手なのね。

勝手にそう納得すると、スズリの心配を取り除くべく言う。

「大丈夫よ、スズリ。ほらっ、この子その辺の普通の猫とはちょっと違うみたいだし」

美玻が猫を抱きあげて、スズリの方へ見せる。まだ寝ぼけているらしい猫の尻尾は、弛緩したままで、だらりと地に垂れ下がっている。その獣の特徴たる長い長い尾は、確かに普通ではないが、しかし。

「いやこれ、どう見たって、猫だろうがっ」

スズリは自分の方へ捧げ持たれた猫に、思い切り及び腰になる。

「やっぱり、猫嫌いなんじゃん」

沖斗がぼそっと零した。

「面白い」

スズリの弱点を見つけた洸由は、したり顔になる。

「面白くありません」

そう主張したスズリの意見は、残念ながら、多数決で却下されることになった。そうして、美玻が柘榴と命名した猫は、彼らの旅に同道することになった。

それから、数日後の夜のことである。

西に見えたという天鏡を探して幾つか山を越えた一行は、その日は、見晴らしの良い岩場で夜を明かす事になった。夜が明けて、ここをもう少し登れば、かなり遠くを見渡せる頂に出る。そこから、今一度、目指す場所を確認しようという話になっていた。

その夜の火守番はスズリが最初で、他の者たちは、風を避ける為にそれぞれ大きな岩の間に挟まる様にして、すでに寝息を立てていた。

長い静かな夜の手持ち無沙汰に、スズリはいつものように懐に入れていた巻紙と矢立を取り出すと、紙の上に筆を滑らせた。そこに、昼間、目にして感銘を覚えた景色などを、思いつくままに描き連ねていく。これは言わば、記憶を整理する為の落書きのようなものだ。そんな風に改めて整理された景色は、スズリの頭の中の画帳に整然と並べられ貼り付けられて、それが描きたくなった時に、自然とその景色が頭の中に浮いてくるのだ。観察力と記憶力。絵師に必要な、そんな基本的な素養をスズリは生まれつき持っていた。

そういう才があるのだと認められて、やがてその才を生かす仕事を与えられたのは、十代の半ば・・・そう、丁度、美玻と同じ年の頃のことだった。諸国を流れ歩き、そこで見たものを描いて、本国へ送る。初めは、それがスズリの旅の目的だった。

いつしか無心に動いていた筆が、そこに細長い生き物を描き出していた。

あの夏至の日に見た、龍。

必死に探しながらも、そんなものが本当にこの世にいるのかと、どこかで信じられずにいた龍の神々しいまでの姿を、あの娘は自分に見せたのだ。

――確かに、龍はいるのだ。

この世のどこかに。自分たちが過酷な境遇を強いられることになった、その元凶たる忌まわしき生き物。欲深い人間に、不老不死という人外の力を与えた、忌々しきモノ・・・

火にくべた枝がパチリとはぜた。その音に我に返ると、火の向こうに猫の姿があった。その金色の瞳が、スズリの筆先をじっと見据えていた。

「・・・こちら側には、来るなよ」

牽制しつつ、スズリは今描いた部分の紙を破り取ると、丸めて火に放りこんだ。瞬間大きくなった火を、猫が驚いたように見上げる。やがて猫は、興味を失ったように、スズリに尻を向けると立ち去っていく。長い尻尾は、寝惚けている証拠なのか、だらしなく伸びきったままで、猫本体の動きに連動しながら、器用に石を避け蛇の様にうねりながら引き摺られて行く。

――本当に・・・うねうねと、蛇のようだ・・・

本当に、これは猫なのか。見聞の広い絵師であるスズリの中に、単純な好奇心がもたげる。

――この、珍しき生き物・・・

出来心だったと言えいいのか、スズリは手元にあった木の枝を摘み上げると、徐にその尻尾をつんつんとつついていた。その途端、見事というより他に言い様のない速さで尻尾が巻き上がり、本体が毬のように跳ねたと思った時には、その前足がスズリの持つ枝に挑みかかって来てい

た。

「うあっ・・・ちょっと待て、お前っ。今のなし、なしだからっ・・・」

驚いたスズリは怯えた様に立ち上がり、猫を追い払おうと枝を振り回した。が、それがかえって猫を枝にじゃれつかせる結果になったのは言うまでもない。なす術もなく、必死の形相でしばらく猫と格闘した末に、スズリはようやく、枝を離せばいいのだという簡単な答えに気づいて、それを慌てて火に放りこんだ。

「お前っ、いい加減にっ、しろよっ」

心臓が、昨今ないぐらいに、ばくばくしているのが分かる。肩で息をしながら睨みつけると、猫が、実に人間臭い表情をした・・・ように見えた。

——こいつ今、笑っ・・・

見間違えか。一瞬、そう考えた後で、スズリはある確信を持って、対象物に対する恐怖心を封じ込めると、決死の覚悟でその尾をがっしりと掴んだ。と、

(うわっ、離せってば、この野郎)

よもや、猫嫌いのスズリに尻尾を掴まれるとは思っていなかったのだろう。思い切り狼狽した声が聞こえた。

「・・・お前・・・」

懸命に尾を引いて逃げようとする猫の体は、しかしスズリの手によって、ずるずると引き戻されて行く。

(やめろよ・・・何引っ張って・・・いった・・・痛いって言ってんだろ。離しやがれえ)

「・・・お前、何？」

目の前に引き寄せたその赤い背に向けて言ってやると、猫が怪訝そうに振り向いた。

(・・・まさ・・・か・・・聞かれてる？)

「ああ、聞こえている」

(お前、心聞(しんもん)か・・・)

「まあね」

スズリが答えると、猫が目を丸くした。

心聞とは、遠見と同じ、七宝五鍵の一つで、相手の心の声を聞く能力だ。他の心聞のことは知らないが、スズリの場合は、相手の体のどこかに触れている時にだけ、その声を聞くことが出来、その思考を覗き見ることが出来る。だから、実は美玻が龍を見た時、スズリにも彼女が見たのと同じ光景が見えていた。だが、余計な波風を避けるために、その能力のことは、他人には無暗に明かさないと決めていたから、あの時はどうしても、美玻に自分の口で話させなければならなかったのだ。

「で、お前は何だ？」

(・・・何に見える？)

「まあ、見かけは猫だな。尻尾は論外としても」

(なら、猫だな。尻尾はこれ以上短く出来なかったんだよな・・・元々が長すぎて・・・)

「ただの猫ってことはないだろう。にしては、思考が人間臭すぎんだよ。普通の獣はな、腹減っただの、眠いだの、逃げろ、走る、飛ぶ、・・・あっちだ、こっちだ・・・そんな単純なことしか考えてないものなんだよ。心聞のことにしたって・・・」

(・・・なら。もの凄く賢い猫ということで、手を打て)

「口を割る気はない様だな・・・」

(うわぁ、何しやがんだよ、お前はっ)

スズリがいきなり猫の尻尾の根元の部分を掴んで、その体を焚火の上にかざした。

(やめろ、熱っつい、離せえ・・・)

「離していいのか？」

スズリが意地の悪い笑みを浮かべる。

(ばっ・・・やめろ、はなすなっ)

「で？お前、一体・・・」

しかし、猫にとって幸いなことに、尋問はそこで終わることになった。

「ちょっと何してんの、スズリ。止めてよ」

剣呑な気配に目を覚ましたらしい美玻が、もの凄い形相でやってきて、あっという間に猫をスズリの手から奪い返した。

「・・・信じらんない。いくら嫌いだからって、こんな酷いことするなんて」

わざとらしく、くたっとしている猫を、壊れモノのように大事に抱き抱えながら、美玻がスズリを睨みつける。

「・・・いや・・・これはつまり・・・」

弁明しかけて、自分が心聞であると明かさずに、事情を説明するのはもの凄く面倒くさいことに気づく。

「・・・悪かった。もうしない」

何事もなくこの場を収める為に、スズリは素直に頭を下げてみせた。

「本当に絶対よ」

「ああ・・・本当にもう・・・しない」

――ただの猫ではない。というか、そもそも猫なのかどうかも怪しいシロモノ。

まあ、猫でないのなら、自分はそんなにビクビクすることもないのか・・・と、思う。それが分かっただけでも、収穫があったと言うべきか・・・

――いや待て・・・。あの、猫みたいなくにゃったした躯体が、私はそもそも気持ち悪んじゃないか・・・

つまり、何の解決にもなっていない。

――何でよりによって、猫・・・

それは猫ではないけれど、自分的には、やはり猫だ。猫を大事そうに抱えて眠りに戻っていく美玻を見送ってから、火の番を交代するまで、スズリはそんな猫の攻略法を試行錯誤しながら、悶々とするようになった。

翌朝、日の出と共に山の頂上に登ると、その山の斜面を下った先に、大きな池が見えた。これが、美玻が最初に見た天鏡なのだろう。そこから少し離れた谷合いに、少し小さな池が幾つか点在しているのが、今度は他の者にも確認することができた。

美玻が崖の先に立って、その更に先を見る。その視線は正面から右に移り、今度は左に移りとゆっくりと移動していく。ややあって、美玻の指が彼方を指し示した。

「・・・今度は南よりの西だな。この時期だと、ちょうど太陽が落ちる辺りか」

洸由が言う。こうやって、遠見の目を頼りに、少しずつ進むしかないのが、何とももどかしい。だが、龍はその年ごとに、巣を営む場所を変えらるというのだから、そこは言っても仕様がななことなのだ。空を飛ぶ術のない人間は、ただ忍耐強く、一步一步歩いて行く他にない。

「行くか」

ただ、遠見の示すままに。この空の下、どこかに龍はいるのだから、進み続ければ、いずれはそこに辿り着く筈なのだから。誰もがそんなことを考えながら、いずれ待ちうける、一つの運命に向かって歩き出した。

しばらく山の稜線を辿った後で、食料を確保する為に、彼らは山を少し下った。人里を離れてから、野宿がもう当たり前になり、自然と各々の分担も決まっていた。

大抵は、美玻が木の実などを集めに、洗由が薪を拾いに行く。洗由は薪を集めながら、運が良ければ、たまに出くわす小動物の類を捕まえてくることもある。そして沖斗は、いつもの様に川べりで、短刀を長い木の枝に縛り付け銚のようにして、魚を獲っていた。少し離れた岩の上では、スズリが、身の丈程もある柳の枝の先に結んだ、植物の蔓を水面に垂らして、形だけは釣りをしている。ちなみに、こちらの収穫は、毎度期待をしないというのが、彼らの中での共通認識になっている。スズリはすでに、その辺から野草の類を集めて来て、かまどと火の準備を終えていたから、この釣りはおまけのようなものなのである。要するに、彼らの中で毎回確実に食料を確保できるのは、沖斗だけという訳だ。

そんな訳で、沖斗は膝の辺りまで水に浸かりながら、一心に川の中を見据えて、魚影を追っていた。獲った魚は、順に水際の岩の上に並べてられており、たった今捕まえた魚をその横に置いた沖斗は、案外早く、夕餉に間に合う分を手に入れられたことを確認して満足げな笑みを浮かべた。

美玻たちはまだ戻っていない。自分もそちらを手伝いに行くかと考えたところで、美玻が柘榴と命名した小動物が、岩の上の魚をじっと見据えているのに気付いた。

「一匹食うか？」

そう言って魚を摘み上げると、柘榴が薇状の尾を、ぴんと立てた。その分かりやすい反応に、沖斗は苦笑しつつ、魚を足元に投げてやる。貪り食うというままだに、柘榴は猛然と魚を食べ始めた。自分が見張っていなければ、魚は全て柘榴の口に入ってしまうのではないか。そう思わせるような勢いだ。猫嫌いのスズリに魚の番を任せるのは、どうも心許ない。そう考えて沖斗は、そのまま柘榴の横に腰を下ろし胡坐をかいた。

「・・・本当に、見事に赤だな。勇気の出る柘榴か」

骨も残さずに、一匹きれいに食べきったところで、沖斗は柘榴を抱きあげて自分の足に乗せた。ふかふかとした触感に、何だか心が緩んだせいだろうか。

「・・・あんな泣き虫で怖がりな奴を、俺は・・・こんな過酷な旅に連れ出したりして良かったんだろうか・・・」

気づけば、猫相手にそんなことを呟いていた。こんな小さな獣を勇気の糧だと言って、必死に気持ちを鼓舞しなければならない。そんな美玻の心情を思うと、遣り切れない思いがした。

「・・・本当は、あの時に死なせてやるべきだったんじゃないか・・・その方が、辛い思いをさせなくて済んだんじゃないかって・・・今更そんな事を・・・言う資格もないのに、俺がっ・・・」

体を締めつけられて、居心地の悪そうに柘榴はみじろぎをする。すると、その体毛の上に数滴、水の雫が落ちた。柘榴は、何だ？というように首を伸ばして、沖斗の顔を見上げる。ちょうど沖斗が、目元を擦った所だった。

「・・・それでも・・・死なせたくなかったから・・・どんな手を使っても・・・死なせたくなかったんだ、俺は・・・」

「沖斗一っ」

遠くから、美玻が自分を呼ぶ声がした。

——こんな風に・・・

その側にいられたら、どんなに幸せだろう。彼女と言葉を交わすことが出来たら。それはどんなに幸せなことだろうと、自分はずっとそんなことを考えていた。

もうずっと前から・・・

そもそも沖斗は遠見の郷の人間だった。城に仕えるに当たり、その出自を伏せたのは、美玻を救う為に他ならなかった。

それは、沖斗が十で、試しで認められて遠見の見習いとなってすぐのこと。郷長の家に出入りを許されるようになった彼は、そこでたまに美しい娘を見掛けるようになった。そしてその娘に、淡い思いを抱くようになった。その娘は族長の娘で、沖斗が容易に言葉を交わせるような人ではなかった。それでも、時折その姿を目にするだけで、彼女が元気に笑っているだけで心が弾んだ。まだ子供だった沖斗には、そんな些細なことだけで、とても幸せであったのだ。

五年前のあの夏至の日。

まだ半人前ながら、沖斗は遠見の一人として、果て見の頂にいた。そこで試しを行った美玻の、とてつもない力に、鮮烈な感銘を受けた。沖斗がずっと美玻に抱いていた淡い思慕は、その瞬間に、強い崇拜へと変貌した。彼女が放った輝きは、遠見の宝だと思った。そんな輝きを、間近に目にすることが出来た自分を、本当に幸運な人間だと思った。

――幸せだった。

それが一瞬にして、瓦解した。茜天の下、美玻の運命は変転した。龍を見たというだけで、崇り者とされ、社に幽閉された。それまで、彼女をさんざんに称賛していた人々が、掌を返した様に、その存在を忌わしきモノとして扱うようになった。

――美玻は、郷の宝であるのに・・

そんな郷の因習に、沖斗は憤り絶望した。

そして、すぐに考え始めた。生贄となった美玻を救い出す方法を。

このまま郷にいて、たいした力を持たない遠見のままでいても、自分には何も出来ない。族長の決定を覆せるほどの力とは何か。そう考えた時、その頭に過ったのは、王族の力だった。王都へ行き、美玻を助けることのできる力を、きっと手に入れる・・そんな決意を胸に、彼は郷を出た。

強い信念を抱いて仕官した沖斗の働きぶりは、洸由の目に止まり、やがてその信頼を勝ち取って、その右腕と認められるまでになった。

郷を出て、五年近い月日が過ぎていた。それでも、美玻は社に封じられながらも、まだ生きていてくれた。もうすぐだ。どこかにそんな希望を抱き始めていた。

そんな頃だった。

沖斗を待っているように思えた運命が、鴻からの使者が来たことで、にわかに動き始めた。そして龍の探索の前に、美玻が生贄に捧げられることが決まってしまったのだ。

もうどうしても、助けようがないのか。思い詰めるほどに、考えに考えた。いっそもかも捨てて社に押し入り、美玻を奪って逃げるか。そう考えた。しかしすぐに、それでは駄目だと思い至る。

美玻自身が救われる事を望んでいないのだ。彼女は、自身の罪を恥じ、郷の因習に従い生贄となることでしか、それを償うことができないと、頑なに信じている。そんな状態の彼女を救い出しても、彼女は自分を救った沖斗を怨み、そんな風に生きながらえた自身を、一生赦すことが出

来ないだろう。

――それでは、駄目なのだ。それでは二度と、彼女は笑顔を取り戻すことが出来ない。

本当に美玻を救い出す為には、彼女に生きる理由を・・生きていてもいいのだと思える確固たる理由を、与えてやらなければならないのだ。

――考えろ、考えろ、考えろ、沖斗・・

その末に、沖斗の思考は、ある場所へ行き着いた。

――龍の探索には、遠見が必要だ。では、もし、その遠見が一人残らずいなくなってしまうたら。美玻の他に誰もいないということになったら・・

それこそ美玻の存在は、この国の宝ともなるのではないか。美玻は必ず生きることを許される筈だ。彼女自身もまた、生きなければならないのだと、納得するのではないだろうか。

――しかし、その為には・・

その怖ろしい考えを否定する気持ちが、すぐに芽生える。そんな怖ろしいことを、果たして自分に出来るのか。そして、自分の命が、そんな怖ろしいことと引き換えに救われたのだと知ったら、美玻は・・だが、一度思い付いてしまったその魅惑的な方法を、沖斗はどうしても、諦めることが出来なかった・・畏れと焦燥と絶望と、そして美玻の笑顔とが心の中で果てしなくせめぎ合った。そんな葛藤の末に、沖斗はついに決断した。それは、自分の欲望にもっとも素直に従った結果だったとも言えた。

――ただ、自分が、美玻という存在を失いたくないから。

他の者のことは勿論、美玻自身の気持ちすら、そこには入っていない。ただ自分。それだけだった。答えを出すには、それ以上のことを考える余裕など、沖斗の心にはすでに残っていなかったのだ。

洸由の遠見出迎えの一行が、郷へ着く前の晩に、沖斗は密かに宿を抜け出し、馬を走らせて郷へ向かった。そして、東方の那榔国（ナダのくに）から渡って来たという特別な毒を、郷の井戸に投げ込んだ。それは、痕跡を残さず人を殺めることが出来るという触れ込みの毒・・緩やかに人を殺める毒だという。飲んだ者は、半日ほどで眠気を覚えて眠り込んで、そのまま二度と目覚めることはない。今更言い訳にもならないが、思考に疲れ、麻痺した神経に残っていた僅かな良心が、あまり苦しまずに済むという、そんな毒を選ばせたのかとも思う。そして、彼の望み通りに、遠見の郷は滅んだ。

彼らは、美玻を殺そうとした、その報いを受けたのだ。

――神は自分を止めなかったのだから。

手を下したのは自分だが、それは間違いなく神の裁きだったのだと、沖斗は自分に言い聞かせた。

——だって、生き残ったのは美玻の方だったのだから・・・

「うわぁ・・・今日は大漁だね。やっぱり沖斗は凄いよ。頼りになるなぁ・・・」

凄いと云われて向けられた笑顔が、事更に眩しく感じて、胸が締めつけられた。だが、それを悟られることのないように、平静を装う。

「お前の凄いは安売りが過ぎて、あまりありがたみを感じないんだがな・・・」

「ええ・・・そんなことはないよ。あれ、柘榴？どこ行くの？」

腕に抱えていた猫が、そこからひょいと抜け出して、火を熾し始めたスズリの方へ寄っていく。火を反射して艶を帯びた赤い柘榴石の色に、気が付けばいつしか願っていた。

——美玻に罪はないから。

この旅が終わったら、全ての罪は自分が負っていくから。

——だから。神よ、どうか・・・

どうか、この笑顔がずっと続くように、と。

## 第5章 風花の訪れ

---

それから、幾枚かの鏡を辿り、彼らは秘境とも言うべき山の深部に至っていた。

龍の降らせた雨は、陽によって再び天に吸い上げられ、或いは大地へと染み込んで、訪ね行く鏡は、次第に小さなものになっていった。気が付けばもう夏は過ぎ、山地には秋の気配が見え始めていた。広葉樹が赤や黄色に色づき始め、冬に備えて木の実を集めに走る小動物たちが、枝の上を忙しく動きまわっている様を良く目にするようになった。

本来ならば、寒さを感じるような時期は、今少し先の筈なのだが、その日の朝は特別に冷え込んだ。思いがけない寒さに目を覚ました洸由は、目の前をちらちらと、冬の訪れを告げる風花が舞っているのに気が付いた。

「お目覚めになりましたか」

火の番をしていた沖斗に声を掛けられた。

「今朝は、特別に冷え込みましたね。まだ、秋が始まったばかりだと言うのに」

「ああ、そうだな」

――何てことだ。今年は、事更に冬が早いのか。

洸由は難しい顔をして考え込んだ。

通常、探索は風花が舞うまでと限られている。その頃にはもう、龍は天へ還ってしまい、例えば巣を見つけられても、そこにもう龍はいないと言われていたからだ。実際問題として、風花を合図に引き返さねば、冬が来る前に、無事に山を下りることは難しくなる。これまでの探索とて、一年で終わることは希であり、だいたいは数年から、長い時には五年以上もかけて龍を探し続けたという記録も残っている。だから、ここで引き返したとしても、洸由の働きが不当に低く見積もられることはない。だが・・・

――ここまで来て。

何の成果もないまま、引き返すのか。その思いは、洸由の心に言いようのない敗北感を植え付けた。それは、彼が常に無意識に抱いている焦燥感のせいだったのかも知れない。今はまだ、耐える時なのだと、自身にそう言い聞かせても、この数か月の苦労の全てが徒労に終わったのだと思うと、どうしようもなく気持ちが腐った。

やがて起き出したスズリと美玻が、何やら喧々と言い合いながら、朝餉の支度を始めた。傍目には喧嘩しているように見えるが、あれはあれで、きちんと意志疎通が出来ているのだ。そんなことが、最近ようやく分かって来た。要するに、気心が知れた仲という奴だ。

スズリという男は、女をただ甘やかして甘やかしてその気にさせるのだと思っていた。だが、美玻に対しては、甘やかすというよりも、どちらかと言えばきつい当たり様をしている。美玻曰く、「意地悪」な程に。それなのに、どういう訳か、美玻はスズリに一番懐いている。その事実が、洸由にはどうにも面白くない。スズリ自身は、美玻が自分を好きになることなど杞憂だと言っていたが、美玻の懐きようを見ていると、果たして本当に杞憂であると言い切れるものかと疑いたくなる。

――あれは、この国でただ一人の遠見なのだぞ。

本来ならば、どこの馬の骨とも知れない、異国の人間が気安く関わっていい者ではないのだ。この先何年かは続いていくのであろう探索も、あるいは、何十年後かに又来るであろう、次の探索も、もはや美玻の存在無くしては成し遂げられない。

この比奈国にとって、美玻は大切な道具だ。

――いや、この私にとってもだ。

その存在は、必ず自分の手の中に、自分の意志の及ぶ所にあらねばならない――確実に。

万が一にも、次の探索の指揮を、洗由以外の誰かが執ることなどあってはならないのだ。更に言えば、彼女がいずれ子を成し、その子が遠見となった先も、自分はずっと探索に関わり続けていなければならない・・そうすることで、洗由の王宮での地位は確固たるものになっていくのだから。

洗由の目に冷たい光が宿る。つまり――美玻が、自分よりもスズリに懐いている現状は、言語道断だと言わざるを得ない。

「沖斗・・・お前は、あの娘のことをどう思っている」

「どう・・・とは」

洸由の唐突な問いに、沖斗は面食らったような顔をしている。

「女として、どうなのかという話だ」

「・・・」

沖斗は答えあぐねて俯く。

自分の気持ちは、決して表に出すべきものではないと思っている。それを洸由に悟られたのかと、沖斗の心は動揺した。

「妙に子供じみていて、そういうことを連想させないような振る舞いばかりしているが、あれだって、もう十五の娘だ。嫁に行くのに早すぎる年でもあるまい。遠見の血を絶やさぬ為にも、早いうちに子供を産ませておくのが得策だとは思わぬか」

「得策・・・」

その言葉は、美玻が国を繁栄に導くための道具にしか過ぎないのだと語っていた。

「お前さえその気であれば、この旅の間に美玻をものにしろ。この私が許す」

「・・・洸由」

思わず眉根を寄せた沖斗に、洸由は構わずに続ける。

「間違っても、あれに持って行かれるようなことになっては困るのだ」

洸由の視線の先には、スズリがいた。

「何しろ、美玻は比奈の財産なのだからな」

「・・・しかし。俺には・・・」

美玻に対する想いは、胸の中で溢れ出しそうになりながら、日々、沖斗を苦しめている。それでも、美玻のために多くの命を奪ってしまった自分は、その想いを決して外に出してはいけないのだと思っている。

——それに、美玻が好意を寄せているのは、自分ではない・・・

そんな自分が美玻を抱けば、間違いなく彼女を傷つけるだろう。自分にそんなことが出来ないのは、分かり切っていた。

「俺には出来ません・・・」

沖斗は許しを請う様に頭を垂れた。

「まあ、真面目なお前のことだから、そう言うだろうとは思っていたがな・・・」

洸由が含み笑いをしながら言う。

「少なくとも、お前はあの娘を気に入っているようだったから、脈が無い訳ではないと、多少は期待をしたんだが」

「・・・」

自分の思いは、やはり見透かされていたのか。そんな思いに言葉がない。

「仕方ない。美玻は私が抱こう」

「洸由」

沖斗が弾かれたように顔を上げた。

「身分を考えれば、正室にという訳にはいかないが、それなりに不自由のない暮らしは約束して

やる」

「・・・お待ち下さい。美玻は・・・この国で唯一の遠見。国の宝となるべき者ではないのですか」

「なればこそなのだ、お前には理解できぬか」

「しかし・・・」

「全ては、この比奈の為だ」

――他に替えのきかない特別な力は、権力の糧となる。

それは王族である洸由には、当たり前過ぎる理屈だった。そして、それを否定する術を、その臣下である沖斗は持っていなかった。

洸由を尊敬していた。自分を拾って引き立ててくれた恩があるというだけではない。王族とは名ばかりに、その権利だけを貪る他の無能な王子に比べ、洸由はいつも国のことを考え、常に前を向いて行動をしていた。その原動力が、胸に秘めた野望の為なののだとしても、最終的には国を豊かにし、民に安定した暮らしをもたらすという目的を忘れずに持っている。その力強さが好きだった。忠誠を捧げるのに、これ以上の主はいないと、そう思っていた。

美玻のことにしても、それで彼女が幸せになれるとは言えないが、少なくとも王宮の中では、間違いなく大切に扱われる立場になるのだろう。道理では理解できる。しかし、美玻に対する想いを抱え込んでいる気持ちの方は、すんなりと納得してはくれなかった。

沖斗はその日一日を、胸の詰まるような思いを抱えて歩いた。いつにも増して口数のないことを、美玻が心配して気遣う度に、気持ちが大きく波立った。

陽が傾く頃に、野宿の場所を定め、いつもの様にそれぞれの仕事に掛かる。美玻が薪拾いに林へ入って行くのを確認するように間をおいて、洸由がその後を追っていった。

沖斗は、林に消えていく洸由の後ろ姿を、険しい顔で見据えていた。無意識に握られたその拳は、いつしか小さく震えていた。

こんな秘境に、人の気配がある。スズリは数日前から、自分たちの後を付いて来る者の気配を感じていた。

その日は、前日に洸由と沖斗が珍しく野兎を数羽捕まえてきていたから、スズリは石を積み上げた竈の側で獲物の解体をしていた。自分で思うよりも、作業に没頭していた様で、ひと段落ついて顔を上げた時には、近くに他の三人の姿はなかった。薪が来なければ、火は起こせないから、スズリは湧水で手を清め、近くの岩の上に腰を下ろした。見上げた空は高く、朱に染まりかかった雲がゆるやかに流れていく。

――もう、すっかり秋だな。

今朝方には、風花が舞っていた。こんな山奥では、冬ももう間近だ。

洸由は、もう一度風花を見るまでは、探索を続けると言っていたが、それでも、それも両の手で数えられる程の日数しか残っていないのだろう。探索の最初の年から目的のものを見つけられるとは思っていなかったが、ここまで来ても尚、龍は遠いのだと感じる。今回は、運よく偶然が重なって同行を許されたが、美玻も随分と成長して遠見の役割を理解し始め、洸由や沖斗とも打ち解けたとなれば、来年、比奈の人間ではない自分が、探索に同行を許される可能性は低い。

――まあ、そうなればそうなったで、密かに後を付けていくだけの話だが・・・

カサリと、葉の擦れる音がした。

すぐ近くに、その気配はあった。こうしてスズリが一人の所を狙って近づいて来たのだとすれば、相手の興味があるのは、比奈の龍探索ではなく、スズリの方だということだ。正直に言えば、刺客の類を送り込まれる心当たりは、幾つかはあった。感覚を研ぎ澄まし、相手の気配を探る。スズリ個人に用があるのだとしても、龍の探索も大詰めの今この場所にやってきた人間を、そのまま帰す訳にもいかないだろうと思う。自分がここにいることを、知られる訳にはいかないからだ。面倒くさいと思いつつも、スズリは懐に忍ばせていた小刀を握む。

「何者か」

強い口調で誰何する。すると、少し離れた藪から、ガサゴソと大きな音がして、思いがけずあっさり一人の男が姿を見せた。

「涼璃様・・・」

そう声を掛けて、スズリの側に寄ると、男は畏まって頭を垂れた。

「お前・・・鴿帆（レイハン）か。何故このような所に・・・」

見知った男だった。鴿帆は、本国で手広く商いをしている商人である。

商人――しかも、生え抜きの鴻商人だ。

そして彼は、スズリが旅に出る時にはいつも、その準備を請け負ってくれている人物であった。特別な事情を抱えているスズリにとって、数少ない信用の置ける人間である。

特別な事情――それは、スズリが鴻国第十三皇子という立場にありながら、密偵として各国を巡っているという事情であった。

その彼が何故、こんな山奥にいるのかと思う。商いで他国へ出向くことが無い訳ではないが、

流石に、この比奈の山深い秘境で行き会うには、相応の理由が必要だった。

「ずっとお探し申し上げておりました」

「探していた？この私を？・・・何故」

スズリが怪訝な顔を見ると、そこで鴿帆は、徐にある名を口にした。

「燥怜（ソウレイ）様のご命令を、あなた様にお伝えする為に、ですよ」

「兄上の・・・」

兄の名を出されて鴿帆の用件を察したスズリは、そこであからさまに顔を顰めた。

燥怜というのはスズリの三才上の兄で、鴻の第七皇子である。二人の年の差はたった三つであるが、その間には五人の皇子がいる。鴻の皇帝には子が多かった。

これまでずっと、スズリの旅の行く先を決めていたのは、この兄、燥怜だった。スズリは燥怜が望む場所へ赴き、彼が望む情報を集めていたのだ。だが、今回の龍探索は、スズリが独断で行っていたものだった。それに関して、報告も上げていなかったし、勿論兄の了解も得ていなかった。このようにスズリが勝手な振る舞いをして、その消息を絶つと、決まってこの鴿帆が、自分を探し当てて燥怜の言伝てを持って来るのだ。

それというのも、鴿帆は北方の兔琉（トル）の国の出で、芳聞の能力者であったからだ。芳聞とは、希物をその匂いによって探し当てる。そして彼の言う事には、七宝五鍵の能力を持つ者にも、それぞれに独特の芳りがあり、その匂いを頼りに所在を探り当てることが可能であるらしい。事実、毎度こうして自分の行き先を突き止められている訳であるから、あながちハツタリという訳でもないのだろう。

「涼璃様には、すぐにお戻り頂く様にと。それが、燥怜様の・・・」

「戻れと？・・・すぐに？・・・馬鹿な。ここから帰れというのか？」

「御意にございます」

「・・・ありえぬ」

——今が一体どういう状況か・・・それを戻れ？龍を目前にして・・・戻れと？断じてありえない。

「龍には関わってはならぬと。それが燥怜様からのお言葉でございます」

瞬間、耳を疑った。

「・・・私が・・・龍を探していたことを、兄上はご存じだということのか？」

そんな素振りを、自分は一度だって見せたことはなかった筈だ。龍探索は、スズリがその胸の内に秘めていた、誰にも明かしていない望みに関わるもの。

それが見透かされた。

そのことが、信じられなかった。

「私の意見をお許し頂ければ、燥怜様は、恐らく、すべてをご存じなのだと思いますよ。あなた様が、龍の鱗を手に入れ、何をなさろうとしているのかも・・・」

燥怜は、その情報収集能力の高さによって、兄弟の中でも一目置かれ、父皇帝にも高く評価されている存在なのだ。その事実を、スズリは改めて思い知る。自分のような情報収集者を、兄は

世界中に放ち、日々彼らからの報告を受け取っている。

だから、龍の探索に関わったことが知られているのだとすれば、鴿帆の言う様に、それはもう、全てを見通しているのだろう。だからこそ、この鴿帆がここにいるのだとも言えた。鴿帆とて、千里先の匂いを嗅ぎ分ける訳でもないのだ。ある程度、場所の目星を付けてからやってきたと考えるのが妥当だと言えた。

「・・・それならば、兄上は私の考えに賛同して下さる筈だ。あのお方をお救いするには、龍の鱗を手に入れる他に方法がないのだと、お分かりになるだろうに・・・」

「あのお方は・・・津澄（ツスミ）様は、もう国の影に入られたお方。あなた様に関わるべき者ではないと、燥怜様はそうお考えなのでしょう」

津澄は、鴻国の第五皇子である。――だった、と言うべきかもしれない。

彼は、後宮の妃の一人と関係を持ったという理由で罪に問われ、その地位を追われた。今は獄中で生きることを余儀なくされている。その事件は、スズリの人生も大きく変えた。というのも、その妃が、スズリの母であったからだ。

当時それは、敵の多かった津澄を失脚させる為の謀略だったのではないか、とも言われていた。津澄の清廉な人となりを見れば、彼がそのような暴挙に至るとは、到底考えにくかったからだ。スズリ自身も、母と津澄の無実を信じていた。何よりスズリにとって、津澄という兄は、彼が最も尊敬し憧れた存在であったのだ。大勢いる兄弟の中で、津澄は事更に自分に目を掛け、かわいがってくれた。そんな津澄が、よりによって自分の母を貶しめるようなことをする筈がない。微塵の疑いもなく、スズリはそう信じていた。そして、真実が必ず明らかにされる筈だと、そう信じていた。

だが、下された裁可は覆らず、スズリは母を失い、宮廷に居場所を失った。皇子という身分こそは奪われなかったものの、身近に擁護者を失った彼は、宮廷の闇に飲み込まれ、誹謗中傷の嵐に容赦なく晒されることになった。そして心に癒しようのない傷を負い、生きる気力をも失った。

そんなスズリに救いの手を差し伸べてくれたのが、燥怜だった。やがて燥怜に命じられて、スズリは各地を旅する様になった。そうして兄が、自分を宮廷の闇の中から解き放ってくれたお陰で、自分は立ち直ることが出来たのだと、今では思っている。それでも、未だ囚われたままの津澄の存在は、太い楔となってスズリの心を貫いたまま、その痛みが消えることはなかった。そして、自分ばかりが救われたことに対する罪悪感はやがて、自分が燥怜に救われたように、今度は自分が津澄を救うのだという、強い決意に変わって行ったのだ。

「どうして・・・私はっ・・・あの方を光射す場所へ戻して差し上げるのだと・・・ただそれだけを願って、こんな所まで来たと言うのに・・・なぜ、兄上はそれを・・・分かって下さらないのか」

「涼璃様・・・」

鴻では、スズリのこだわる事件は、もうすでに過去のものとして封印されている。その封印の上に、今の宮廷の体制が形成されて、世界は淀みなく動いている。つまり、その封印を解くということは、世に混乱をもたらす以外の何ものでもない。

燥怜は、それこそがスズリの望みだと言った。剣呑な話だと思う。

商人としての立場から言わせてもらえば、鴿帆もスズリの側に立つことは出来ない。それに・・・

――涼璃様はご存じないのだ。津澄様が、宮廷で現在どのような場所に立っただけなのかわかるのか。

その部分に関しては、燥怜から固く口止めされているから、申し訳ないが、それをスズリに打ち明けることはしない。商人である鴿帆にとって、彼の店の一番の上客である燥怜の言葉は、絶対なのだ。

「・・・戻れるものか。夢物語などではない。この私は、龍の鱗を手に入れる術に辿り着いたのだ。それを目前にしながら、戻れる筈などない・・・」

思い詰めたように呟くスズリを、鴿帆はただ見据えるばかりだ。

「そうだ鴿帆、お前は私に会う事が出来なかった。そういうことにするのだ」

いかにも良案を思い付いたというような顔で、何を言い出すのかと思えば・・・。鴿帆は軽くため息を落とす。

「・・・無茶言わないで下さいよ」

「鴿帆、お前は、この世界が変わる様を、見てみたくはないか？大王の玉座に居座る忌まわしき悪霊が討ち払われる瞬間を、見てみたくはないのか・・・」

――結局、このお方も憑かれてしまっているのか・・・己の業という奴に。

一度、地の底に叩き落とされた経験を持つ者は、得てして、その代償を求めるように、自らの手の届かないものにまで手を伸ばそうとする。

――世の中に、どうしようもないことなど、一体どれだけあると思っている。道理の通った正しきことのみで形成される世界など、幻想でしかないのだろうに。

最後の最後まで、そのことに気づけなければ、待っているのは破滅だけだ。

「・・・私は、一介の商人ですよ。そんなものに興味はありません。今回は燥怜様のご伝言を、涼璃様にお伝えすること。そこまでで、私の仕事は終わりです。無理やりにも連れ戻せとは言われていないですしね。確かにお伝えはしましたからね。後で聞いていなかったとか、言わんで下さいよ。私の商人としての信用に関わりますから。聞いた上でお戻りになられない、というのはあなた様の勝手。つまり、こっから先は、涼璃様の責任ですからね。この先、あなた様が、何を手に入れようが、何を失おうがご自由ですが、俺に責任転嫁などなさらないで下さいね。そこん所、くれぐれもお願い申し上げますよ。それでは・・・」

鴿帆はさっさと話を切り上げると、そのまま藪の向こうに姿を消した。

「・・・相変わらず、よく口が回るな、あいつは」

全く有り難くない情報をもたらした商人を、スズリはただ恨めしそうに見送ることしか出来なかった。今更、戻れはしないのだ。スズリの心はもう決まっている。

ただ、このまま戻らなければ、スズリは燥怜という味方を、確実に失うことになるだろう。ただそれだけが、心にわだかまりを残した。

――また、一人か。

それでも、自分を行かねばならないのだ。母の失った名誉を取り戻すには、津澄を救い出すしか方法がないのだから。

カサリ、と、また下草が鳴り、スズリは我に返る。音のした方へ目をやると、ちょうど長い尻尾が巻き上がって、猫が逃走体勢に入った所であるのが見て取れた。

「逃がすまじ」

スズリはそう言い放つと、八つ当たりのように、猫の尻尾を勢いよくがしっと掴んだ。

(いってえ・・・お前少しは加減ってもんを・・・)

「盗み聞きとは、いい度胸じゃないか」

(たまたまだよ。たまたまたまたま・・・)

「うるさい、黙れ。美玻はどうした？一緒じゃなかったのか・・・」

(洸由に邪魔だって、追い払われたんだよ)

「洸由？」

(お前もひどいが、あやつも大概だ。尻尾を持って投げ捨てるとか、非道の極みだ)

「投げ捨て・・・って、虫の居所でも悪かった訳か」

(というか・・・コトを前に、単に気持ちが昂ぶっていたんだろうが、それにしても・・・)

「コト？」

(ああ・・・美玻を、自分のものにするのだそうだ)

「な・・・？何でいきなり、そんな剣呑な話になっているっ？」

(知るかよ。男のサガってやつなんじゃないの？こーんな過酷な旅を続けてりゃあ、気持ちも荒んで来るだろうし、身近な所に捌け口を求めても、何ら不思議はないだろう)

「馬鹿を言うな。そんなことをして、美玻が又、心を閉ざしてしまったら、どうする積りだ」

(体を手に入れてしまえば、その心も間違いなく自分のものになる。そんな幻想を信じているのかも知れぬな、あ奴は)

「洸由の考えなど、どうでもいい。さっさと奴のいる場所へ案内しろっ」

(・・・お前。あの娘のことなど、只の道具ぐらいにしか思っていないのではなかったのか)

「だから、その道具に不具合が生じたら困るんだと、そう言ってるんだよ、私は。ぐだぐだ言っていないで、とっとと案内しろっ」

(ならお前はっ、その手を離すのが先だろうが)

文句を垂れると、尻尾の拘束が解けた。柘榴はそのまま振り向きもせず、林の方へ走り出した。

——そんな理由で、洸由を止めに行くというには、伝わって来る動揺が大きすぎるんだがな。

そんな言葉が、スズリに伝わることは、もうなかった。

美玻は薪を集めながら、時折、梢を見上げては、自然の織り成す紅葉の美しさに見入っていた。朝に風花が舞ったせいだろうか、陽の当たらない場所に入ると、肌を滑る風が冷たく感じられた。

——冬が来る。

当たり前の様に巡る季節のことを、旅の間は考えたこともなかった。この数カ月、慣れない生活に、ただ夢中で。この旅に終わる刻が来ることを、考えたこともなかった。冬に探索は出来な

いから、龍が見付からなくても、旅は終わるのだと、初めて聞かされた。龍が見付からなければ、来年もまた、この辛い旅に出なければならないのだろう。だが、その前に休息の時間が与えられる。そう聞いて、張り詰めていた気持ちが、随分と楽になった。

――いつかは・・終わりがあるのだ。

今は辛いけれど、いつかは終わる。そう気付けたことが、何だか嬉しかった。

パキッと、背後で枝を踏む音を聞いて、美玻は振り返った。

「洸由・・？」

その姿を確認するかしないかという間合いで、その腕はもう、美玻の体を抱き締めていた。

「・・洸・・由・・？」

スズリとは異なる温もりに、戸惑いが生まれる。

「どう・・したの？」

そう問うと、頭の上から少し掠れたような声がした。

「・・俺のものになれ」

「えっ？」

「あんな浮草のような絵師ではなく、比奈の王子である俺のものに、なれ」

「何言って・・」

言いかけた口が、いきなり塞がれた。唇に、これまでに感じたことのない感触を覚える。

――な・・に・・

そう思う間にも、生温かく柔らかいものが、唇の間から差し込まれて来る。

――や・・

抗うように背けた顔は、洸由の手によって捕らえられて、再び美玻の唇は塞がれた。口づけをされているのだと、ようやく思い至る。

――どうして洸由がこんなこと・・

困惑と恐怖に、美玻は身を振って逃れようとするが叶わない。洸由の腕に腰の辺りを捉えられたまま、体が仰け反る様に倒されて、足が地面から浮いたと思った時には、湿った落ち葉が積った土の上に横たえられていた。

――いっ・・

抱き締められた時に取り落とした枝が、背中をこすり、美玻は顔を顰める。頭上に茜色の空が広がっていた。そして、目の前に、怖い程に真摯な目をした洸由の顔があった。

「・・・怖いかな」

「・・・」

「そう、怯えたような顔をするな。乱暴にはしない」

そんな言葉と共に、今度はさっきよりも、深く丁寧に口づけられる。同時に、泷由は美玻の内腿に指を這わせ、そこを撫で上げていく。経験のない感覚に、美玻は思わず身を震わせた。膝を閉じようにも、すでに泷由の体が美玻の両足の間に割って入っており、それは叶わない。

「・・・やだ・・・やめて・・・」

ようやく口づけから解放されて、喘ぐように言ったものの、そんな願いが聞き届けられる筈もない。そうこうするうちに、その冷たい手が下半身を弄り始め、ゆっくりと秘所に近づいて行く。ゾクリ、と言いやうもなく嫌な感覚に捉えられた。瞬間、恐慌に陥る。

「やだっ・・・や・・・はなしてっ・・・泷由っ、はなしてよっ・・・ばかっ・・・やめて・・・いやあ・・・」

自分の上に押し掛かる泷由の体を、夢中で押しのけようとするが、いくら暴れても、秘所に近づいて行く指は止まらない。これから何が始めるのか。そう思うだけで、止めようもなく恐怖がせり上がって来る。

「・・・い・・・や・・・」

目から涙が零れ落ちる。叫べば、誰か・・・スズリか沖斗が助けに来てくれるかも知れない。そう思うものの、恐怖に慄いた体は、もう普通に声を発することすら出来なくなっていた。自身の無力と絶望を感じた。空の赤が滲んで揺れた。

——誰か助けて・・・神様・・・

堅く閉じた瞳の闇の中で、美玻はただ祈っていた。泷由の体が更に重みを増して、美玻の上に押し掛かるのを感じる。

——苦しい・・・息が出来ない・・・神様どうか・・・どうか・・・

ふっと、体を押さえつけていた重みが、消え失せた。

「・・・え」

何だか分からないが、終わったのか、と思う。美玻が恐る恐る目を開けると、傍らに気を失った泷由の体が横たわっていた。

「え・・・」

その泷由の横には、鞘の付いたままの刀を手にした沖斗がしゃがみ込んでいた。

「・・・申し訳ありません。泷由・・・様」

「沖斗・・・？」

——が、助けてくれたの？

状況から察するに、泷由は沖斗に刀で殴り倒された様だ。それも、一撃で気絶するほどの勢いで・・・つまりそれは、泷由には絶対の忠誠を捧げていた筈の沖斗が泷由を・・・ということになるのか。美玻が、訝しみながら身を起こすと、沖斗と目が合った。

「あの・・・」

言いかけたところで、そのまま沖斗に抱き竦められた。

「・・・無事か？」

「・・・うん・・・ありが・・・」

——あれ・・・前にも・・・こんなコト・・・

耳元で安堵するようなため息が聞こえた。

「・・・無事で・・・よかった」

——ああ、あの夜の・・・

『無事かっ？美玻・・・無事で・・・よかつ・・・』

——あれ・・・沖斗だったんだ。

沖斗は自分を守ってくれる存在なのだ。不意にそう納得すると、安堵と共に美玻の意識は遠退いて行った。

「美玻・・・？」

まずしりと重くなったと思ったら、美玻は沖斗の腕の中で気を失っていた。

「あーあ、これはこれは・・・」

後ろから聞こえた声に振り向けば、足元に柘榴を連れたスズリがそこに立っていた。

「やってしまいましたねえ・・・これは。どうします？私が殴ったことに、しておきましょうか？」

「・・・どういう」

「だって、仮にも主君なのだろう？いくら無礼講とはいえ、拙いんじゃないの？無礼講とはいえ、美玻を押し倒した洸由が、全面的に悪いにしろ」

「・・・自分のしでかしたことの責任ぐらい、自分で取る。元より覚悟は出来ている」

「・・・前々から思ってたけど、お前、美玻が好きなんだろう」

「そっ・・・んな訳あるか。俺はっ・・・」

動揺に無様に揺らいだ言葉が、隠された感情をそこに引き摺り出す。美玻を大事そうに抱いたまま、沖斗は気まずい顔になって俯いた。

「・・・とりあえず、運ぶか」

スズリはそれ以上の詮索をせずに、気を失っている洸由を軽々とその背に負った。それを見て、沖斗が眉間に皺を寄せた。

「・・・お前」

筆より重い物は持てない——のではなかったのか、この絵師様は。

「人は誰でも、他人には言えない事情を諸々抱え込んでいる、と。まあ、そういう事だね。お前さんも、然り。この私も、また然りだ。だから、事情は聞かないよ。まあ、興味もないしな。でも、洸由には内緒にしてくれるとありがたい。下手にばれると、荷物を持たされそうで面倒だからな」

スズリが口角を軽く上げて笑う。スズリの秘密を明かさなければ、自分も沖斗の秘密は明かさ

ない。そういうことらしい。わざわざ、そんな条件を持ち出したその真意は分からない。

——こいつ、何者だ。

洸由を背負い、スズリはその場を離れていく。柘榴はまだそこにおいて、どこか物言いたげな様子で沖斗をじっと見ていた。

「・・・ただ側にいて、守っていらればそれでいいと、そう思っていたのにな」

猫なぞに愚痴をこぼしてどうするのだ。そう自嘲しながらも、はち切れんばかりに膨らんでしまった思いは、次々と言葉になってその口から零れおちる。

「・・・我慢できなかった。美玻が誰かのモノになる・・・なんて・・・俺には耐えられなかった・・・こんな 身勝手な思いを向けられたって、美玻には迷惑なだけだと分かっているのに・・・ホント仕様がないな、俺は・・・仕様がないな・・・」

今にも泣き出しそうな顔をして、沖斗は美玻を抱き上げると、項垂れたままスズリを追っていった。

火を熾し、肉を焼き始めた頃に、洸由と美玻は立て続けに目を覚ました。それぞれが、互いに触れて欲しくないものを抱え込んだ結果、とでも言おうか、夕餉の間は核心を避けた当たり障りのない会話が、ポツリポツリと空しく続くばかりとなった。

自身の後ろめたさからなのか、洸由は自分を殴ったのが誰なのかを、あえて問い質すことはしなかった。沖斗は、生真面目すぎるその性格ゆえに、いずれは洸由に自身の行いを告白し、謝罪を申し入れるのだろうが、それによって、彼は洸由の元を去らなければならないのかも知れず、その心の整理が付かずに、すぐには真実を言い出せずにいる様だった。

美玻は柘榴を抱え込んだまま、じっと身を丸めて座っていた。声を掛ければ反応はするものの、魂が抜け落ちてしまった様に、始終ぼんやりとしていた。

――風花が下りなくとも、この旅はもう、終わりなのかも知れない。

スズリは焚に薪を差し込みながら、場を支配するぎくしゃくとした空気に、そんなことを思った。

陽が落ちると、急に寒さが増して、いくら薪をくべても暖かくなならない。今夜も冷え込みそうだと思った所に、風花が又ふわりと下りてきた。

――いや、これは・・・

「・・・雪だ」

スズリの声に、残りの三人が天を仰いだ。

墨を流し込んだような、のっぺりとした闇の中から、綿毛のような白い雪が次々に舞い落ちる。そこにいた誰もが、夜のしじまに舞う雪に、この旅の完全なる終わりを思った。

しかし、運命の刻は、その流れを止めることは無かった。

そこに間合いを計ったように、その咆哮は響いた。

「なに？」

美玻が怯えたように、柘榴を抱いたまま腰を浮かせた。

「・・・まさか、龍の声か」

洸由が立ち上がる。

勿論、そんなものを耳にしたことのある者はいないのだが、ここで、それ以外の可能性を考える者は誰もいなかった。しんと冴え渡るような静寂の中で、一同は息を殺し、耳を澄ました。

――もう一度・・・どうか、もう一度。

誰もがそう願った時、再び怖ろしいばかりの咆哮が響いた。今度はそれに更に数度、小さな咆哮が続いた。

「どっちだ？どちらからっ・・・」

音は谷間に反響し、残響が幾重にも混ざり合い、どちらの方向からも聞こえてくる。それぞれ、必死に四方を見渡すものの、音の出所は特定出来ない。しかし・・・

「あ・・・」

やがて、美玻が闇空の一点を見据えて立ち竦んだ。残りの者は、引き寄せられるように一斉にそちらに視線を向け、そろって息を飲んだ。

光が、眩い金色の光の柱が、天に向けて伸びていく。幾筋もの光の帯が、力強く真っすぐに長

く長く伸びていく・・・。その神々しいばかりの輝きを、彼らはしばし声もなく見上げていた。

「子龍の天還りだ・・・」

やがてスズリが発した言葉によって、彼らは現実に戻された。

龍が夏至に天より下るのは、その繁殖のためであり、冬の訪れを前に、生まれた龍の子は、あ  
あして天に還って行く。そして子を産んだ親龍は、それを見届けるとその生を終え、その軀はや  
がて石となり、大地に戻るのだと。スズリは鴻にいた頃、そう記された文献を読んだことがあ  
った。そして、霊薬と呼ばれる鱗は、龍が生きている内に剥ぎ取られたものでなくてはなら  
ない・・・

スズリが天還りについて、おおまかに説明すると、洸由は光の残像の残る空を睨んで、意を決  
したように言った。

「この山向こうだな。行くぞ」

薪を幾つか束ねて即席に作った松明を手に、躊躇うことなく闇を切り開いて進んで行く洸由に  
沖斗が続き、それをスズリと美玻が追った。彼らは闇に閉ざされた暗い山道を、夜通し歩いた。

途中、野生動物の双眸が妖しく光る様に出くわす度に、美玻は小さな悲鳴を上げたが、それ  
でも彼らの足が止まることは無かった。今や彼らは、龍という存在に完全に憑かれてしまっ  
ていた。その姿を一目なりとも見ないうちは、帰る訳にはいかない。ただ、そんな思いに突き動かさ  
れるように、ちらちらと雪の舞う中、夜の闇を歩き続けた。

いつしか空は白み、気が付けば辺りは朝霧に覆われていた。そこで、行く先を見失った洸由が  
足を止めた。雪はすでに止んでいた。山の稜線には出たのだろうが、一面白い霧の他には何も見  
えない。美玻も目を凝らすが、ぼんやりと切り立った崖が入り組む地形が見えるばかりである。  
下手に動いて足を踏み外せば、ひとたまりもないような場所だ。

「陽が昇れば、恐らく霧も晴れて来ましょうが・・・」

スズリが致し方ないというような口調で言うのを、洸由は苦虫を噛み潰したような顔で聞いて  
いる。子龍はすでに天に昇ってしまったのだ。親龍の余命が、一体あとどのくらいあるのか。一  
刻を争うというのに、自分たちはここで時を失わなければならないのかと忌々しく思う。そんな  
洸由の様子を察したように、スズリが言った。

「・・・仕方ありませんね。少し、辺りを見て参りますよ」

「スズリ？」

美玻が心配そうにその名を呼ぶ。

「大丈夫、こういうのには慣れていきますから・・・沖斗、ここは頼みますよ」

——美玻を頼む。

沖斗はそういう意味に取って、小さく頷いた。そしてスズリの姿は、あっという間に霧の中に  
消えて行った。

どれ程の時間が経ったのだろうか、スズリは一向に戻って来ない。もしかして、足を踏み外し

でもしたのではないだろうか。そんなことを考え始めてしまうと、不安は消しようもなく広がって行く。美玻は、ついには立ち上がって、少し薄くなり始めた霧の先に、スズリの姿を探し始めた。するとすぐに、だいぶ先の崖の上ではあるが、スズリが佇む姿を見つけた。

—あんな所に・・

その姿に、張り詰めていた気持ちが緩んだのだろう。美玻は何も考えずに数歩、そちらの方へ歩き出す。そこでふと、沖斗に一言言ってから行くべきかと思い、後ろを振り返った。

「・・沖斗？」

そう離れていない筈なのに、そこには霧が巻いているばかりで、沖斗の姿も洸由の姿もすでに見えなかった。再度名を呼んでみても、応えもない。

「・・どうして」

不可思議な出来ごとに、言いようもない不安が込み上げた。すると、

「この霧は、龍雲と言って、龍がその身を隠す為に纏う特別な霧なのですよ」

すぐ傍で、スズリの声がした。

「・・スズリ」

気が付けば、離れた場所にいた筈のスズリが傍らに立っていた。

「この霧の中では距離や時間といった尺が、どうも、通常の場合とは異なるようですね」

「そう・・なんだ」

「大丈夫、怖がることはありませんよ」

言いながら、美玻の視界を遮るように、スズリは彼女をその腕の中に抱き寄せた。

見え過ぎるということは、より多くの事象を自分の中に取り込むことであり、多すぎる情報を与えられる目は、神経を容易に疲弊させる。その疲弊こそが、美玻の心に不安を呼び起こすのだ。それを知っているのか、スズリはいつでも、その不安を遮断するように美玻の視界を塞いでくれる。だから、スズリの腕の中は、美玻にとっては特別で、落ちつける心地の良い場所だった。

その心地よさに身を預けながら、美玻は何となくスズリの胸に耳を寄せた。すると聞こえたスズリの鼓動は、思いがけず、その落ち着いた言動とは裏腹に、早鐘のように激しく鳴り続けていた。そこに、いつもと違う違和感を覚える。

—どうしたんだろう・・スズリ。

そんな心の声に応じるように、スズリが身動きをして、美玻の体を少し強く抱き直した。

「・・スズリ？」

「・・前に、牢の中で言ったことを覚えていますか？あなたが今生きているのは、必要があって生かされているのだと。私はそう言いました」

「・・うん」

「神様が生贄の命を取らなかったのは、神様の意志なのだ」と

「・・」

頭の上で、気持ちを落ち着かせるかのように、スズリが大きく息を吐き出したのを感じた。

「・・その言葉には続きがあります。それは、あなたが生贄ではなくなったのではなく、生贄として命を捧げるべき時が、まだ来ていなかっただけなのだ・・」

「・・どういう・・」

「神様は、今こそ、あなたが生贄として捧げられることを望んでいるのです」

「・・・あたし・・・の・・・命・・・？・・・」

何を言われているのか、まだ飲み込めない美玻に、スズリの説明は更に続く。

「普通に剥ぎ取られた龍の鱗は、万病に効く薬となります。が、鴻の皇帝の求める希物に値する鱗は、龍に生贄を与えて初めて手に入れられる、本当に特別なモノ。瀕死の龍が、生贄の魂を糧に命の再生を果たす。その瞬間に光り輝く鱗。それこそが、不老不死の霊薬になると言われる、特別な鱗なのです。そしてそれは、長い長い探索の果てに、その龍を見つけ出した遠見を生贄として捧げることでしか、手に入れることが出来ない・・・つまり、遠見の命と引き換えにしか手に入れることが出来ない鱗なのです」

遠見の命と引き換え——それはつまり、唯一の遠見である美玻の命と引き換えということなのだ、スズリは言っているのだ。美玻はようやくそう理解した。

「それが、希物と呼ばれる鱗・・・」

そう呟いた美玻の体を抱く腕に、ぐっと力が籠ったのを感じた。

「・・・私は、どうしてもその鱗が欲しい・・・」

「・・・え？」

スズリは今、何と言ったのか。

「・・・私には、どうしてもその鱗が必要なのです」

その切実な声に、スズリの強い意志を感じた。希物である鱗を、スズリが何故欲しがるのであろう。あまり物事に執着しない感じのスズリと、不老不死をもたらすという希物とが、うまく結びつかなかった。

「だから・・・だから、美玻・・・」

あくまで平静を装おうとしているスズリの声は、しかし本人の意志とは裏腹に僅かに震えていた。

「美玻・・・私にお前の・・・その命をくれないだろうか・・・」

スズリの心臓は壊れそうなほどに、激しく鼓動を打ち付けていた。それは、自分の願いが簡単には聞き入れられない、非道な願いであるという自覚ゆえなのだろう。

「・・・大切な・・・人を・・・救う為に。どうしても。どうしても、私にはそれが必要なのです・・・」

罪の意識に苛まれながらも、その願いをスズリが口にせずにはいられなかったのは、それが、彼にとって、本当に切実なものだったから——

——この命を・・・

この命は、とうに捧げられなければならなかった命だ。自分が生き永らえたことと引き換えるようにして失われた、数多の命を思うと、それはいつも重たく美玻に押し掛かって来る。償われなかった罪は、他人より咎なしと言われたところで、美玻の中で決して消えることはなかったの

だ。

——今ひとたび・・

自分は、罪を償う機会を与えられた。そんな気がした。

髪に、水滴が落ちた気配がした。

「・・泣いて・・るの・・？」

「・・・そんな筈・・ありません・・私もう、泣き方など忘れた人間なのですから・・」

しかし、頭上で聞こえた否定の声は、随分と湿り気を帯びた音だった。

「・・いいよ」

「美玻・・」

「・・あたしは・・スズリに救ってもらったから・・こんなあたしが、あなたの役に立ことがあるのなら・・・・・いいよ・・」

「・・」

「あたしは・・本当に駄目な人間で・・他の人に迷惑を掛けて、足手まといになるばかりで、生きていたって誰の役にも立てないって思った。遠見の能力だって、ただ見えるというだけなのに、それが国の行く末を左右する程の重要な力だとか言われて・・それが本当に重くて苦しくて辛かった。いつもいつも、ここから逃げ出せたらいいのになら、そんなことばかり考えてた。それでも・・スズリと一緒にいてくれたからあたしは、きつとここまで来られたんだと思う。だから・・スズリの為になら・・もう全てを終わらせても、構わないって・・思う」

そこまで言った所で身を離されて、スズリの手が両肩に乗せられた。

「・・済まない・・」

そう告げた声は、消え入りそうに静かで、美玻の顔を映した瞳は、艶やかに潤んでいた。この人はやはり、泣いていたのだと、そう思った。でも、それには気付かない振りをして、多分、そうするのが一番いいのだろうと思いながら、美玻はスズリに対して笑ってみせた。

「・・ううん。ねえ、スズリ・・」

「・・」

「今まで、ありがとう・・」

その温もりを記憶に留めるように、美玻はもう一度、スズリの胸に顔を埋めた。躊躇う様にそっと背に回された腕は、やはり微かに震えていた。

白いばかりの世界に、音は無かった。本来ならば、普通に耳に届くはずの風の音や、森に潜む獣の気配、それに空を行く鳥の声すらも聞こえない。

――静かすぎる。

辺りの気配を探るように集中した意識に、何も引っ掛かってこないことに、洸由はいぶかしげに首を傾げた。沖斗はこの違和感に気づいていないのか。それを確かめようと、顔を上げたところで初めて、洸由は美玻の姿がないことに気づいた。

「沖斗・・・美玻はどうした？」

そう問われて、沖斗が怪訝そうな顔をする。

「美玻ならば、ここに・・・」

言い掛けて、その声が途切れ、その表情が焦りを帯びる。美玻の傍らにいた沖斗でさえも、彼女がいなくなっていたことに気づいていなかったようだ。

「美玻？美玻っ！」

沖斗が我を失わんばかりに慌てた様子で、美玻の名を、繰り返し呼ばわりながら、辺りを探す。そんな姿を目の当たりにして、洸由の中に、一つの確信が生まれた。

「沖斗、俺を殴ったのは、お前だな？」

真正面からそう問うと、沖斗が足を止めた。

「・・・はい。申し訳ございませんでした・・・」

問い詰められれば隠しだてをする積りもなかったのだろう、沖斗は神妙な顔で頭を下げた。

「要するに何だ。やはりお前は、あの娘に惚れているという訳か・・・ならば何故、自分のものにせぬ。私は、お前に一度その機会を与えてやった筈だろう」

「・・・私には・・・それは分を越える振る舞い・・・」

「この私が許すと言ってもか」

「神が・・・お許しにはなりません」

「神・・・だと？どういう意味だ、それは」

「洸由。どうかこの話は、後ほどに。今はまず、美玻を探さなければ・・・」

沖斗が有無を言わせぬ真剣な顔で言い、辺りを見渡すように頭を巡らせる。

「・・・柘榴」

やがて沖斗は、霧の中の一点に、確信を持ったように視線を止めた。

「洸由、あちらに、柘榴の姿があります・・・」

「柘榴だと？」

示された方を見るが、洸由には白いばかりの世界しか見えない。

「・・・ああ、柘榴の向かう先に、美玻の姿が・・・ご覧になられますか？」

少し安堵した声でそう問うてきた沖斗に、洸由は示された方に目を凝らす、やはり何も見えない。

「こちらです」

沖斗の姿が、白い霧の中に吸い込まれるように消えて行く。洸由は慌ててその背中を追った。

果たして、しばらく霧の中を行くと、岩場の間を、見覚えのある細長い紐状のものが這って行

くのが見えた。柘榴の尾だ。沖斗はそれを追って、更に霧の中を進んで行く。

——これが見えたのか・・・この霧の中で、向こうの尾根から？

「沖斗」

「はい？」

沖斗が足を止めて振り返る。

「お前は、遠見なのか」

洸由のその問いに対して、沖斗は少し困ったような、せつないような表情をして笑った。

——この表情は、肯定か。

「・・・お前が遠見なのだとすれば・・・それならば、色々と辻褄が合う。近在の郷と言っても、遠見は特殊な郷だ。外部の人間が容易く出入りできるような場所ではないだろう。それなのに、お前は遠見のことを良く知っていた。美玻は郷長の娘だったという。つまり、お前が美玻を大切に思うその気持ちは、お前が遠見だった故ではないのか」

「美玻様は、当代随一の遠見となられる筈のお方だったのです。それを、生贄にするなど・・・そんなことが許せると思えますか」

沖斗の目に、これまで見せたことのないような、強い光が宿っていた。そこに洸由は、沖斗の、美玻に対する強い崇拜の念を感じ取った。それは、僅かに狂気さえ感じるほどの真剣で真っ直ぐな、想い。

「まさか・・・お前は・・・」

それ以上は、言葉に出来なかった。

今、自分の目の前に居るこの男は、一人の娘への崇拜のために、何の躊躇もなく、郷を一つ滅ぼしたというのか。ただ、美玻を救いたいという、その思いゆえに、その手を罪に染めたのだと。そして、忠誠を誓ったこの自分さえも欺いていたのか。その真実に辿り着いた洸由は、ただ呆然とその場に立ち尽くすばかりだった。

「美玻っ！」

白いだけの世界に、沖斗の叫び声が響いた。

その声に我に返った時にはもう、そこに沖斗の姿は無かった。洸由は沖斗の姿を見失っていた。

「沖斗っ！どこだ、沖斗」

叫んでも、返事はない。洸由はただ一人、深い霧の中に取り残されていた。

まだ晴れ切らぬ朝霧の中、美玻は一人、崖伝いに身の幅ほどしかない坂を下っていた。やがてその坂が崖に断ち切られるようにして途切れると、そこに大きな洞穴が姿を見せた。中に、何か蠢くモノの気配があった。

スズリの話では、ここが探し求めた龍の巣だという。美玻が気配を探る様子を伺うと、いきなり耳を覆うばかりの咆哮に晒された。驚いて尻もちを着く。湧き上がる恐怖をどうにか飲み込んで、立ち上がろうと後ろ手を付いた途端、地面が崩れて手は空を泳いだ。

「・・・うわあ・・・あ」

慌てて体勢を立て直し、事なきを得る。そして改めて肩ごしに背後を見遣ると、僅かに動かした体に押し出された小石が、カーンという高い音を立てながら下へ落ちて行った。そして音も届かない程の遥か下方で、小石は滔々と流れる激流に飲み込まれたのが見えた。ここは断崖の上なのだとは認識する。

——ここ落ちたら、ひとたまりもないだろうなあ・・・

そんなことを考えてから、自分には関係のないことだと気づき、ふと笑みが漏れた。自分は、そういう死に方をする訳にはいかないのだ。スズリの為に——

死ぬのが怖くないと言えば、嘘だ。それでも、スズリは美玻に嘘は言わなかった。きちんと、美玻が死ななければならぬ理由を話してくれた。そして何より、本当の感情を表に出すことの無かったスズリが、自分のために泣いてくれた。

たったそれだけの理由でと、人は晒うのかも知れない。それでも、あの時に死に損ねた負い目が、自分を救ってくれた人の役に立つことで、払拭されるのだと知った時、その心に浮かんだのは、安堵の気持ちだったのだ。自分は重たい運命から、ようやく解放されるのだと、そう思った。

意を決して、美玻はその断崖の際に立った。

洞穴からは、獣が唸るような声が絶え間なく聞こえている。見据えた闇が、やがてゆらりゆらりと動き始めた。大きな躯体を持つ生き物が、そこから這い出して来る。込み上げる恐怖に、止めようもなく体が震え続ける。それでも、美玻は龍を見詰めたまま、そこから逃げなかった。

かつて、彼方天空に見た龍が、そこにいた。

目の前に佇む少女が何であるのかを分かっているかのように、龍はゆっくりと体をよじりながら近づいて来る。やがてその鼻先が、美玻のすぐ傍まで迫った。気が付けば、辺りの霧はきれいに消え失せており、巨大な龍の体躯に陽が差しかかった。

刹那、鱗が陽を弾いて、美しく碧色に輝いた。その美しさに、美玻は魅了された。

——こんな美しいモノに喰われるなら、いいよね・・・

自分に最後の確認をする様に、そんなことを思い、その美しい碧色を封じ込めるように美玻は瞳を閉じた。

——これでもう、何もかもを終わりに出来る。

そう、思った。

「美玻あーっ！」

絶叫とも言える声が辺りに響き渡った。

その声は、美玻の意識を乱暴に現実引き摺り戻した。何事かと確認する間もなく、美玻の体は衝撃に弾き飛ばされ、宙に投げ出された。驚いて見開いた瞳の中で、雲ひとつない蒼い空が回った。そして、手首に強い痛みが走る。

「・・・いっ・・・」

状況が飲み込めないまま、その痛みの元になっている手を見上げる。

崖の上で、誰かの手が、美玻の手を掴んでいた。背を駈るように吹き上げた風に、美玻はようやく自分が絶壁に宙釣りになっているのだと気付く。目の前を掠めて落ちて行った小石が、遙か下方の水面に吸い込まれるようにして消えたのを見て、反射的に背筋を悪寒が走った。

「・・・無事・・・かっ・・・」

頭上で沖斗の声がした。

美玻は驚いて顔を上げる。崖の上に沖斗の顔があった。

「沖斗っ？・・・どうして・・・」

「・・・いいか、美玻。俺は・・・こんなところで龍に喰わせる為に、お前を助けた訳じゃない・・・お前に生きていて欲しかったから・・・」

そこで沖斗が喘ぐように息を切らし、苦しそうに顔を歪めた。その口の端から、血が零れ出して筋を描いた。

「どうしたの・・・沖斗っ！」

只ならぬ気配に、美玻の心を動揺が走る。沖斗が今いるのは、さっきまで自分がいた場所だ。それが何を意味するのか――

「・・・何でお前は、こんなにあっさり死のうとするんだよ・・・せっかく救われた命を、大事にしない・・・何で、きちんと生きようとしらない・・・」

「・・・沖斗・・・」

「・・・生きろよ、美玻・・・頼むから・・・生きてくれよ・・・」

その言葉の間にも、沖斗の体から流れ出た血が、掴まれた手首を伝い落ちて来る。その生温かい赤い筋が、幾本も糸のように伸び、美玻の手に絡みつく。

「・・・沖斗っ・・・何で・・・何で沖斗が・・・こんな・・・」

答えは無かった。代わりに、ぽたぽたと赤い雫が、美玻の顔に、体に降り注いだ。

「やだ・・・沖斗・・・」

「・・・生きろ、美玻っ」

短く繰り返される呼吸の合間に、沖斗の声がそう告げた瞬間、美玻の手首を掴んでいた手が、痙攣するようにびくりと震えた。

「沖っ・・・」

――お前は俺の・・・かけがいのない・・・美しい光・・・だから・・・

最後に――そう聞こえた気がした。

涙で滲んだ視界の中で、沖斗の顔はどこか穏やかに笑っていた。

「沖斗おっ！」

美玻の悲痛な声を飲み込むように、辺りに強烈な閃光が走った。世界はその白い閃光に飲み込まれ、その中に沖斗の姿も消えた。

——どう・・・して。

考える間も与えられず、美玻の体は絶壁を落下し、そのまま激流に飲み込まれた。上も下もなく、容赦なく体を転がされ、ろくに息を吸うことも出来ない。

——また、自分のせいで、命が失われた。

美玻の心に、どうしようもない悲痛な実感があった。鉛のように重い事実が、胸に容赦なく振り込まれ、美玻から気力を奪っていく。自分が目を閉じているのか開いているのかさえも、分からない。閃光に奪われた視力は、ただ世界を白く霞んだものにしか見せてはくれなかった。

——沖斗が死んだのに・・・自分だけが生き残るなんてない。

・・・何でお前は、こんなにあっさり死のうとするんだよ・・・何で、きちんと生きようとしな  
い・・・

——どうして、生きなければいけないの、こんな辛い・・・思いまでして・・・

・・・生きろよ、美玻・・・頼むから・・・生きてくれよ・・・

——何で・・・こんなひどいよ・・・沖斗。

・・・生きろ、美玻っ・・・

——嫌・・・もう嫌なんだものっ・・・

やっと、重たい運命から解放されると思ったのに。

自分は、まだ逝くことを赦されないのか——

大きな失望が生への執着を消していく。

『美玻、無事で良かった』

不意に、その声をはっきりと聞こえた。

——沖・・・斗・・・

見えない筈の目が、その姿を見つける。

水の中に居る筈の体に、沖斗にしっかりと抱き寄せられた時の温もりが蘇る。

そして気付く——

その腕に込められた思いに。自分は、ずっと守られていたのだと。沖斗は自分をずっと見守って  
てくれたのだと。自分の命は、そんな風に大切に守られてきたのだと。

そんな風に、沖斗が大切に守ったものを、自分は手放すのか。手放していいのか・・・

このまま死んだら、自分は沖斗の最後の願いを踏みにじることになるのではないか。

——ああ・・・生きなきゃ・・・いけないんだ・・・あたしはまだ・・・死ねない・・・

そこで我に返った。

途端に、激流の中を踊る体と、呼吸もままならない現実が突きつけられる。

「ごほっ・・・」

苦し紛れに息を吸おうとして、思い切り水を飲んだ。喉が押し潰されるような感覚に、すでに気が遠退き始めている。

——このままじゃ・・・

もう、何が何だかわからないままに必死にもがいた。すると、手が何か細長いものに触れた。縫う様にそれを掴む。朦朧とした意識の中、水に差し込んだ光の中に、微かに柘榴の色を見たような気がした。美玻の意識はそこで途切れた。

## 第6章 玻璃の郷

身を切るような冷たい水の中で、美玻はずっともがいていた。息はずっと苦しいままで、もがいても、もがいても、目指す水面は遥か上方にあって、少しも近くはならない。

——早く、水の上に出なければならないのに・・

焦りばかりが募る。

——早くしないと、息が・・

そう思って、はたと気づく。確かに息苦しくはあるのだが、息は出来ている。自分は水の中にいる筈なのに。

——水の中じゃない・・のか。

そう思った途端、水がぐにやりと揺れた様な感じがして、視界が暗転した。すると、いきなり頬に、生温かいモノに撫ぜ上げられたような、ぞっとするような感触を覚えた。

「・・うう・・ん・・」

気分的には、大声で叫んだつもりだったが、口から発せられたのは、微かな呻き声だった。

——今の、何だろう・・

そう思う内にも、頬に又、生温かい感触が来る。

「・・うっ・・」

——何これ・・なんか舐められているみたいなんだけど・・

ペロペロと、そんなかわいいものではない。ベロンベロン——と、自分は実に豪快に、遠慮の欠片もない風情で顔を舐め上げられている。

——・・な・・んなの・・かしら・・

獣の類に、食べられかけている所なのか。呑気にそんなことを思う。不思議と身の危険は感じなかったのだ。それに、体を動かそうにも、どうにも動かなかったから、今更、逃げようもなかった。とりあえず、体の中で唯一動かすことのできた瞼を、僅かに開けてみる。すると、焦点の合わないぼやけた世界に、何か赤いものがゆらゆらと動いているのが分かった。

「・・ざ・・くろ・・？」

ようやく、吐息のような声が出た。声を発することで力を使いきってしまったと言わんばかりに、開いた瞼は、途端にすんと落ちた。側に柘榴がいてくれるのなら、大丈夫だ。

そんな安堵感に、美玻の意識はまどろみの中へ戻って行く。と、

「ああ・・気が付いた？」

そばで若い男の声がした。

——・・柘榴じゃ・・ないの？

その問いは、もう声にならず、再び開けようとした瞼も、もう重くてあがらない。

「・・っと。ああ・・また、寝ちゃったなあ・・いいよ、ゆっくりお休み。君は、死ぬほどの傷を負っているのだからね・・それにしても、こんなに傷を負って・・それでも、君はまた生き残ったんだなあ・・」

——ああ、あたし・・生きてるんだ。

「・・何と言うか・・強いね君は。さすが、僕の・・・・・」

——僕の・・・？

「おやすみ」

耳元でそう囁かれた声を聞いた所で、美玻の意識はまた途切れた。

美玻が再び目を覚ましたのは、粗末な小屋の囲炉裏端だった。体にはムシロが何枚か重ねて掛けられており、額に水で冷やした布が置かれていた。

傍の囲炉裏では、火が赤々と燃えていて、その上に吊り下げられた鍋から、野菜の煮える匂いが立ち上っていた。その横には干した魚が数匹、火に炙られていた。体はまだ重く、うまく動かせなかったが、頭を傾けて辺りの様子を探ることは出来た。怪我の所為なのか、視界はやはりまだぼやけたままで、何もかもぼんやりとしか見る事が出来ない。

——ここ、どこだろう。

激流に飲まれた自分が、手当てをされてこんな場所に寝かされているのだから、誰かに助けられたのだろうと思う。

——『おやすみ』

耳に残るその声を思い出す。それは、若い男のもの・・・だったような気がする。不意に、小屋の扉が開いて、外から冷たい風が流れ込んで来た。

「うー寒い寒い。たく、また雪かよ。早いとこ山を下りないと、野垂れ死んじまう・・・お、娘さん、目え覚めたかね？」

顔ははっきりと見えないのだが、声の調子から、その男が若者という範疇から完全に外れてしまっているのは分かった。それに、声色も記憶の中のものとは違った。

「・・・あの・・・助けて頂いたみたいで、ありがとうございました」

「いやぁ・・・助けたというか、俺はお前さんをここに運んだだけなんだが」

「え？」

「俺があんたを見つけた時は、傷の手当てとかは、もうしてあったから」

「・・・そうなんですか」

やはり、もう一人、誰かいたのだ。

「それでも、雪降ってんのに、あんな吹き晒しの岩の上に置き去りっていうのは、ないよなあ・・・あそこで俺が見つけなきゃ、お前さん今頃、雪女になってた頃だぜ」

「それじゃ、やっぱりあなたが命の恩人です。本当に、ありがとうございました」

美玻が、まだ重たい感じのする体を何とか起こして礼を言う。

「・・・いや・・・そんなに恐縮されるようなことでもないけどな。たまたま、通り掛かっただけだからさ」

「たまたま・・・？こんな山の奥深い場所に・・・ですか？」

「ああ・・俺は、鴻の商人だから。この紗依（サイ）の山には、薬草の材料を集めに来たんだよ」

「紗依・・？ここは、紗依国なのですか？」

「そうだよ。秋と冬の境の頃に採れる木の実やらキノコやらを探しに来たんだが、今年は駄目だなあ・・こんなに早く雪が降るんだもの」

紗依国は、比奈国の隣国であるが、その境は急峻な山地で隔てられている。つまり美玻は、その山地から紗依へと流れ行く川へ落ち、紗依の側へ流されたということだろう。

「あんたの方こそ、こんな山奥で迷子って訳でもないんだろう？」

「あたしは・・・・」

何をどう話していいのか分からず、美玻はそこで口籠った。

龍の探索について、話すことなど出来はしない。比奈の秘密だからと言うだけでなく、あまりに悲しい結末を迎えたあの旅の記憶は、口にするにはまだ辛すぎるものだった。

美玻が薄っすらと涙を浮かべているのに気づいて、男が慌てた風に言葉を継いだ。

「ああ、まあ・・・事情なんざ別にいいよ。それよりも、あんたはこれからどうするね？」

「これから・・・？」

「俺は明日にでもここを引き払って、山を降りようと思っていた所だ。あんたの目が覚めなかったら、仕方ない、一緒に馬車に乗せてくしかないかと、思っていたんだが。行く当てはあるのかい？」

「行く当て・・・」

そう訊かれて改めて考える。自分は、比奈に戻るべきなのだろうか。生まれ育った郷はもうないのだ。それに、龍の探索は・・・。

あの時に見た閃光は、龍が沖斗の魂を喰らってその身を再生させたからなのか。スズリは、輝く鱗を手に入れられたのだろうか。そして、洗由は・・・もし彼が、鱗を手に入れられなかったのだとしたら、来年もまた、探索は行われるのだろうか。自分は遠見として、それに同行すべきなのか。

「どうするね？」

横から再び声を掛けられて、美玻は男の顔を見る。そこである事実に気づく。

——ああ、そっか・・・あたし、もう。

輪郭のぼやけた男の顔を見ながら、はっきりと納得した。

自分はもう——見えないのだ。

見えない遠見など、何の役にも立たない。そう気付いた時、視力を失った不安よりも、どこかほっとしている自分がいた。

「一緒に、連れて行って下さいますか・・・あたし・・・こんな体で、大きな荷物と変わらないでしょうけど・・・もし、ご迷惑でなかったら・・・」

「構わんよ。商人は荷物を運んでナンボってな。なあに、元気になれば、それなりに働くことだって出来るだろうし、運び賃は後払いで、ぜんぜん構わないからよ」

——運び賃。後払い。

男のセリフに、美玻は思わず失笑する。つまり、タダではないのだ。それでも、

「・・・助かります」

美玻は深々と頭を下げた。

——それでも今は有り難い。

心からそう思った。今の自分には何も出来ない。他に行く当てもなく、この先、どうすればいいのかも分からない。それでも自分は、ここでこの男と出会ったことで、とりあえずの行く先を決めることが出来たのだ。

「・・・汁ぐらいなら、飲めそうかい？滋養の付く薬草も入ってるんだが」

「・・・はい、ありがとうございます」

差し出された椀に口を付け、ゆっくりと汁を啜る。じんわりと心地の良い温もりが、体中に広

がって行く。ついこの瞬間まで、体を支配していた冷氣から解放されて、美玻は、ほうっとため息を付いた。

――あたし、生きてるんだ。

そんな実感が込み上げる。

――あたし、生きてるんだね、沖斗・・・

「おいおい、大丈夫かい？」

いつしか涙眼になっていた美玻を、男が心配そうに見ていた。美玻は慌てて涙を拭いて笑ってみせる。救われた命の重さはまだ辛いけど、それは、美玻がこの先ずっと背負っていかなければならない痛みなのだ。

覚悟を決めよう――そう心に誓う。

「・・・大丈夫です。何か、これおいしいなって思ったら・・・」

「そいつは良かった。体が治りたがっている兆しだな」

「・・・というか、おじさんの料理がお上手なんだと思います」

美玻がそう言うと、男は少し傷ついたような顔をした。

――あれ、あたし、何か変なこと言った？料理上手って、褒めたのになんで・・・

「あのさぁ・・・おじさんって言われるには、微妙なお年頃なんだけど、俺」

――そっ・・・そこっ？

「す、すみませんっ。ええとっ・・・お名前、お名前、まだお聞きしてなくて・・・」

「鴿帆」

「鴿帆、さんっ、ですね。今度からはそう呼ばせて頂きます」

「・・・ほい、よろしく。で、お前さんは何て？」

「あ、えと、美玻です・・・」

「ふうん・・・美玻、ね」

「変、ですか？」

「いやいや、名は体を表すもんだなあと」

少なくとも、山の中をさ迷い歩くような、浮民ではないのは確定というところか。

――我ながら、鼻が利くもんだな。参ったね、こりゃ。

美玻なんて小洒落た名は、どこかの国の支配下にあるきちんとした郷人の、どちらかと言えば、裕福な暮らしを許された層の名前だ。

涼璃が関わっていた龍探索の一行の中に、このぐらいの少女がいた。何と言おうか、この少女を拾った時に感じた、その身から立ち上る芳しい香りは、涼璃のそれと似ていたのだ。即ちそれは、いずれかの五鍵のもの・・・だとすれば、この娘は遠見の一族の者だと考えるのが妥当。そう考えた鴿帆の推測は、大方当たっていたことになる。

数日前、鴿帆は山の頂きに、眩い閃光を見た。そして、そこから天へ立ち上る、大きな光の柱を。あれこそが、希物と呼ばれる鱗を持つ龍だったのだろう。ならば、涼璃は念願通り、龍の鱗を手に入れた筈だ。涼璃が手に入れた鱗で何をしようとしているのかは分からない。それで何某

かの靈薬を精製するにしろ、その手法は宮廷の薬師所の秘伝とされているから、簡単にはいかないだろう。

それでも、皇帝に献上される筈の希物を私物化したとなれば、嚴罰は免れない。故に燥怜は、事ここに至っても、やはり涼璃を何とかしたいと思うのではないか。ただ言伝てを伝えれば良いと言われはしたが。

——俺だって、そうだ。

むざむざ破滅への道を行く者を、引き戻す術があるのなら、何とか止めてやりたいと思うのが人情だろう。浅からず縁のあった人間なのだから。もしかしたら、この美玻はその切札になるかも知れない。鴿帆には、そんな予感めいた確信があった。損得の掛かる商いで、鴿帆は勘を外したことはない。だからこそ、彼は美玻を「仕入れた」のだ。

荷車に幌の掛かった鴿帆の馬車の荷台に、美玻は身を横たえていた。周囲に隙間なく積みこまれている荷物のせいで、寝返りを打つこともままならない。文字通り、大きな荷物さながらに、そこで大人しくしているしかなかった。

熱も下がり、短い時間ならば身を起こしていることも出来たが、まだ横になっている方が、体が楽だった。特に揺れる荷車の上では、振動に傷が痛むことが多く、じっと息を詰めて寝ているのが、最良の選択だと思われた。幌が掛けられているから、外の様子は分からなかったが、馬車が進むにつれて空気が温かくなって行くのが、はっきりと感じられた。

山を下り、やがて平地へと至ると、そこには、厳しい冬の気配などどこにもなく、人々は穏やかな錦秋の時を謳歌していた。あちこちで稲を刈る人々を横目に、鴿帆は荷馬車を進めて行く。時折、大きな屋敷に立ち寄っては、荷台の荷を下ろし、上手に商いをしている様だった。

鴿帆は鴻に店を構えていたが、店は信用の置ける番頭に任せ、年の半分はこうしてあちこちの国を巡っているのだという。途中、得意先と言われる人々に荷を届けながら、彼しか知らない場所へ赴き、希少な品物を入手する。そんな手法で彼は商人として申し上がったのだという話である。

二人の旅はひと月ほど続き、足の踏み場もなかった荷台が半分ほど空になる頃には、美玻は体を起こして座っているのが辛くない程度にまで回復していた。

ある日、鴿帆が得意先の屋敷に荷を届けに行っている間、美玻はふと思立って、荷台から這い出て御者台に上り、そこに腰をかけてみた。天気の良い日で、風はまだ夏の名残を残す様な温さを孕んでいた。久しぶりに見上げた空は水色に輝き、刷毛で掃いたような不揃いな薄い雲が風に流されて行く。

――あたし、やっぱり見えないんだ。

かつて何千里先までも見通せた美玻の瞳は、今は世界をぼんやりとしか映さなかった。

怪我は着実に快方へ向かっていたが、失った視力はそのままだった。頭を巡らせて周囲の風景を眺める。恐らく、金色の稲穂が重たく頭を垂れ、秋風にそよいでいるのであろう田んぼの様子は、彼女には金色の海としか見えなかった。それはそれで美しくはあるのだが、見えないという心許なさは如何ともしがたいものがあつた。

動き回れるようになってから、自分と物の間合いが、これまでの感覚ではどうにも上手く計れないことに気づいた。結果、美玻は良くあちこちに体をぶついたり、或いは躓いたりということをしてきた。

「今日は金が入ったから、久しぶりに宿に泊まれるぞ。旨い酒にありつける」

ちょうどそこへ、鴿帆が浮かれた様子で戻って来て、美玻に銅銭の詰まっているらしい革袋を、持ってみろというように差し出した。余程、仕事が首尾良く行ったのだろう。それを自慢したくて仕様がないうだという空気を漂わせている鴿帆を、美玻は微笑ましく思いながら、手を伸ばし、その革袋を掴んだ――筈だったのだが、美玻が掴んだと思い、鴿帆が手を離れた革袋は、

そのまま地面に落ちてしまった。弾みで口が開き、詰め込まれていた銅銭が土の上にぶちまけられる。

「ごっ、ごめんなさいっ」

美玻は狼狽して荷台から下りると、慌てて銅銭を拾い集める。鴿帆も隣に屈んで、銅銭を摘みあげていく。その作業の合間に、鴿帆がふと確認するように訊いた。

「美玻、お前。もしかして、見えてないのか？」

「・・・あの・・・」

「・・・かぁ・・・済まん、気付かんで。言われれば、まぁ良く物にぶつかるし、転ぶし・・・おかしいとは思ってたんだが。病み上がりで、足元がふらついてるせいだと、俺は勝手に思い込んでたわ」

「・・・いえ、見えにくいというだけで・・・全く見えない訳でもないので・・・大丈夫です・・・多分」

「怪我のせい・・・なんかなぁ・・・そうかぁ、見えないんじゃぁ、この先、色々と難儀だよなぁ・・・」

「・・・はぁ」

「よし、決めた。悪いが、今日の宿泊まりはなしな。少し回り道をする」

「回り道？」

「ああ、知り合いに、腕の良い玻璃職人がいるんだ。こっから、少し北西へ行った山裾の辺りだ。紗依と兎琉の国境の辺りだな。そこに、玻璃職人が住まう郷がある。そこへ寄る。いいか？」

「・・・ええ、構いませんけど」

鴿帆の旅は商いであるのだから、彼が必要なのだと言えば、その行く先について美玻が異を唱えることはない。

——玻璃職人って、何をする人なのだろう。

そんな疑問を抱きはしたが、美玻の意識はすぐに残りの銅銭を拾う方へ戻ってしまったので、敢えてそれを問う事もしなかった。

そこから二日ほどで、彼らは目的の郷へ着いた。馬車を宿へ預けて、鴿帆は美玻を連れて街へ出た。目抜き通りには両側に、露天が並び、何物かを商っているのが窺えた。だが、目の悪い美玻には、遠目にはそれが何であるのか良く分からない。やがて賑やかな通りを過ぎて、裏通りの細い路地へ入り、鴿帆は何がしかの看板の下がった家の前で足を止めた。

「ここで待ってな。話をしてくる」

そう言って鴿帆は、扉の向こうに姿を消した。美玻は手持無沙汰に、扉の上に吊り下げられている看板の判読をしようと試みた。そこには、何か水差しのような絵が描かれている。

——玻璃・・・細工・・・物・・・かしら。

誰も見ていないのをいいことに、美玻は目を細めて、ちょっと人には見せられないようなしめめっ面になりながら、その文字を読んだ。

「御姐さん・・・」

不意に横から、笑いをたっぷりと含んだ声を掛けられて、美玻は驚いて身を竦める。

——み、見られたっ？

恥ずかしさに心拍が上がり、頬が紅潮する。気まずさを誤魔化すために、じとりとした不機嫌そうな視線を向け、その声の主を見た。いや、正確には、見上げたというのが正しい。

自分を「御姐さん」と呼ばわった男は、かなりの長身で、明らかに自分より年は上だった。そして、その見事な緋の髪色に、美玻はまず目を奪われた。鴿帆との旅の間にも、比奈とは異なる茶や緋の髪色を持つ者を見たことはあるが、ここまで鮮やかな色は初めてだった。

「・・・」

「御姐さん、幸運のお守り、買わない？安くしとくから」

「は？」

美玻がその髪に見入っていた僅かな隙に、その青年は彼女の眼前に、紐を通した真紅の玻璃玉を付き出していた。陽を弾いてきらりきらりと紅く輝く玉石は、美玻にかつて一緒に旅をした玫瑰を起想させた。

「・・・柘榴」

「ああ、残念ながらこれは、柘榴石ではないんだ。玻璃に、赤の顔料を溶かしこんだだけの紛い物だから・・・でも、綺麗でしょ？本物にも引けを取らない、って言ったら言い過ぎかも知れないけど。他の色もあるけど、御姐さんには紅が似合うと思うなあ・・・」

美玻が返答をしないうちに、青年が手妻のように掌を返すと、その指に、蒼や緑や黄色といった多彩な色の玉の付いた組紐がぶら下がった。

「どう？」

「・・・うん。綺麗・・・」

思わず顔を寄せて玉に見入る。柘榴のことがあるせいか、青年の言う通り、やはり紅い色に心が引かれた。

「・・・ああ、でもあたし・・・お金持ってない・・・んだけど」

「・・・あ。そうなんだ・・・」

美玻が言うなり、青年の手が唐突に閉じられて、綺麗な玉はその指の中に姿を消した。そして、

「・・・んんーん。じゃ、これあげる」

青年が、懐から別の小さな紅玉を引っ張り出した。それを、そのまま美玻の首に掛ける。

「あのっ・・・だから、お金は・・・」

「うん。これは、僕が作ったやつだから。ほら、ちょっと形、歪んでるでしょ。僕、まだ下手くそだからさ。売り物にはならないモノだから、あげるよ」

「・・・え、でも」

青年が、美玻の頭にぽんと手を載せる。そして、髪を梳くように、その指を絡ませながら、髪をくしゃくしゃと弄んだ。

「あの・・・」

美玻が困惑を帯びた声を出すと、青年が笑って手を引っ込めた。

「元気の出る、勇気のお守りだから、持っていてくれると嬉しい・・・そしたら、僕のエニシの糸が君に届くかも知れないから・・・」

「え？」

「また、会えるようになってことだよ」

「おーい、美玻あ」

扉の向こうから鴿帆の呼ぶ声がした。

「じゃあ、美玻。またね」

「え？」

鴿帆の声に気を取られた一瞬に、青年の姿は消えていた。幻でも見たのかと思ったが、胸に光る紅い輝きは、そうではないことを告げていた。

『またね』

穏やかな温かみのある声が、耳に残った。そして、どこかでその声を聞いたことがあるような気がした。

『おやすみ』

美玻は記憶の中から、夢うつつに聞いた幻のような声を思い出す。

——ああ・・・あの人の声・・・と似ている？

「・・・又、会えるかな」

会って、もう一度その声を聞いたら、はっきりするだろうか。

「またね・・・かあ・・・」

「おい、美玻ーあ」

「はーい」

急かすように呼んだ鴿帆に応えて、美玻は店の中に入った。

そこは、職人たちが忙しくが手を動かしている玻璃の工房だった。

薄暗い部屋の中で、美玻が鴿帆を探しあぐねて立ち尽くしていると、奥の方から鴿帆が姿を見せた。彼に誘われて工房の最奥へ進むと、そこに気難しそうな顔をした男が座っていた。

「玻璃細工師の千陶（セト）。俺が知る限りで、一番腕の良い職人だ」

「こんにちは」

美玻が挨拶をすると、千陶はやにわに右の手を広げて美玻の顔を掴んだ。

「・・・あ・・・あの・・・お・・・」

まさかとは思うが、このまま顔を握りつぶされたりはしないか。美玻が戦々恐々としていると、無愛想な声で千陶が言った。

「三日くれ」

「ああ、構わんよ」

鴿帆が応じると、千陶の手が離れた。

「ええっと・・・」

状況が分からずに、きょとんとしている美玻に、鴿帆が笑いながら説明する。

「遠見鏡というものがある」

「遠見鏡？」

「遠見のように、遠くのものを見ることの出来る代物でな。玻璃玉を薄く削り出して、それを一尺ほどの円筒の両端にはめ込んで作る。それと同じ玻璃の板を使って、文字を大きく見せる鏡を作ることも出来るのさ。ほれ、この様に・・・」

鴿帆が、側に置いてあった薄く円盤上に削り出された玻璃を取り上げて、壁に貼られた紙の細かい文字の上を滑らせる。すると、ぼやけている美玻の視界の中で、その小さな円の中だけ、くっきりとした輪郭を持った明快な世界に変わった。

「これを応用して、お前さんの目が元のように見えるようにする玻璃鏡が出来ないもんかと思っ  
てな」

「そんなものが・・・作れるんですか」

前の様に見えるようになるなど、思いもよらないことだった。それが実現するなら・・・そんな期待に気持ちが高揚する。

「玻璃をこんな風に薄く削り出すのは、まず並みの職人には出来ない。削っている途中で大抵、  
玻璃が砕けてしまうからだ。だが、千陶は、それを三日でやってくれるとき」

「・・・あ、ありがとうございますっ」

美玻が喜色も露わに頭を下げると、千陶は、無表情なままではあるが、任せておけというように頷いた。

千陶の仕事を待つ間、鴿帆は時間を無駄にはしなかった。折角、こんな所まで来たのだからと精力的に動き回り、空いた荷台を埋めるのに十分な品物を、あちらこちらから仕入れて来た。この郷で作られる玻璃の細工物は、鴻の都では、高値で売れるのだと言う。煌びやかに光る玻璃玉などは、縁起物だと言えば元値の数倍の値を付けても売れるのだそうだ。

美玻は他にする事もないので、鴿帆の仕入れに付いて回った。自分が見たこともないような物珍しいものに行きあうのも面白かったし、商いが天職だと思わせるような鴿帆の見事な仕事ぶりを傍で見ているのも、飽きなかった。

だがその日は、鴿帆が商人仲間から、この近在の郷に掘り出し物があると聞きつけて、ひとり馬を借りて出掛けてしまった。馬を飛ばしてぎりぎり日帰りの出来る距離なのだと言われれば、美玻が付いて行くのは到底無理な話だったから、すんなり宿で留守番ということで話は付いたのだ。

鴿帆が小遣いだと言って、多少の金子を置いて行ったから、天気の良いさに誘われて、辺りを散策でもしようかとも考えた。しかし、良く見えない状態では、まず道が覚えられない。つまり、迷子になる確率が高い。そう思って結局、美玻は宿の部屋でのんびりすることにした。

大きく開け放った窓から、宿の庭に植えられている花木の芳しい匂いが漂ってくる。見えないまでも、せめて花色ぐらい分からないかと、窓から身を乗り出した。その時である――

「おおーい」

窓の下、宿の外堀の向こう側に、紅い塊から腕を生やした物体が、その腕を勢いよく振り回しているのが見えて、美玻はぎょっとした。いや、もとい。紅い塊ではなく紅い髪をした頭、だ。もやっとした塊は、そうと見れば、人形を成している。

「・・・ああ・・・玻璃玉売りの人？」

「見つけたよー僕の愛しいエニシちゃん」

「エニシじゃなくて、美玻ですけどっ。それに、愛しいとかって、なんなんですか。そんなこと大声で叫んだりしないで下さい。恥ずかしい・・・」

「どうやら僕は一君に一目惚れしてしまったみたいなんだよねー」

「は？」

「だから一良かったらーお昼でも一緒に食べないかなーっと思ってえー」

「・・・だからっ、そんなところで、大声出さないで下さいってば。あのっ、今、そっちに下りますからっ」

こんな距離のある状態で、声を張り上げての遣り取りなど、冗談ではない。しかも、愛しいだだの、惚れただの、恥ずかしい文言を並べられては、いい晒し物だ。ぼんやりとした視界のなかでも、青年の所業に気を引かれ、道行く人々が足を止めているのが分かった。

美玻は慌てて窓から身を引くと、部屋を飛び出して勢いよく階段を下り、宿の玄関口へ走った。勿論、文句の一つも言ってから、青年の誘いを丁寧にお断りする為、である。

で、あったのだ。それなのに――

――どうしてこうなるのよ。

気づけば二人。少し値の張りそうな構えの料理屋の個室で、向かい合わせに座り、すでに食事をする体勢になっている。

要するに、青年・・名前は紅滯（クレイ）と名乗ったその彼の、言葉巧みな誘いを、美玻がことわり損ねた結果のこの状況である。

「こういう所は、初めて？」

美玻の落ち着かない様子を気にとめた風に、紅滯が言った。

「ええ・・まあ・・」

「実は僕もそう」

楽しそうに紅滯が言う。

「あの、あたし、お金持ってないんですけど」

断る以外の選択肢を考えていなかったから、鴿帆の置いて行った金子は、宿に残したままだ。

「ああ、そんなことは気にしなくていいよ」

「でも・・」

紅滯にしても、そんなに懐が温かいようには見えない。

「本当に大丈夫？」

「平気平気。僕は美玻の為なら、不可能を可能にすることが出来る男だから」

「・・本当に、大丈夫・・？」

別の意味で、心配になって来た。

破天荒と言えればいいのか、紅滯からは、どこか浮世離れした印象を受ける。世間知らずの美玻がそう思うぐらいだから、相当普通ではないということだ。

――あたし、ここから無事に帰れるのかしら。

「ねえ・・美玻はさ」

「え？」

「今、幸せ？」

「・・・」

不意に問われて、咄嗟にその答えが出て来なかった。

――幸せ？

そんなことを考えたことも無かった。今を生きるのに精一杯で。辛いことが行き過ぎるのを、じっと身を縮めて待つことに必死過ぎて。ただ、鴿帆と出会ってからの穏やかな日々は、哀しみに固まっていた美玻の心を、少しずつ溶かしてくれている様にも思う。

「・・良く分からない。幸せって・・どういうことを言うの？」

「・・そうだな。心がほっこり温かくなる感じ？」

「ほっこり・・？」

――尚、分からない。

「僕はねえ、美玻のことを考えていると、そんな気持ちになるよ。ほっこりと、ああ、幸せだ

なあって」

「・・・どうして、あたしなの？」

「どうしてって言われてもなあ・・・一目惚れだから・・・」

「一目惚れって・・・あたしあの時、かなり変な顔してたと思うんだけど」

例えば、美しいものを見て、心が動かされる。そういうことを一目惚れというのではないのか。あんな変顔に、心を動かされたのだとしたら、やはり紅滯は相当変わっている。

「ああ、一目惚れって、昨日今日の話じゃなくてね・・・。僕はもっと前に君に出会っているんだよ、美玻。最高にきらきらと輝いていた瞬間の君にね。君の放った光は、周りの全てを魅了せずにはいられない程に、それは美しい光だった」

心臓をギュッと掴まれたような気がした。同時に、深い哀しみに彩られた記憶が脳裏に蘇る。

『お前は俺の・・・かけがいのない・・・美しい光・・・だから・・・』

――沖斗。

彼の遺した言葉の本当の意味が、分かったような気がした。

「・・・いつ・・・」

「え？」

「何時の話をしているの、紅滯・・・」

「覚えているだろう？美しい茜天の下。君は僕の瞳を射ぬいて、僕の力を奪い取ったんじゃないか」

――茜天の下で。瞳を・・・それは・・・

紅滯の言っているのが、あの日のことだとしたら、まさか沖斗は・・・それに、紅滯は・・・。

「あの、夏至の日だよ。君はまだ十歳だった。世の理も理解していない子供に、僕は全てを・・・  
そう、文字通り、身も心もそっくり奪われたって訳だね」

「・・・」

「僕たち龍はね、人の眼にその姿を映し取られると、神力を失うんだ。正確には、神力はその人間の瞳の中に封じ込められる」

「龍・・・」

あの茜天に見た真紅の眼の龍。

本当に紅滯は・・・その化身だということか。

「本当なら、生贄の祠で、僕は君を食べて体を取り戻す筈だった。でも、あの時僕は、もう少し、君のその顔を見ていたいと思ってしまったんだよ。君の顔を見る度に感じるほっこりした気持ちだが、何と言うか・・・心地よくてね。そこで終わりにすることが出来なかった・・・」

「・・・じゃあ・・・沖斗は・・・」

彼もあそこにいたのか。あの夏至の日に。

「ああ、彼も居たよね。遠見の一人として、あの頂に」

「沖斗が遠見・・・」

——だから、なのか。

沖斗が自分をずっと見守っていたのは。紅滯と同じように、美玻が放ったという光に囚われたから。

「・・・どうして・・・話してくれなかつ・・・」

話してくれれば、自分はずっと、彼に心を開くことが出来たのかも知れないのに。どこか悔しい思いが、美玻を俯かせ眼に涙を滲ませる。

「話さないには、話せない理由があったんだろう。どっちにしろ、それは沖斗が選んで決めたことだ」

「・・・」

今更、この自分が、彼の人生にはもっと違う結末があったのではないかななどと、考えるべきではないのだろう。それでは沖斗の思いを踏み躪ることになる。

——そんなのは、ダメだ。

美玻は気持ちを落ちつけるように、深呼吸をしてから顔を上げた。

「それで？・・・紅滯、あなたは今度こそ、天に還る為に、あたしを食べに来たの？激流の中からあたしを助け出したのも、あなたよね？あたしが死んでしまったら、体を取り戻せないから・・・  
そうなんでしょう？・・・柘榴」

「・・・ああ、やっぱバレてた？」

「だって、あの時あなた・・・」

言い掛けて美玻は、年頃の娘が口にするには恥ずかし過ぎる紅滯の所業を、しかし糾弾せずにはいられずに小さな声で指摘する。

「・・・人の体・・・ペロペロ舐めまくってたじゃないの・・・」

「大丈夫、その時はちゃんと猫もどきの形してたから。ちなみに言うとね、美玻の血を舐めたお

陰で、少し力が戻って来てね、こうして獣から人間へ、変化も高等なものが出来るようになったっていうか・・・それに、僕が舐めておいてあげたから、美玻は傷の治りだって早くなったんだよ？」

「・・・それは・・・お礼をいうべきなのかしらっ？」

怒りと恥ずかしさで、声が裏返る。

「いや、恩に着せる積りはないけど」

「じゃあ、何なのよ。おまけに、寒空の下置き去りにしてくれたのよね？鵜帆がいなかったら、今頃どうなっていたか・・・」

「あれはさ、血の気に当たり過ぎて、いつとき意識が飛んじやったっていうか・・・気が付いた時にはもう、美玻いなくなってたんだもん。随分探したんだよ、雪の中をさあ・・・」

「それは、お手数お掛けしました。あたしが力を持ったまま姿を消しちゃって、さぞかし焦ったんでしょう。申し訳ありませんでした」

「美玻・・・」

紅滯が、美玻の不機嫌な様子にどこか困ったような顔をする。それを見て美玻は、沖斗を失った哀しみと憤りを、八つ当たりのように紅滯にぶつけている自分に気づいた。

——ああ、あたし、最低だ。

「・・・」

そうは思っても、謝罪の言葉も出ずに、美玻は気まずさを抱えるばかりだ。

「・・・僕はさ」

紅滯がぼつり言った。

「美玻の側にいると幸せなんだよね」

「・・・」

「だから、美玻も僕の側にいて幸せだなあって思ってくれたら嬉しいなって・・・ただ、それだけなんだけど」

「・・・あたしは・・・そんな、ほっこり幸せ、なんて呑気に言って良い人間じゃないもの・・・」

「美玻・・・この世界に幸せになってはいけない人間なんて、一人もいないよ」

「だって・・・あたしは・・・」

自分の為に失われた命の重みが、その身に押し掛かる。

「不幸を嘆きながら暮らしてばかりいれば、すぐ側にある幸せにだって、気付かずに行き過ぎてしまうことになる。・・・沖斗だって、美玻がそんな風に生きて行くことを望んではいけないんじゃないの？」

「・・・」

「まあ・・・僕も、もう少し時間を置くべきだったよね。たまたまこの郷にいたら、美玻がいきなり現れたもんから、舞い上がっちゃってさ。つい、声を掛けちゃって・・・」

店の人間がそこで料理を運んで来て、会話はそこで途切れた。

そこからは、たまに紅滯が他愛もないことを言い、美玻がそれに愛想のない相槌を返すということの繰り返しで、結局、何を食べたのかも良く分からないまま、美玻は宿に戻って来ていた。

紅滯のした、信じ難いような話を、美玻は窓辺でぼんやりとしたまま、ずっと考えていた。幾度も止めようと思いつながら、まるで、彼の話をも素直に飲み込むべきだというように、美玻の頭は、勝手に幾度もその内容を反芻し続けていた。

空がまた、何時か見たような鮮やかな茜に染まっていた。

「・・・求婚、されたのか。あたし・・・龍に・・・」

不意にその事実が、すんと心に落ちた。

昼間の出来事を整理して要約すると、そういうことになるのではないか。流石に、思い切り遠回しに「食べてもいいか」と聞いた訳でもないだろうと思う。本当に食べる積もりなら、今までにいくらだって機会はあつただろうし、美玻にわざわざ断る必要もないだろうと思う。

「・・・何か、変なの」

まるで現実味がない。それでも、それが事実なのだ。

『また、会いに来るから』

別れ際に、紅滯はそう言った。

つまり自分は、それまでにその答えを用意しておかなければならないのか。

「ぜんっぜん、分かんない・・・分かんないよ」

何をどう考えて、どう決めればいいのか、美玻には見当も付かなかつた。

鴿帆が宿に戻ったのは、日が暮れてからのことだった。彼は今しがた遭遇した信じ難いような出来事のせいで気が急ぎ、ドタドタと大きな音を立てて階段を上る。次いで乱暴に扉を開くと、火の気のない薄暗い部屋に、廊下の明かりが四角く差し込まれた。

「美玻っ、お前っ！」

鴿帆が怒ったような声で何事か言い掛ける。が、部屋に灯りもないことに気付いて、その口調は、すぐに探るようなものになった。

「・・・どうした？美玻。灯りもつけねえで、具合でも悪いのか？」

手探りで火打ち石を探し、部屋に灯りを灯した。光に照らし出された部屋の中で、美玻は窓辺にもたれかかるようにして静かな寝息を立てていた。それに気付いて、鴿帆はほっとした表情になった。

「何だよ・・・脅かすなよ・・・」

そんな呟きを聞き止めたのか、美玻が目を開けた。

「・・・ああ、お帰りなさい。あたし、寝ちゃってたんですね・・・」

「お前、せっかく体が良くなって来ているところに、そんな所でうたた寝なんかして、風邪ひいたりしたらどうすんだ全く」

「・・・済みません」

「それからっ。お前、今日昼間、どこへ行っていた？」

どうやら怒っているような鴿帆に、寝起きいきなり詰問口調で訊かれて、美玻はどぎまぎする。

「え？どこって・・・ご飯を食べに・・・ちょっと出たぐらいですけど・・・」

「一人でか？」

「・・・一人・・・ではないです・・・」

何故だか分からないが、鴿帆は、美玻の昼間の行動について知っており、どうやらそれについて一言言いたいことがあるようだった。

「今しがたそこで、馴染みの料理屋の小僧に呼び止められてな」

「・・・馴染みの・・・」

「お宅のお嬢さんのお食事代をツケてありますから、お発ちになる前に、忘れずに清算を宜しく願います、と言われたんだがっ」

「え・・・ええと一・・・」

——紅滯——っ！！

てっきり、店の支払は紅滯が済ませてくれたのだと思っていた。

——何が、不可能を可能にする男なのよっ。

「済みませんっ。あたし、財布を持って出るのを忘れてしまって・・・それで・・・勝手に鴿帆さんの名前を・・・」

「あのな・・・俺が怒ってるのは、そこじゃねえ」

「え？」

「一体お前、あんな高い店に、『誰と』行った？」

「誰かと・・・言われても・・・」

説明が非情に難しい。まさか本当のこと——紅滯が龍の化身だという事実を告げても、信じては貰えないだろう。

「お前がっ、行きずりに男を誘うようなふしだらな娘だったとは、全く呆れてものも言えねえ」

鴿帆の、呆れ果てたような心底がっかりしたような表情に、美玻は紅潮する。自分がそんな人間だと思われることが耐えられずに思わず反論する。

「ゆっ、行きずりなどではありません。ちゃんと、見知ったお方です」

「じゃあ、どこの誰なのか、言ってみろよ」

「それは・・・」

「言えねえのかよ」

「・・・以前住んでいた郷の・・・恩あるお方で・・・」

言い掛けて声が詰まる。それはまるっきり嘘ではないが、真実とも微妙に違う。本当のことを言えない以上、何を言っても鴿帆に対して不実であることには変わりはないのだ。

「・・・済みません。それ以上は・・・今は・・・」

ぎゅっと拳を握り締めて、美玻は何かを耐えるように俯いて黙り込んだ。鴿帆はしばらく無言でそこに佇んでいたが、やがて気の抜けたように床に座り込んだ。

「・・・言いすぎた。済まない」

「・・・」

「お前、世間知らずで危なっかしいところがあるから、心配でさ。若い男と一緒にだったなんて聞いたら、もう頭に血が上っちゃって。変な男に引っかけられたんじゃないかって、気が気じゃなくてよ。前の事情は聞かないって、言ったのにな・・・悪かった」

鴿帆の言葉が、胸に染みだした。心配をしてくれたのだ。そして何故だかそこで、いつも怒ってばかりいた沖斗のことを思い出した。怒られるのが怖くて、なかなか打ち解けられなかった。でも今思えば、あれも美玻の身を案じていたが故の言動だったのかも知れない。

——今更・・・本当に今更そんなことに気づくなんて・・・

「・・・心配させて・・・ごめんなさい」

自分の不甲斐なさに涙が零れた。人に心配を掛けるばかりで、自分では何もできない。それでも、こんな風に自分の身を案じてくれる鴿帆には、せめて正直でありたい。そんな思いが、美玻の口を開かせた。

「・・・あたしは・・・比奈の遠見という郷で生まれました。王に龍の探索を命じられて、あのような山の奥深い場所まで分け入ったのです。鴻の皇帝に献上する、希物と呼ばれる龍の鱗を求めて・・・」

「・・・そうか」

「希物の鱗を手に入れるには、遠見が生贄として、その身を捧げなくてはならなかったんです・・・あたしはその生贄になる筈でした。それなのに・・・命を落としたのは、あたしじゃなくて・・・あたしをずっと・・・守ってくれていた・・・大切な人で・・・っ・・・」

体に染み込んだ、あの血の匂いが止めようもなく蘇る。

沖斗の声が、顔が蘇る。

もう届かない幻影が涙で揺れた。

「・・・もういい」

鴿帆が立ち上がって、美玻をそっと抱き寄せた。

「もう・・・いいから。・・・鴻へ戻ったら、なるべく早く、比奈へ行ける様にしてやるから。多少、仕事をやりくりするのに、時間が掛かるが、きっとそうするから」

最初は涼璃の為に、美玻を都へ連れて行こうと考えた。だが、美玻はこれまでそうして、散々役割を押し付けられ、利用されるばかりの人生だったのだ。そして、身も心もぼろぼろに傷ついて一度は死にかけた。そんな娘に、自分はこれ以上の重荷を負わせるべきではない。そう思った。しかし、鴿帆の言葉に美玻は首を振った。

「遠見の郷はもう・・・無いんです。だから、比奈に帰っても、あたしには行く所がありません」  
「・・・じゃあ、どうする」

鴿帆が訊くと、美玻は何かを決心したように顔を上げて言った。

「もしご迷惑でなければ・・・あなたの仕事のお手伝いをさせて頂く訳にはいかないでしょうか・・・旅の間、見ていて、面白そうだなって思ったんです。読み書きなら、出来ます。算術は出来ませんが、きっと覚えます。ですから・・・」

「・・・何つうか・・・お前さんは、性格が素直すぎて、商いなんて、あんまり向いてると思えないんだが・・・それに、商人なんて、あまり人に自慢できるような仕事じゃないんだぞ」

「そんなことないですっ。鴿帆さんは、皆さんから信用を寄せられている立派な方じゃないですか」

「りっ・・・ぱ・・・何か、背筋が痒くなってきやがったぞ、畜生」

鴿帆が身ぶるいをした。

「まあ何だ、鴻へ行って、もっと色々なものを見聞きしたら、他にやりたいことが見付かるかも知れないしな。それまで、店の手伝いも悪くないか」

「ありがとうございます」

情が移ったと言えればいいのか。共に旅をするうちに、どこか危なっかしいこの娘のことが、彼には本当の娘のように思えてきていた。そして、これまで決して幸せとは言い難い人生を生きて来た娘が、この先は、間違いなく幸せに生きられるように、自分は見守ってやりたい――鴿帆はその時、そんなことを考えていた。

翌日は千陶との約束の期日だった。

二人は朝食を済ませてすぐ、待ちかねたように連れ立って玻璃工房へ向かった。

工房へ着くと、仕事の首尾が上々だったのが一目で分かるような千陶が二人を迎え、早速、柔らかい絹布に包まれた依頼品を持って来た。

美玻が興味深げに見詰める前で、千陶は手の上に載せた絹布を丁寧な手つきで開いて行く。中から現れたのは、目よりもふたまわり程の大きな円形に薄く削り出された玻璃の板が二枚。円の対になる場所には、それぞれ二つ穴が穿っており、短い革紐で、二枚の玻璃が繋ぎ合わされ、両端に当たる穴には、長い革紐が左右に一本ずつ、輪の状態に結ばれていた。

千陶が両手で輪の部分を持ち、美玻の顔に玻璃を近づける。すると丸い玻璃の向こうに、輪郭のはっきりした世界が出現し、美玻は息を飲んだ。

「ちょっと失礼するよ」

そう言って千陶が、美玻の耳に輪の部分の掛ける。かつて当たり前の様に見ていた世界が、そ

ここにあった。

「・・・すごい」

「どうかね？」

千陶の確信に満ちた声が訊く。

「はい、見えます。ちゃんと、はっきりと・・・千陶さんの顔も、はっきり見えます」

声の感じから想像していたよりもずっと、千陶は若く気さくな感じがした。

「ご感想は？」

「千陶さんて・・・もっと、気難しくて、親方一って感じの方なんだと思ってました」

「ははは、俺は、声が年寄りくさいからなあ・・・」

「千陶は、玻璃の粉を吸いすぎて、こんな声になっちゃったんだと」

「粉？」

「削る時にな、どうしても削りカスが細かい粉になって舞うから、玻璃細工師は喉をやられる。ま、声で仕事に来る訳じゃないから、支障はないんだが・・・どれ、紐の長さを調節してやろうか」

千陶が紐を引っ張りながら、美玻に見え具合を確認し始める。成程少しの差異で、モノの輪郭の見え方が違うのだ。

「それにしても、こんなものまで作ってしまうなんて、やっぱり千陶さんって、凄い人です」

「いやあ・・・何て言うか、何故だか俺の所には、鴿帆みたいに、無茶な仕事を持ってくるお人が多くてね。そんなの玻璃職人の仕事じゃないだろうって、いつも思う訳なんだが・・・」

「と、文句を言いつつ、ついやってみたくなくなって受けてしまうんだよな、千陶は」

「いやだってさ、流石にこんなものは削れないだろうと言われると、どうにも闘志が湧くだろう？」

「それはまた、挑戦者なんですねえ・・・」

「そうこうしている内に、あいつなら、何でも削れるみたいな話になってしまってね、気付けば、いつしかそんな依頼ばっか来るように・・・」

千陶が苦笑しながら言う。

それでもその顔は、どこか楽しそうだ。

「そう言えば、つい先だって、珍しいものを削ったよ」

「珍しいもの？玻璃ではなくて？」

「ああ。それが何と、龍の鱗で」

「え・・・」

——龍の鱗・・・それって・・・。

美玻の顔色が変わったことに気付かずに、千陶は手を動かしながら話を続ける。

「背に負うようなでっかい代物で、ここから太刀を削り出してくれないかと、そう言われた。一見玻璃かと思ったんだが、硬度が全然違ったんで、これは一体何だと聞いたら、そいつは龍の鱗だと・・・」

その男は、どこか冷めたような笑みを浮かべそう言った。どこか人をからかうような感じでもあったから、その言葉が本当なのかどうかは分からなかった。

「・・・それでも、これまで触ったことのないようなものだったから、或いは本当にそうだったのか・・・とな」

「それで・・・千陶、お前まさか、その太刀を削ったのか？」

鴿帆の声には、どこか千陶を責めるような色があった。

「ああ、なかなか立派な飾り太刀になったぞ」

「飾り太刀ということは、人を斬るものではないということでしょうか・・・」

「そりゃあ・・・飾り太刀だから、祭祀なんか用いるもんなんじゃ・・・」

そう答えて千陶は、そこで初めて鴿帆が難しい顔をして考え込んでいることに気づいた。

「・・・違うのか？」

千陶のその問いには答えず、鴿帆は質問を返す。

「その男は、どんな奴だった？」

「どんなって・・・背が高くて、若い感じだったな。顔は下半分を面布で隠していたから、良くは分からない。・・・ああ、そうだ、左の手の甲に、何だか花の刺青みたいのがあったな。ちらっと見えたんだけど、珍しいんで眼に止まった」

「花の刺青？」

では、その男は涼璃ではないのか。皇族である彼が、自らの身を傷つけるようなことをする筈がない。龍の鱗というのも、その男の戯言だと思っていいのかも知れない。どこか胸騒ぎを覚えながらも、鴿帆はそう結論付けた。しかし――

「その花って、梔子の花ではなかったでしょうか？」

美玻の思い詰めたような声が訊いた。

「梔子・・・と言われればそうだったかも知れないが、何しろ、一瞬のことだったからなあ・・・って、おい、どうしたよ」

美玻が、いきなり腰が抜けたように、そこに座り込んだ。

「どうした、美玻」

「・・・ズズリ・・・」

少女の口から洩れ出た名前に、鴿帆は言葉を失う。

――美玻は今、涼璃と言ったのか。

「・・・ズズリの左の甲には、比奈の王女様に押された焼印の跡があるんです・・・王女様のご紋である梔子を象った印の跡が・・・」

「まさか・・・本当に涼璃様なのか」

「え・・・？涼璃様？」

訊き返されて、鴿帆は自分が思わず声を出していたことに気付く。

「・・・鴿帆は・・・ズズリを知っているの？」

「・・・いや」

美玻の縫るような眼に、鴿帆は困ったような顔になった。その男が本当に涼璃なのであれば、千陶が削ったのは間違いなく、龍の鱗の太刀だということになる。そして、恐らく涼璃はそれを持って都へ向かった。

——何てこった。まさか、涼璃様がそんなことを考えておられたなんて・・・

鴻の皇帝は、龍の鱗から作られるという不老不死の霊薬を飲んでいる——とされている。そして俄かには信じ難いことだが、その肉体は文字通り不老不死なのだ——そう、言われている。

宮廷の周辺にはまことしやかに囁かれ続ける、そんな噂があった。流石にそれは巷説の類であろうと、鴿帆は思っていた。齢百歳を越えている筈の皇帝の姿が、未だ壮年の若々しさを保っているのも、数多の強壯の薬草を服用しているから。或いは、その仁徳故だという方が、まだ飲み込みやすい。要するに、その肉体が不死であるという部分に関しては、全く信じていなかったのだ。

——本当に、不老不死なのだとしたら。

伝承に曰く、龍の鱗の霊薬を飲み、不老不死の力を得た者を滅する唯一の方法は、同じく龍の鱗より削り出した刀によりて、その身を刺し貫くべし・・・とある。

もしも、それが現実でありえる話なのだとしたら、涼璃は父皇帝の暗殺という大罪を犯そうとしている、という事になるのではないか。

『鴿帆、お前は、この世界が変わる様を、見てみたくはないか？大王の玉座に居座る忌まわしき悪霊が討ち払われる瞬間を、見てみたくはないのか・・・』

——涼璃様は本当にそんな大それたことを、なさるお積りなのか・・・

——そして燥怜様は、恐らくそれに気づいておられる。

気づいていたにも関わらず、燥怜は、涼璃を止めよとは言わなかった。ただ、自分の言葉を伝えさえすればいいと。それは、どちらでも構わないということなのか。涼璃の意志が、世界が変えても、変えなくても・・・燥怜はただ、傍観しようとしているのだ。一つの運命が、どちらに転ぶのかを。

——しかし、燥怜様・・・それでは、涼璃様は確実に・・・

どちらに転んでも、涼璃を待っているのは破滅でしかない。未だ、あの津澄に固執する弟を、燥怜はもう、見限ったとでも言うのか。だが自分は・・・

「・・・鴿帆さん・・・鴿帆さんっ」

我に返ると、美玻と千陶が揃って、真剣な眼差しで自分を見据えていた。

「鴿帆、もしかして俺は・・・いけないものを作ってしまったのか」

千陶が鴿帆の様子を伺うように、力のない声で訊いた。

「そんなことは・・・させねえ。お前の誇りに傷を付けるような真似は、この俺がさせねえよ」

真実を知った以上、ただ見ているだけなど、自分にはできない。

「行くぞ、美玻。すぐに出発する」

「え・・・はい」

鴿帆は挨拶もそこそこに、千陶の工房を出て、通りを大股で歩いて行く。美玻は、渡された玻璃鏡を慌てて布に包み懐にしまうと、小走りになりながら、どうにかその横に付いて歩く。

「美玻」

「・・・はい？」

「皆までは言えないが、涼璃様というお方は、鴻の身分のあるお方でな」

「え・・・スズリ・・・が？」

その物腰の柔らかな様子は、実はそうなのだとおられた方がしっくりと来た。

「そう・・・だったんですね」

「ああ、俺の店の上客の一人であるお方の、弟君で馴染みのあるお人だ。その涼璃様が、千陶に依頼した飾り太刀は、人を斬ることは出来ないが、もしそれが本当に龍の鱗で作られたものなのであれば、ただ一人、それによって命を奪う事の出来る人間がいる」

「命って・・・スズリは、何をしようとしているの？」

「恐らく彼は、父君を殺そうとしている」

「・・・そんな・・・」

美玻が言葉を失った。あの穏やかなスズリが、よりによって、自身の父親を手に掛けようとしているというのか。

——そんな怖ろしいことの為に・・・

彼は鱗が欲しいと言ったのか。その霊薬の力で、誰かを救うためではなく。

——大切な人を救うからだ。

その言葉は偽りであったというのか。

「・・・そんなことの為に・・・」

——沖斗は命を落としたのか。

「美玻？・・・大丈夫か・・・」

いつしか美玻は、鴿帆の袖を引きながら泣いていた。

「・・・駄目だよ・・・そんなの・・・そんなこと・・・スズリが・・・するなんて・・・そんなの・・・スズリがスズリじゃ無くなっちゃう」

「ああ、そうだな。涼璃様に、そんなことをさせる訳にはいかない」

「鴿・・・帆・・・」

「俺は、止めに行くぞ。お前は、どうする？」

美玻が俯いていた顔を上げた。

「行きます」

鴿帆は、その真っ直ぐな目を見て思う。

——そうか。

その目が、玻璃のように透明で穢れのないものだったから・・・

初めて美玻に会った時に感じた予感、これだったのだと思う。この娘は、弱々しく見えても、芯は強いのだ。この目に宿る強い光ならば、涼璃がその心に抱え込んだ闇を消し去ってくれるのではないかと。自分はきっと、そんな期待を抱いたのだろう。

「・・・お前に出会えて、良かった」

鴿帆がそう言って笑顔を見せると、美玻も涙を拭い笑みを返した。

『・ ・大丈夫、何とかなる、と。そう思っていれば、大抵のことは乗り越えられるものですよ』

――不思議。

スズリに貰った言葉が、今はそのスズリを救うために行動するための勇気の源になっている。  
――もうだめだと、心を折ってしまえば、そこで終わりなんだよね、スズリ・ ・だから、あたしは、まだ諦めないから。

そして今、護符のように、その言葉を自分の心に貼り付ける。――きっと、大丈夫、と。

二人は、その日のうちに、鴻の都を指して出発した。

もう、二度と会う事はないと思っていた。それが思いがけない縁の糸に導かれて、美玻は再びスズリと会おうとしている。その面影に引き摺られて、今まで考えないようにしていた探索の旅のことが、次々に思い浮かんだ。旅は辛いことの方が多かった筈なのに、浮かんでくるのは、不思議と楽しかった遣り取りばかりだ。そして――

『一人で抱え込むから、怖いと思う。その怖さを、声にして体の外に出せ』

大切なことも、沢山教えて貰った気がする。

「ねえ、鴿帆さん・ ・」

美玻は、隣で手綱を持つ鴿帆に声を掛ける。

「・ ・話を・ ・長い話を聞いて貰っても構いませんか？」

「話？」

「はい・ ・あたしがスズリと出会って、共に龍の探索へ赴いた旅の話です」

「・ ・比奈の？」

「はい」

「って・ ・いいのか？」

鴿帆がどこか心配そうな目をしている。

「ただ抱え込んでいても、何も変わらないような気がするから。いっそ、吐き出してしまえばいいのかなって・ ・」

何となく、この辛くて重たいものを抱え込んだままの自分では、スズリを止めることなど出来ない。そんな気がするのだ。

「別に、同情して欲しいとか、そういうのじゃないので・ ・ええと・ ・そう！ただの、愚痴ぐらいに聴いて頂ければ」

「いいよ。気の済むようにしたらいいさ」

鴿帆があっさりと言った。

「そうだな、聴き賃として、面白い内容だったら、本にして売り出すってことで手を打とう」

「ええ？聴き賃って、話す方が払うんですか？・ ・普通、逆なのでは・ ・？しかも、本って」

「商人は、いつ何時たりとも金換算を忘れてはならん。時は金なり、だ。商いに関わろうと思う

なら、そういう感覚を磨け。金、金、金、だ」

「・・・金、金、金、ですか」

「そう、金だ」

鴿帆が諭す様に言い、満面の笑みを見せる。そのお金に対する執着心を見せつけられて、自分には果たして商人の素養があるのだろうかと一抹の不安が過った。

「さあ、それでは話したまえ」

「はい・・・」

美玻は苦笑しながら話し始める。

話し始めてすぐに、辛いばかりの話が、聴き手を得たことで、違う色を見せ始めたことに気づいた。不幸という枠の中で混沌としていた様々な出来事が話すことで整理され、また整理されたことで、ただ不幸なばかりの話ではなくなっていく。そして話しながら、旅の間、ふとした瞬間に感じた、穏やかで優しい気持ちがさまざまにあったことを思い出す。

泣いていた時に掛けて貰った言葉。そっと背中に回された腕の温もり。何でもないことが可笑しくて、互いに笑い合った食事の時間。それは、心がほっとするような、温かな気持ち・・・。

紅濤に訊かれた時には思い付かなかった。でも、もしかしたら、そういうのを、ほっこりというのではないか。

——幸せって・・・どういふことを言うの？

『・・・そうだな。心がほっこり温かくなる感じ？』

旅の間はずっと不安と背中合わせで、気付くことが出来なかったけど、幸せって、そういうことなのではないか。

——やっぱり、話して良かった。

大事なことに気づけたことを嬉しく思いながら、美玻の話は鴻へ入るまで続いた。

## 第7章 牢獄の皇子

鴻の都に入ると、人の数も屋敷の数も一気に増えた。というよりも、道の両側には屋敷が密集して建ち並び、どここの往来にも人が溢れかえっていた。何と言おうか、隙間というものが、ない。

——なんて窮屈な街なんだろう・・・

美玻は荷馬車の上から、千陶に作って貰ったガラス鏡ごしに、そんな街の様子を見ていた。何もかもが目を見張ることばかりだ。そもそも、比奈の王城ほどの大きな屋敷が、気軽にそこかしこにあるのが信じられなかった。

やがて鴿帆の店に着くと、そこもまた立派な構えの大きな店で、大勢の人間が忙しく出入りしている。全く活気に溢れる場所だった。鴿帆の帰着を知ると、店の者が一斉に店の前に出迎えに並び、美玻はただただ圧倒された。

鴿帆に言われた通り、美玻は風呂を使い旅の汚れを落として、着物を用意された新しいものに改めた。一人、豪勢な部屋に留め置かれて落ち着かないままに、美玻は用意された食事に、時折思い出したように手を付ける。大分経ってから、ようやく鴿帆が姿を見せた。こちらも、旅の間の気安い感じとは異なり、余所行きに衣服に改まっている。

「・・・ああ、待たせて済まなかったね。留守の間の、店の報告を聴いていたもんだから。それじゃ、浪瀬（シロセ）、後は頼んだよ。私はこの娘を連れて、御大尽様の元へ行って来るから」  
鴿帆が側に控えていた番頭に言う。

「畏まりました」

番頭は丁寧に頭を下げながら、ちらりとまるで値踏みするように美玻の方を見た。ガラス鏡が珍しいのかしらと思いつつ、何となく居心地の悪さを感じながら、美玻は鴿帆に伴われて店の外に出た。すると今度は、ここまで乗って来た荷馬車とは比べ物にならないような、瀟洒な馬車が止まっており、また驚かされた。

「あの・・・鴿帆さん」

戸惑う美玻を余所に、鴿帆は慣れた様子で馬車に乗り込んでいく。仕方なく美玻もそれに続くと、背中で扉が閉じられた。これまでずっと堅い荷馬車に座っていたせいか、ふかふかする座面に座りの悪さを感じて、どうにも覚束なさを覚える。体を少しずつ前後左右に傾けながら、腰の落ち着く場所を探すうちに、馬車はいつしか長い漆喰の塀の脇を走っていた。

美玻が長い壁だなあ・・・と思ってから、その壁は途切れることなく、延々と続いている。もはやそれは、広い御屋敷という規模ではないのではないか。

「あのう、鴿帆さん、ここって一体・・・」

言い掛けた所で、馬車が大きく傾いで止まった。外で何事か人の遣り取りをする声がして、馬車は再び走り出す。見れば、大きな門を——しかも、槍を構えた門番のいる門だ——馬車が潜って行くところだった。凄いと思いながら、馬車の進む前方へ何気なく目をやると、

「あのっ、鴿帆さんっ」

門を抜けた先は、広大な広場になっており、数え切れないほどの馬車が、止まっていた。しか

もどれも、豪勢なものばかりだ。鴿帆の馬車も、その中に紛れるように止まった。

「こっ、ここは、一体・・・」

「ここは、鴻の宮殿がある所ですよ。さっき通って来たのが、出入りの商人やら職人やらが入り出す為の、通用門」

「通用門・・・なんですか。あれで・・・？」

「さあ、行くよ」

美玻が驚いているのを気にもせずに、鴿帆は馬車を下りて、さっさと歩いて行く。ここではぐれたら、二度と会えない気がする。そんな危惧を抱きながら、美玻は必死に鴿帆を追った。

宮殿の中は、もう一つの街のようだった。広大な敷地の中に、それこそ山あり谷ありと、趣向を凝らした庭がいくつも造営されており、今現在、百近い数を数える皇族の、各々の御殿が点在しているらしい。更にそれぞれに仕える人間の数を勘定していくと、文字通り、街と言っても過言ではないぐらいの人間がここに入出入りしていることになる。慣れない人間には、迷路の様に入り組んだ建物の間を、鴿帆は慣れた様子で歩いて行く。

「あの、鴿帆さん？あたし、自分が今から、どこに行くのかぐらい訊いても構わないですか？」

「ああ。私の店の、一番の上客であられるお方の所ですよ」

いつもは一人称が『俺』である筈の鴿帆が、『私』という程に畏まっている。まさかとは思いますが、一応確認の為に訊いてみた。

「あられる・・・って、まさかそのお方は、皇族のお方なんていう事は・・・ないですよ？」

「いや。まさかその、鴻国第七皇子の燥怜様なんだが」

「皇子、様・・・」

美玻は眩暈を覚える。

そんな大層な人に会うのかと思えば、恐れ多さも最上級に極まる。比奈での体験のせい、高貴なお方というものに思い切り及び腰になる。

「ねえ、どうして、スズリのことで助力を仰がなきゃいけないお方が、皇子様なんて、そんな大層なことになってしまうの？」

「そりゃあ・・・涼璃様が、鴻国第十三皇子であられるから、そんな大層なことに成らざるを得ないというか・・・」

「うっそ・・・」

スズリが鴻国の皇子。その事実はあまりに突飛過ぎて、俄かには飲み込めなかった。それでは、スズリが害しようとしているのは、鴻国の皇帝陛下ということになってしまうではないか。

「嘘・・・よね・・・？」

美玻の動揺具合を見て、鶺鴒が申し訳なさそうな顔をする。

「嘘じゃねえ」

「嘘お・・・」

美玻は頭を抱えて、その場にへたりこんだ。

——同じ王族とかでも、せめて周辺七国の王子様ぐらいにしておいてよ。よりによって、何で大鴻国の皇族？

あまりに途方もなさ過ぎて、美玻は途方に暮れる。スズリ以前に、そんな大事に関わったら、いずれにしろ只では済まない。もう単純に怖ろしい。

「しっかりしろよ。そりゃ、皇族様は確かに大層なお方だが、人外のもんでもあるまいし、話が通じないって訳でもないんだから」

見上げた鶺鴒には、動揺の欠片もなく、ただ困ったような笑みを浮かべて、美玻を見下ろしていた。鶺鴒には、いつものことなのだ。そう考えると美玻の動揺は収まって行く。

「そう、ですよね」

自分に気合を入れて、立ち上がる。

——今更・・・そう今更じゃない。

何度も怖い目に遭わされて来た。死ぬような目にだって。自分はそれを、全部乗り越えて来たではないか。

——龍とだって渡り合ったのよ。それ以上に、大変なことがある？それに・・・あたしは、きっと運が強い。

何の根拠もないが、そう信じ込むことで、美玻はどうか平静を取り戻した。

燥怜が住まう御殿に着き、鶺鴒が来訪の用向き——表向きは、都へ帰朝した挨拶の為としてあった——を伝えると、彼らはすぐに、控えの間に通された。そこでしばらく待つと、馴染みの侍従が顔を出し、燥怜様はただいま宮殿の方へお出かけであるから、ここでしばらくお待ち頂きたいと告げに来た。

「ああ、そう言えば、観月の宴がもうじきでございましたか・・・」

「左様で。燥怜様におかれましては、陛下直々に宴の仕切りを任せられました由。ここ数日などは、昼も夜もなく飛び回っておいでにございます」

「それは、お忙しい所にお邪魔してしまいましたな」

「いえ。鶺鴒殿の旅の土産話など、燥怜様は楽しみになさっておいでにございますれば、きっと、ご来訪をお喜びになられましょう」

侍従はそう言うと、丁寧に会釈をして退出して行った。

ところで、二人が鶺鴒の店を出て来たのは、午前中のことであった。

が、燥怜が姿を見せないままに、いつしか陽は天頂を過ぎていた。

しばらくお待ちくださいと言って、侍従が姿を消してから、お茶が運ばれ、昼食が運ばれ、美

玻は鴿帆とふたり、それらを順に片付けていくことになった。

室内の調度も、お茶や食事も、それが入れられて来る器の類も、何もかもが、豪華の一言でしか表わすことしか出来ない。皇子というご大層なお方と対面するのだということを忘れ、とても上等な宿に、遊びに来たのではないかという錯覚すら芽生え始める。そんな現実離れした状況に、気持ちは緊張しの通しで、いたずらに疲労が積み重なって行く。そんな時の果てに、ちょうど女官が五度目の茶器を運んで来たのと時同じくして、燥怜がようやく姿を現した。

——このお方が、スズリの兄君・・

そう思って見れば、目元など少しは似ている感じはする。だが、全体的には、恰幅が良く覇気に満ちた兄君の様子は、線が細く穏やかな空気を纏っていたスズリとは、あまり似ていなかった。

長い待ち時間の間に、鴿帆から聞いた話では、皇帝には両手に余るほどの妃がおり、皇子は十三人、姫皇子は二十五人にも上るのだという。つまり、燥怜とスズリは母が違うのだ。スズリの母は十年程前に、すでに亡くなっている——正確には、罪を負い処刑されたのだという話である。

その母の死を境に、スズリは変わったように思うと鴿帆は言った。真相は分からないが、スズリは母に罪があったのだとは認めておらず、その事が、恐らく彼が父に刃を向けさせる最大の理由なのではないかと、鴿帆はそう言った。

『・・忘れる努力をしたのですよ。そう・・生きていくのに必要だったからですかね』

そんなスズリの言葉を思い出す。全ての感情を殺さなければ、やり過ごすことの出来ない程の絶望は、きっと彼の心に深い闇を生んだのだろう。それをスズリは、未だ心に抱え込んでいるのだ。

燥怜は、宮廷で居場所を失ったスズリを、その外に出してやることで救ったのだという。だが、そんな燥怜にすら、スズリは心を閉ざし、何も語りはしなかったのだ。自分が失ったものを全て持っている者に、失った者の思いが分かる筈がないのだという様に壁を作って。そして語られなかった言葉は、様々な負の感情を絡み付かせたまま、彼の感情をゆっくりと壊して行った。

長く旅を続け、各地を放浪しながら、それでも彼は出逢う事が出来なかったのだ。

美玻が、鴿帆にしたように、胸に溜まった言葉を、吐き出す相手に。だから——

ずっと側にいながら、自分にはその力が無かった。スズリに頼るばかりで、彼が抱えているものの重さを察することすら出来なかったのだ。美玻は自分の不甲斐なさに、泣きたくなった。

涼璃が龍の探索の後に、その鱗を手に入れ、更に龍の太刀をも手に入れたのだと聞いた燥怜は、深いため息をついた。

「結局、涼璃は過去を振り切ることが出来なかったのだな・・・この期に及んで、父を弑したところで何になる。この宮廷は、もはや、あれが居た頃と同じではないというのに。津澄殿のことにしても然りだ」

「・・・」

鴿帆は神妙な面持ちで、燥怜の言葉を聞く。

津澄はその犯した罪により、今も牢獄に繋がれている。だがそれは、津澄にとっては、涼璃が思うような、屈辱でも絶望でもなかったのだ。というのも、その有能さが葬り去られることを皇帝が惜しんだ結果、彼は牢獄に居ながらにして、実質的に国を仕切る宰相の役割を担うことになったからである。

近頃では、政治に興味の薄れた皇帝に代わり、事実上、津澄が国を動かしていた。勿論、この事はごく一部の人間しか知らない、極秘事項である。牢獄の外に出られないこと以外、津澄は何不自由のない生活をしている。この鴻の実質的な支配者として。そして燥怜は、そんな津澄と外の世界の橋渡しの役を負っていた。

涼璃は、津澄を罪に問うた皇帝を退ければ、津澄の罪は帳消しになり、彼が新たな皇帝になれると考えている。そして、津澄の罪が消えれば、彼の母の罪もなかった事になると信じているのだ。だが、津澄はそんな自由など、望んでいない。皇帝が生き続ける限り、津澄は自分の思うままに国を動かし、民を支配できるのだから。津澄の世界は、不老不死の皇帝の存在を肯定することで始まった世界。そして、狭い牢獄の中にいながら、広い世界を自由に動かすことのできる世界なのだと考えた。

「故に、今更、皇帝の存在を否定する者の出現など喜ぶ筈もないのだがな」

「それを、燥怜様からおっしゃって頂く訳には参りませぬでしょうか。涼璃様は、長く都を遠ざかっておいで故に、世情がお分かりになっておられないだけなのですから、順を追ってお話になれば、きっと・・・」

「話そうにも、行方が分からぬではな。しかも、すでに龍の飾り太刀を手にしてしまっているのでは、探しようがない」

「それはどういう・・・」

「龍の神力を宿す太刀には、余人の目から身を隠す力があるのだ。つまり、今この目の前に涼璃が立っていようとも、我らにはその姿が見えぬ。向こうから姿を現すのでなければ、探しようがないということだ」

「・・・そんな」

美玻が思わず漏らした失望の声に、燥怜の射るような視線が向いた。不遜であるのは分かっていた。だが、美玻はその視線を受け止めて、更に言った。

「どうして、お止め下さらなかったのですか。こうなる前に、あのお方を呼び戻すことだって、あなた様になら、お出来になった筈です」

「・・・言いにくいことを、はっきりと言う娘だな」

燥怜が冷笑した。

「世間知らずの感傷に付き合っただけでやる程、私も暇ではないのでな。呼び戻す為の使者は送ってやったぞ。そうだな、鴿帆」

「・・・はい」

「思い留まるようにと、すでに警告は与えてあるのだ。それを、あれは自ら望んで道を踏み外したのだろう。・・・違うか？折角、闇とは無縁の外の世界に放ってやったものを。かような理由で舞い戻ってくるとはな。全く、救いようのない愚か者ではないか」

「それでは、ただ愚かと晒い、このまま何もせずに、お見捨てになるお積りですか」

尚も言い募る美玻に、燥怜のどこか蔑むような声が訊く。

「そなたは、涼璃が大事か？・・・まあ、大事なのだろうな、こんな所まで来て、身の程知らずにも、この私に意見しようと言うのだから」

「大事です。彼は、苦楽を共にした大切な仲間ですから」

「仲間？」

燥怜が意外そうな表情を浮かべ、次いで失笑した。

「・・・何か、可笑しいですか？」

「いや・・・そうか、仲間か・・・」

意味ありげに忍び笑いをする燥怜に美玻が顔を顰めた横で、鴿帆が言った。

「燥怜様、私からもお願い申し上げます。どうか、今一度、涼璃様をお止する手立てをお考え下さいませぬか」

「そう言われてもな。・・・鴿帆」

「はい」

「涼璃は、我が放った矢ぞ」

「・・・？」

言われた意味が分からなかった。涼璃が、燥怜の命で動く人間だということなのかと思う。

「一旦弓を離れて飛び去った矢を、引き戻すことなど出来はしないのだ、鴿帆」

「どういうことにございましょう」

「実はな、私は津澄殿と賭けをしているのだ」

「賭け、でございますか？」

鴿帆が尚も話が見えず、怪訝な顔をするのを、燥怜は面白そうに眺めながら言う。

「そう。それ故、涼璃が比奈の希物を探して、かの国に潜入していると知り、あれが希物に近づけるように機会を作ってやったのだよ。つまり、この私が、希物を献上すべしと、比奈王に使者を送らせたのだ」

「それは・・・どういう」

「そんな些細なきっかけで、この世界が変わるのかどうか、と。それが、賭けの内容だったからな」

「燥怜様・・・」

鴿帆は呆然とする。

何時の間に――このお方は、変わられてしまわれたのか。

このような事を考えるようなお方ではなかったのに・・・。

皇帝の影である津澄に、更にその影のように仕えなければならない。その難しい立場ゆえの疲弊からなのか・・・。

「・・・いや、違うな。変わるのかどうかではなく、変えてみたかった。そう言った方が正確か。現状、津澄殿が支配するこの世界を、私は変えてみたいと思ってしまった。何しろ、津澄殿が自信たっぷりに、この世界が永遠に盤石なのだとおっしゃるものだから・・・その不愉快なまでの過剰な自信を、砕いて差し上げてみたくなったのだ」

「馬鹿な・・・」

憤りに飛び出した言葉を、鴿帆は慌てて飲み込んだ。

――毒気に当てられたのだ。燥怜様は・・・津澄様という強い毒に。

どんなに非道な罪を犯しても、能力があれば、罪は相殺される。鴻の宮廷には、そんな能力第一主義の風潮がある。ここでは、力こそが正義なのだ。

その結果として、鴻は圧倒的な力で他国を支配し栄華を誇っている。そして、牢獄に居ながら国政に関わる津澄は、その象徴のような存在と言えた。

「津澄殿がいけないのだよ。この私を本気にさせるから・・・」

「ひどい・・・あなたはそんなことの為に、スズリに命を掛けさせようと言うの？」

「あれはあれで、自分の望みを叶える為に動いてるだけだろう。私が何を命令した訳でもないよ。お前たちが、涼璃を止めようとするなら、それはそれで構わない。まあ、もはや止めようもなかろうがな」

燥怜が実に不快な笑い方をした。

高貴なお方との対面は、やはり美玻に理解不能な世界を見せ、心に大きな不信感を植え付けた。燥怜のことを良く知っていた鴿帆も、予想の遥か上を行った想定外の事実、流石に失望を隠せない様だった。すっかり気落ちした様子で、帰りの馬車の中では一言も口を利かなかった。

店の前で美玻たちを出迎えた浪瀬は、疲労困ぱいといった風の主人を気遣い、まるで、主人の不調が美玻のせいであるというような厳しい視線を向けた。そんな目を向けられて、美玻の方も酷く落ち込むことになった。

与えられた部屋に逃げ込むように退散し、スズリを探す手立ても思いつかないまま落ち込んでいると、しばらくして、その浪瀬が顔を見せた。自分に対して良い印象を持っていないような浪瀬に、美玻は自然と身構えて向き合う。と、浪瀬が抑揚のない口調で言った。

「そなたは、何なのだ？」

「何って・・・」

聞かれた意味が分からずに、そのまま返す。

「御殿への供は、長年お側にお仕えしている、この私の役目なのだ。それが、そなたの様な小娘が、いきなりやってきて、旦那様のお供をするなど」

——ああ、そういうことなのか。

浪瀬の厳しい視線の意味を理解した。

「・・あってはならぬ？」

「その通りだ。あってはならぬ。しかも、旦那様があの様に憔悴なさるなど・・私がお一緒していれば、決してその様なことには」

「あたしは、ここで働かせて頂きたくて、鴎帆さんに付いて来たんです。それだけです」

「それだけにしては、随分な客人扱いになっている様だが・・」

——ああ・・成程。

客なのか否か。客でないのなら、要は働け、ということなのだろう。

「おっしゃりたいことは、分かりました。それで、あたしは何をすればいいんですか？」

鴎帆が信頼を寄せているだけのことはある。商人的な感覚に則って見れば、彼のやることには無駄がないと言える。つまり、無駄飯食いは作らないという訳だ。

「ならば手始めに、店の表でも掃いて貰おうか」

「承知いたしました」

恐らく彼の中では、勤勉さこそが信頼の基準になるのだろう。彼の中では鴎帆の落ち込みは、美玻の失点として認識されている。それを払拭する為には、取り敢えず、言われたことをきちんと片付けて、信用を勝ち取って行くしかないのだ。

しかし、美玻がさっそく部屋を出ようとする、浪瀬に引き留められた。

「ああ、少し待て。仕事の前に、旦那様の憔悴なさっている理由を話してから行け」

「・・それは。私の口からはちょっと・・」

「言えぬと？」

浪瀬に睨みつけられて、美玻は竦み上がったが、必死に首を横に振った。すると、

「・・頼む」

いきなり頭を下げられた。

「え・・止めて下さい、困ります」

「常に旦那様の思う所を察し、望む所を先回りして不自由のないように手配するのが、この私の務め。その為ならば、下げ難い頭とて、下げてみせる」

「そのお心掛けは尊敬いたしますが・・無理なものは無理なので・・」

「どうあっても？」

「どうあっても、です」

美玻の返答に、浪瀬の眉間に深い皺が刻まれる。初対面での印象もあまり良いものではなかったのに、これで決定的に悪印象になってしまったに違いないと美玻は肩を落とす。これでは、この店でやっていくのに先が思いやられる。そんなことを考えていると、顔を顰めたまま、勝手に何事か納得しながら浪瀬が呟くように言う。

「・・成程、その口の堅さは、信用に値すると、旦那様はそうお考えなのだな・・」

更に思案顔の浪瀬が、今度は何を言い出すのかと美玻が戦々恐々としていると、そこへ小僧が

やってきて、旦那様がお呼びだと告げた。

「おお、旦那様は、やはりこの浪瀬を頼りになさって下さっておるのだな」

嬉々として、浪瀬は部屋を出ていく。美玻のことなど、もはや眼中にはないようだった。

ひとり取り残された美玻は、緊張から解放されてほっと息をつく。

「えっと・・・店の表を掃いておけばいいのよね？」

誰にともなく確認するようにそう呟くと、美玻は箒を探しに行った。

美玻は店の前で箒を手に、慣れない掃き掃除に没頭していた。箒を左右に動かして、塵を集めていくという単純な作業ではあるのだが、これが思いの外、腰や腕に負荷が掛かる。

「・・・考えてみたら、これ、生まれて初めてなのかも」

遠見の郷の屋敷では、掃き掃除などは、下働きの者が何事も無いように簡単にやっていた。それが、こんなに大変なものだとは思わなかったのだ。思えば、特別な環境で育った美玻にとって、こういう初めてなものが、この先五万と出て来ることになるのかも知れない。

「それはそれで、楽しそうだけど・・・」

一旦手を止めて、通りの先を眺める。鴿帆の店の間口は、やはり広い。そのことを再確認した所で、美玻はため息をひとつ落として再び手を動かし始めた。

やがて慣れて来ると、手を動かしながら、頭は別の事を考え始めていた。言うまでも無く、スズリのことだ。姿の見えないスズリを探す術はないものかと、あれやこれやと考えるが、そうそう妙案が浮かぶものでもない。何も思い付かないもどかしさに、つい大きなため息が出た。

「はあ・・・」

「大変そうだな」

いきなりそう声を掛けられて、美玻は弾かれたように顔を上げた。

「掃除が辛くて、もう泣きたい、って感じの顔してる」

「紅濤っ」

目の前にいたのは、赤毛の青年だった。

「何でこんな所にいるのっ？」

「何でって、また会いに来るって言ったじゃん」

「あたしたちの後を、こっそり付けて来たのね？」

「嫌だな、人間きの悪い。そんなまどろっこしいことしないって。美玻には、印をつけてあるから・・・」

紅濤が、美玻の首に下がっていた紅い玻璃玉を指で弾いた。

「その気になれば、こんな風にさ・・・」

「え・・・」

いきなり体を抱き寄せられた。と思った時にはもう、揃って空の上を漂っていた。遥か下方に、豆粒ほどの人が行き交う往来が見える。

——ええええ・・・

驚きが大きすぎて、悲鳴は声にもならない。

「ひとつ飛び、だから」

「・・・今更なんだけど・・・紅濤って。ホントに龍なのね・・・？」

「今更聞くか？」

紅濤が苦笑する。

「というか・・・たった今、感覚的に納得したのよ」

「ふうん。んで、少しは前向きに考えてくれた？」

「前向き？って・・・ええと、何だっけ？」

美玻がそう言うと、紅滯が思い切り傷ついたような顔になる。

「え、あの、何でっ？」

「・・・いや。素で忘れられてるとは思わなくて」

「あ・・・」

そこでようやく、記憶の中から、紅滯の用件というものが浮かび上がって来た。

——求婚のことだった。

「ごめん、今、思い出した。色々ごたごたしててそれどころじゃなくて、全然、考える暇なくて・・・」

「忘れてたんだあ・・・」

「いや、だって、ホントに・・・ごめんなさい」

「何？ごたごたって。また、何か面倒なこと？」

「って言うか・・・そうか、龍」

「え？」

「紅滯は龍なのよね？」

「だから、何、今更」

「龍の飾り太刀って、知ってる？」

「鱗を削って出来る太刀のこと？神力を消す力があるっていう？」

「そう、それ・・・それを持っている人を探す方法ってないのかしら？」

「そっか・・・手に入れた鱗で、太刀を作った訳か、スズリの奴は・・・今、この世界で、それを使う必要があるんだとすれば、鴻の皇帝をどうにかしようって、そういうこと？大胆なこと考えやがんなあ」

「止めたいの。あたしは、スズリにそんなことして欲しくなくて・・・でも、太刀を持っている人間は、姿を隠すことが出来るって・・・」

「確かにそうなんだけど、目の良い奴なら、見えないこともないよ」

「目の良い・・・」

「例えば、普通の遠見くらい見えれば、持ってる人間は分からなくても、太刀の放つ独特の光が見える」

「遠見・・・って、そんな・・・」

もう、この世界に遠見と呼べる人間など存在しない。

「美玻なら、見えるんじゃないの？」

「・・・だってあたしは、もう」

「ねえ、美玻。もし、僕がその目に見える様にしたらさ、君は僕の願いを叶えてくれる？」

「見える様に、なるの？」

「それは君の答え次第」

「お願い、あたしを遠見に戻して」

「あのさ。僕の願いが何か、聞かなくていいの？」

「命でも何でも、あげるから・・・お願い・・・スズリを助けて、紅滯」

懇願するように自分を見上げる美玻の目には、紅滯の姿の他には何も映ってはいない。それでも、美玻の心の内には、紅滯ではなく、スズリの姿がより大きく映っている。紅滯はやるせないといった風に、ため息を付く。

「・・・分かったよ。玻璃鏡を外して目を閉じて」

言われた通りにして目を閉じると、閉じた瞼をそっと指でなぞる気配がした。

「いいよ、開けても」

「・・・うん」

紅滯に言われて目を開くと、その目は遥か彼方まで見通せる遠見のものに戻っていた。

「見える・・・見えるわ。ありがとう、紅滯。これで・・・」

美玻が言い掛けた時、宮殿の方角で突然眩い光が弾けた。それに気付いた紅滯が、途端に難しい顔になる。

「何？今の・・・」

「行こう」

美玻の問いに応えないまま、紅滯は残光の残る一点を指して飛んだ。

紅濤は宮殿には下りずに、その彼方上空に留まっていた。それでも、遠見の目を取り戻した美玻には、下で何が起きているのかが手に取る様に分かった。身分の高そうな男が、広間の中央に胸から血を流して倒れている。その人物の周囲では、大勢の人間が取り乱し、慌てふためきながら右往左往している。

「・・・違う・・・わよね・・・」

胸がぎゅっと締めつけられるような息苦しさを感しながら美玻が呟く。しかし、返って来た言葉は、美玻が辛うじて繋ぎとめていた微かな希望を完全に打ち消すものだった。

「あれが、鴻の皇帝だ」

——ああ。

美玻の口から、絶望の吐息が漏れる。自分は、間に合わなかったのだ。失望に押し潰されそうになりながら、視線を巡らせる。

「・・・スズリは？スズリはどこ？」

「・・・太刀は、その役割を終えると、砕けて消えてしまうから、スズリはすでに姿を晒してしまっているだろうし・・・。とりあえず、どこかに身を潜めているんだろうけど、皇帝を殺した大罪人が、この宮殿の中から逃げおおせることは至難の技だと思うよ。いずれ捕まって、裁かれるまでもなく殺され・・・」

美玻が肩を震わせて泣いているのをに気づいて、紅濤は黙った。自分の腕の中で、ただ泣くばかりの少女に、紅濤は憮然とした表情になる。

「・・・それでも、救いたいのか？」

「できるのか？」

美玻の目に、一見してそうと分かる期待の色が浮かぶ。そのことが、紅濤の気持ちを逆なでる。

「どうしてだよ。あいつは、美玻の力を利用したくて、優しくしていただけだろう？美玻のことなんて、何とも思っていないんだぞ。なのに、なんでそこまで肩入れするんだ」

「・・・だって、スズリはあたしを助けてくれたんだもの」

「だから、それは、もの凄い下心があったからだろう？」

「それでもっ、あたしは、救われたもの。スズリに救って貰ったんだもの・・・」

「要するに、お前はスズリが好きってことなの？」

「・・・好き？・・・分からない。分からないけど、このままスズリがいなくなってしまうたら、あたしは嫌なんだもの」

「馬鹿だな、お前は。そういうのを好きって言うんだ」

「・・・そう・・・なの？」

美玻が呆けた顔をする。

「ああ、もうっ。・・・天然すぎてやんなる・・・ひとつ、意地悪なこと言わせてもらうけど」

「・・・？」

「美玻の周りで起こるごたごたはさ、美玻が僕の姿を返さないでいるせいなんだって自覚ある？」

「え・・・？」

「美玻の中に封じられている僕の力は、人間の世界に置いておくには強すぎてさ、すべからく凶事を引き起こす代物な訳。だから、スズリのことにしても、奴がそこまで突っ走っちゃったってというのは、少なからず美玻のせいなんだよ」

「あたしのせい・・・」

「だから、美玻がここにいる限り、事態は良くなりようがないっていうか・・・」

「どうすればいいの？」

——すんなりと、納得するのか、こいつは。こんなふざけた言い分を。ちょっとぐらい、反論とかしてみせろって言うんだよ。

素直というよりも、こいつは単なる阿呆なのではないか。そう思いつつ、そんな阿呆に振り回される自分も、大概なのだと思紅滯は自嘲する。

「前にも言ったけど、僕は美玻を食べたくはない。とは言っても、このまま君をここに置いておいたら、君は周りに迷惑を掛け続ける存在のままで、それじゃあ君も、気づまりだろうと思う訳。だから、僕と一緒に空の上に来て欲しい」

「空の上？」

「そこに、龍が住む郷があるんだ。どう？」

「そうすれば、スズリを助けられるの？」

「まあ・・・そういうことだね」

美玻の答えは聞くまでも無く、決まっていた。

こんな風に、半ば騙すようなことをして・・・それでも、自分は美玻という存在を手に入れたかったのだと、言い訳にもならないのは、自分が一番良く分かっていた。

——本当のことを知ったら、君はきっと怒るだろうな。それから、僕を軽蔑するだろうか・・・

必死に地上にスズリの姿を探す美玻とは反対に、紅滯は天を仰ぎ、心に溜まった澱を吐き出すように長いため息をついた。

夕暮を迎えた空は、紅く染まり始めていた。

津澄の囚われる牢獄は、宮殿の最奥の地下にあった。無論、通常の罪人の入る牢とは違う。鉄格子で外界と隔てられていることを除けば、そこは普通の部屋と変わらない座敷牢であった。

調度の類も、皇族が使うには地味なものであったが、庶民からすれば十分に贅沢なものが取り揃えられていた。壁面にしつらえられた書棚には、様々な書籍が並び、床から積み上げられた書類の山は、この部屋の主が、精力的に活動している証を示すものであった。

津澄は机に向かって、細かい数字の並ぶ報告書を読み、時折、訂正すべき場所を見つけては、

そこに数字や文字を書き入れていく。毎日、決まった時刻に、食事を運んでくる兵士と、やはり決まった時刻に書類の遣り取りに来る燥怜の他は、何人たりともこの場所を訪れることはなかった。

皇帝の影として働くようになってから、忙しく充実してはいたが、その統治能力の高さ故に、解決すべき重大事項は次第に数を減らして行き、日々の仕事は、決められた枠の中で、同じことを繰り返すばかりの、つまらないものになっていた。

平和というものは、確かに尊い。

しかし、この上もなく、退屈だ。

津澄は、いつしか自分の能力を持て余すようになっていた。それはつまり、自分の本体である皇帝の器が小さいから、影である自分が窮屈さを強いられる。そろそろ自分は、外に出るべきなのだ。この、鍵のかかった部屋から。

――それには鍵が必要だ。さて、それをどうするか。

久しぶりに、決められた事以外に頭を使った。それは、どこか心躍るような気持ちだった。

手始めに、自分と接点があり、その性格までも良く知り尽くしている弟、燥怜をつついてみた。燥怜は、案外簡単に津澄の挑発に乗った。その自尊心を煽ってやると、それならば、世界を変えられるか否か、賭けをしようではないかという話になった。世界を変えることなど出来はしないとした津澄に対し、ほんの些細なきっかけさえ与えてやれば、世界を変えることは出来ると燥怜は言った。

そう、この退屈な世界は変わるのだ。

私がそう望んだのだから、世界はその様に動く。

外の様子が、何だか騒がしい。そんなことを思いながらも、津澄の手は動き続けていた。しかし、いつもとは違う時間に人のやってきた気配に気づいて、その手が止まった。面倒くさそうに顔を上げると、格子の向こうに、見たことのない青年が佇んで、津澄を見ていた。

「・・・兄上」

その青年が、まるで万感の思いを込めたというような声で言った。

自分を兄と呼ぶからには、大勢いる兄弟のうちの誰かなのか。津澄は興味深そうに、青年を見据える。青年は格子に近寄ると、懐から鍵を取り出して、錠に差し入れようとする。

「お前は、何者か？何をしている？」

「私は涼璃にございます。兄上をお助けに参りました」

「涼璃・・・？」

名を頼りに、記憶の中から少年の姿を拾い上げる。

「ああ・・・涼璃か。見違えたぞ。そうか、お前が、私を解き放つ鍵か」

津澄が満足げな笑みを浮かべる。が、津澄のしている前で、涼璃の手がびくりと痙攣して鍵を取り落とした。見れば、涼璃の肩には矢が刺さっていた。

「その者は罪人ぞ。ここから出すことはならぬ」

牢の入り口に、息を切らせながら弓を構えている燥怜の姿があった。

「七兄様・・・」

涼璃が痛みに顔を歪めながら、燥怜を見る。

「何故です。津澄様は罪人などではありません。何の罪も犯してはおられない。それなのに、このような境遇に落とされて」

「涼璃、そなたは、仮にも大鴻国を築き上げた皇帝陛下の目が節穴であったと思うのか。津澄殿は罪を犯したからこそ、ここにおられるのだ」

「だから、その罪はっ・・・」

「濡れ衣などではない。良く聞けよ、涼璃、そなたには、血を分けた弟がいるのだぞ」

「一体何を・・・」

「その弟の母は、勿論そなたの亡くなられた母上だ。そして、この津澄こそが、その子の父。津澄の罪を問うに、これ以上の証が必要か？」

「・・・本当なのですか・・・津澄様・・・」

「津澄は、そなたの心聞の能力に興味を引かれたのだよ。そなたの母は、心聞者の多く住む郷の出だったからな。そもそも、陛下が、そなたの母を妃にしたのも、その能力に興味を持たれたからだ。涼璃、彼がお前を殊更に可愛がっていたのは、その力を自分の道具として使いたいと考えたからだ。だが、そなたの母君はそれを警戒して、陛下に彼を諫めて頂こうとなさった。それが引き金になったのだろう。母君の口を封じ、更に心聞の能力を持つ子を自分のものにする方法を、彼は思い付き実行した。そうなのでしょう？津澄殿」

「見て来たように言う」

津澄が不敵な笑みを浮かべる。

「津澄様・・・違うとおっしゃって下さい・・・どうか・・・」

でなければ、何もかも――自分を支えて来た全てが崩壊する。

救いを求めるように、涼璃はその手を牢の中に差し入れる。津澄は興味なさそうにその手を一瞥し、軽く握った。刹那、大きな絶望が涼璃の中に流れ込む。涼璃は魂を抜かれたように、その場に座り込んだ。

「涼璃、そなたのこれまでの働きに免じて、この場は見逃してやる。どこへなりと、逃げ延びるがよい。さあ、行くが良い。さあ、逃げよ」

燥怜の言葉に操られるように、涼璃はふらりと立ち上がり、その場を立ち去っていく。

「とんだ、兄上様だな。外には、皇帝を暗殺した下手人を兵どもが血眼で探しておるのだろうに・・・それで、お前は全てを手に入れて、皇帝にでもなるか、燥怜」

「私は、自分の器の大きさぐらい、弁えておりますよ、兄上。新たな玉座には、現皇太子殿下がお座りになられます」

「あのような凡庸な男がか」

津澄が失笑を漏らす。だが、それを見据えた燥怜の目は冷徹に光っていた。

「兄上、一つだけ申し上げておきます」

「・・・何だ？」

「格子の外に立つ者と内に立つ者とは、立場が違うのだ、ということがお分かりですか。父上のご威光を失った今、あなたは今度こそ、間違いなく罪人として裁かれることになるでしょう」

「この私がいなくて、この国が立ち行くと思うのか。私がいたからこそ、この国はこれ程までの栄華を誇る事が出来ていたのだぞ」

「そうかも知れません。しかし、新しい陛下は、もはやあなたの力を必要とはされません」

「愚かな」

津澄が吐き捨てるように言う。

燥怜は、それを冷やかな目で見据えながら続けた。

「あなたは、停滞する世界に退屈していたのでしょうか。それで、世界を変えてみたかった」

「お前・・・」

――悔っていたのは、自分の方だったのか。

格子の内と外では、時の流れ方が違うのだと。これは、そのことに気付かなかったが故の失態なのか。

――この、致命的な失態。

自分の足元にも及ばないと思っていた弟に、いつの間にか自分は追い付かれていたのだと、気づけなかったのだ。兄という自尊心故に。

「お望み通りに、世界は変わりましたよ。そう、あなたを必要としない世界に」

踵を返し、燥怜は牢を後にする。

歪んだ国の象徴であった兄に、もう自分が会う事はない。瑕疵の生じた部分は折りたたまれて、何事もなかったかのように、この先も国は続いて行くのだ。  
――そう、変わったのは、罪を犯した者たちの世界だけだ。

まるで、野兎が獵犬に追い立てられているようだ。

紅濤はふと、そんなことを思った。

暮れかけた橙色の光の中を、影絵を思わせる長い影が地面を踊り狂う。たった一つの影を追って、兵士の数はどこから湧いてくるのかと思う程、際限なく増えていく。放たれる数多の矢の下を掻い潜るようにして、野兎はよろめきながらも、それでも足を止めない。

――もうあれでは、意識などあってないようなものだろう。

全身に矢を受け、傷だらけになりながら、それでも逃げ続けるのは、生物の本能としての生への執着からなのか。

「スズリっ」

その様子に気づいた美玻が、小さな悲鳴のような声を上げた。

それを合図に、紅濤は空を飛んだ。急降下して、傷だらけの野兎を拾い上げる。突如巻き起こった旋風に、そこにいた者達は野分けが通ったのだと思ったことだろう。しかもその途端に、目の前の獲物が消え失せている訳だから、神隠しだとも思うだろうか。そして、降下したよりもずっと速い速度で、荷物を二つほど抱えた紅濤は天高くに舞い上がる。登り切った極みで、刹那綺麗な夕陽を愛でて、紅濤はすくとんと地上に着地した。

「ここは・・・」

美玻が驚いたような声を上げる。

「うん。比奈の遠見の頂」

「スズリはっ？」

紅濤が意識のないスズリを地面に横たえると、美玻はそこに寄り添うようにして、心配そうにスズリの顔を覗きこんだ。

「・・・死なないよね・・・助かるわよね？」

懇願するように自分を見上げる美玻の瞳から、紅濤は顔を反らす。

「・・・五分五分だろうな。今のスズリからは、この世に縋りつこうという気概が感じられない。多分もう・・・こいつの中には生きていたいと思う理由が何もないのだろう」

「そんな・・・」

たったひとつ、守りたいと思ったものの為に、他の全てを犠牲にして全身全霊を傾けた。

――その結末があれじゃなあ・・・

守る価値などなかった。そんなものの為に、スズリがこれまでに犠牲にしてきたものの事を思えば、世を憐んで当然といったところだろう。

「スズリっ！スズリ、目を開けてよ・・・お願い・・・だから・・・」

美玻が悲痛な声を上げながら、スズリの体に縋りつく。

――お願い・・・生きてスズリ・・・お願いだから・・・生きて・・・

「・・・お・・・ねがい・・・」

涙でぐしょぐしょになった顔と声が、いつしか紅濤に向けられていた。

「助けて・・・スズリを助けてよ・・・助けてくれるって言ったじゃない・・・お願い・・・紅濤」

その必死さに、美玻のスズリへの強い思いを見せつけられる。それは勿論、自分には面白くないことしきりであり・・・つまりそれは――

「・・・ずいぶんと傲慢で残酷な願いだよね、それって・・・」

「・・・」

「人の生き死にの話さ、当人の望みを無視して勝手に決めるってことなんだぞ。分かっているのか」

どうしようもなく突き放したような言い方になったのは、つまり、それは――

「・・・だって。スズリが死んだら、あたしはきっと悲しいんだもの。もう悲しいのは嫌・・・嫌なんだもの。これ以上、人の死を見るのはもう嫌。一人で置いて行かれるのは・・・嫌」

止めどなく流れ落ちていく涙を、ただただ呆然と見据えている。どこかで心が軋む音を聞きながら。

「スズリが助からないのなら、今ここで、あたしを食べてよ。そして全てを終わらせてよ、紅滯っ」

「・・・分かったよ」

スズリが死ねば、美玻は間違いなくこの先ずっと泣き続けるだろう。

そして自分は、そんな彼女をずっと見続けることになるのだ。

――ありえない。そんなのちっとも嬉しくないし。

「・・・っ畜生」

――運命なんて糞くらえだ。

紅滯は膝を付き、右の掌を横たわるスズリの心の臓の上にかざす。

「約束。忘れんなよな」

半ばヤケクソ気味に、吐き捨てるように言う。スズリの為でも美玻の為でもない。間違いなくこれは、自分の為。美玻を手に入れる為だ。そう言い聞かせる。美玻の笑顔を取り戻す為・・・  
――好きって感情は・・・ホント厄介だ。

「・・・助かる？」

心配そうに身を寄せてきた美玻の体温を感じて、紅滯の体も熱を帯びる。と同時に鼓動が早まったのは恐らく、力を使って気分が高揚しているからでは・・・ない。

「誰に向かって言ってる？僕が助けるって言ったら、助かるに決まってるだろうが」

自分は動揺している。あり得ない程。

――ホント厄介・・・

一体自分は、どこまで奪われればいいのかと思う。

横目でそっと様子を伺うと、美玻はスズリの手を握り締めたまま、心配そうにその顔を見つめている。そんな美玻の思いの深さを見せつけられれば、胸にどうしようもないせつなさが込み上げて、慌てて視線を戻す。

――集中、だ。

嫌な仕事は、さっさと終わらせる。紅滯は自分にそう言い聞かせた。やがて、スズリの呼吸が

落ち着いて来ると、顔色も今にも死にそうな所から、ただ眠っているような辺りにまで良くなった。

「・・・ふう」

安堵のため息を付いて紅滯が手を引っ込めた所で、

「・・・ありがとう」

と、耳元に囁くような声が届いた。刹那、息が止まった。

——バカやろう・・・殺す気か。

動揺を押し殺して応えを返す。

「・・・お礼なんて・・・いらぬ。交換条件だったから助けただけだ」

「それでも、ありがとう」

声に釣られてつい横を向いた。先刻まで思いつめていた顔は、随分と柔らかくなって穏やかな表情になっていた。自分を真っ直ぐに見ている瞳が、夕陽を受けて玻璃のように輝きを宿す。その美しさに、紅滯は引き込まれそうになって、慌てて目を反らした。

「・・・これだけ霊力を注ぎこんでおけば、間違っても当分死ぬことはない。それで満足？」

「うん」

弱々しいながらも、ようやく笑顔らしきものが見えた。

「・・・それじゃ、今度は、美玻が僕の願いを叶えてくれる番だけど・・・いい？」

「・・・うん」

美玻が笑みを浮かべたまま立ち上がる。それから、どこか名残惜しそうにスズリを見据えた後で、紅滯に手を差し出した。

「・・・本当にいいの？」

「うん、いいわよ。そういう約束じゃない」

——約束。

「そっか・・・なら」

わずかな躊躇いを払いのけて、その手を取ると、紅滯は美玻を連れて茜天の空へと舞い上がった。

(スズリっ！スズリ、目を開けてよ・・・お願い・・・だから・・・)

遠い場所で、声が聞こえた。

——この声・・・美玻か。

(お願い生きて・・・スズリ・・・お願いだから・・・生きて・・・)

懐かしい人の声には、涙の色が混ざっていた。

——ああ、この子は。また泣いているのか。

今度は何が哀しくて、そんな辛そうな声で泣くのだ。相変わらず仕様の無い娘だ。ひとりで放り出したりしたら、この世の末までも泣き続けるのではないか。何も無い闇の中で、取り留めもなくそんなことを思った。全く、そんな気がかりなことがあっては・・・そうそう簡単に死ねないではないか。

(・・・わ・・・たしは・・・大丈夫・・・・・・だから・・・)

どうしてだか、そんな台詞が出た。

(本当に?)

即座に念を押された。そう聞かれると、更に答えねばならなくなった。

(・・・ああ。・・・だからもう・・・泣くな・・・)

と——

——ああ、美玻は生きて・・・いてくれたのか・・・

そう思った途端、闇の中に細い光が差しかけたような気がした。氷の様に硬直していた心に何か温かいモノが触れた。そんな感覚に止めようもなく涙が込み上げた。

——そうか・・・無事だったのか・・・良かつ・・・た・・・

自分は取り返ししようもない大罪を犯した。後は滅ぶだけの身の上に、もう何も望むことなどないと思っていた。それなのに、自分が殺したも同然の娘が、生き延びてくれていたことに、救われた気がした。勿論それで罪が赦されるなどとは思っていない。それでも、ただ死へ向かっていた足はそこで歩みを止めた。

自分は、生きながらえてもいいのか。

あの娘の為に。

そんな理由を付けて、生きながらえても——

「・・・美玻」

問うように、その口から掠れた声が漏れた。だが、それに返されたのは、少女の声ではなく、鋭い刃を含んだ冷徹な声だった。

「自分が殺した娘の名を口にすると、お前にも少しぐらいは贖罪の念というものが残っているのか」

うっすらと開く事のできた目は、怒気を帯びてそこに仁王立ちになっている青年の姿を捉え

た。

「・・洸由・・か。どうして・・お前がここに・・」

「どうして？それはこちらの台詞だ。ここは果て見の頂なのだぞ」

龍探索の不首尾の後、洸由は失意のままひとり帰路に着くしかなかった。数か月掛かって、ようやくこの頂に帰りついてみれば、全ての元凶ともいうべきこの男が、まるで針鼠のような無様な様でこんな場所に転がってはいようとは。

――一体これは、どういう運命の悪戯か。

溜めこんでいた鬱憤を晴らすがいいとばかりに、自分の目の前にこの男は現れたのだ。

「・・果て見・・？・・何でそんなことに・・なっている・・」

「そなたは、罪を購うために、ここへ戻されたのではないのか」

「・・罪？」

「ああ、そうだ。遠見の娘を殺し、龍の鱗を盗んだ罪だ」

「・・殺した・・？」

――こいつは今、私が美玻を殺したと・・そう言ったのか？

ならばあれは・・あの声は幻であったのか。

闇に差した光は・・心に触れた温もりは・・全て、絶望に押しつぶされそうになった心がもがいた末に見せた、願望。叶うはずもない・・願い。

「そなたは、龍の鱗を手に入れるために、美玻を龍に喰わせようとしたのであろうが」

――ああ、そうだ。

この私が、美玻を・・殺した。

「・・その為に、沖斗までが犠牲になったのだ。あげく、そなたは鱗を持ち去り姿をくらました。良く聞けよ。此度の探索が上手くいかなかった責は、全てそなたが負うべきものぞ」

美玻は断崖から落ちて、激流に飲まれた。不意に、スズリの脳裏にその時の光景がはっきりと蘇る。あの高さから落ちて、助かる筈などないのに。

――随分と都合の良い夢を見ていた。

「・・何が可笑しい」

いつの間にか口元に浮かんでいた。その笑みを見咎めた洸由の鋭い声が飛ぶ。

「分かっているのか。そなたは、この私に殺されるために戻って来たのだぞ」

――もう何も・・自分には何も残っていないのだ。今更生きながらえる理由もないのだから。好きにすればいい。もうどうでもいい。

そんなことを思いながら両の目を閉じた。するとそこに生じた闇に、世界はみるみる飲みこまれていく。

『お願い生きて・・スズリ・・お願いだから・・生きて・・』

幻聴がこだまを繰り返し、闇の中に又、か細い光を差しかける。  
だが、そこにはもう闇を覆す程の力強さはなかった。

## 第8章 姿絵

---

今日も美玻は、桃の大樹へ登っているのか。

そんなことを思いながら、紅濤が郷の入り口にそびえる桃の木の上へやって来て、その梢を見上げると、太い枝の上、いつもの場所に美玻は立ち、その目はやはり地上を見下ろしていた。

美玻が龍の郷に来てから、そろそろ一年が経とうとしていた。

いつの頃からか、美玻はここへ来て、地上を見ていることが多くなった。紅濤は軽く地面を蹴り、美玻のいる枝へと飛びあがった。

「下が恋しい・・・？」

そう声を掛けると、美玻が穏やかに笑って首を振った。

「・・・ただね、ほら・・・ああやって、あちこちから黒い煙が上がってくるでしょう？それが、ちっとも収まらないなあって。そう思って。ただ見ているだけで、あたしにはどうしようもないのに、どうしても気になって」

紅濤が目を落とすと、成程、地上から幾本も黒い筋が立ち上っているのが見えた。

鴻の皇帝の崩御がきっかけとなって、下では、各地で戦が始まった。鴻の新たな皇帝に、かつて程の力が無いと見て取った周辺の国が、新たな秩序の元で、自分たちの勢力を少しでも大きくしようと躍起になっているのだ。落ち着くには、恐らくもう少し掛かる。

「・・・僕はさ、そんな余計なものまで目にしてがっかりさせる為に、美玻の目を治した訳じゃないんだけどなあ・・・」

紅濤が零すと、美玻が慌てて補足する。

「え・・・ああ、大丈夫、そんなにがっかりばかりしている訳でもないのよ。ここからは、綺麗なものも沢山見えるし・・・」

美玻の目が、無意識に何かを探すように、地上をぐるり一巡した。

そんな美玻を見詰める紅濤の瞳に、せつない色が浮かぶ。

――何か。それが、何であるのか、彼女自身、自覚はしていないのだ。

美玻の瞳はいつも、スズリの姿を探している。

紅濤には分かる。だって、紅濤自身がそうだからだ。

自分はいつだって、美玻の姿を探しているから。

「あの、さ、美玻。・・・ごめん」

「・・・？なあに、いきなり」

「うん・・・その。怒らないで聞いて欲しいんだけど・・・前に、美玻がそこにいるから、周りの人が災厄に巻き込まれる、みたいなこと言ったじゃん？」

「え・・・」

「あれ、嘘だからっ」

「ん？」

「酷いこと言って、ホントごめん。そこまで言わないと、美玻はきつとここには来てくれないって思って、だから・・・」

紅滯がそこまで言うと、美玻がくすりと笑みを零した。

「やだ、紅滯。あたしに、そんな酷いこと言ったの？」

「へ？・・・覚えてないの？」

「というか・・・スズリを助けられるなら、どんな条件だって、飲むつもりだったから、あの時、ただ言われるままに、うんうんと頷いた覚えならあるわ・・・何だ。ここに来てから、紅滯が何となく遠慮がちだったのは、そんな負い目があったからなのね」

――・・・そればかりでもないけど。

「で？心配事がなくなったら、今度こそ、心置きなく、あたしを食べることができる？」

「だから、僕は、美玻を食べるのは・・・」

「だって、あたしを食べなきゃ、紅滯はいつまでも龍の体を取り戻せないんでしょう？そんなことで良いの？」

「美玻・・・」

「遠慮しなくていいのよ。あなたが龍の体を失ったのは、間違いなく、あたしがあなたにガン付けたせいなんですもの」

「美玻、君は・・・何も分かってないよ」

紅滯が怒ったように言って、木の上から飛び降りた。

「ちょっと、紅・・・」

紅滯の名を呼び掛けた声は、その半ばで悲鳴に変わった。足を踏み外して、美玻が落ちて来る。紅滯は慌てて腕を広げると、彼女の小柄な体を抱き止めた。

「ご、ごめんなさい・・・」

「本当に・・・」

「え？」

「食べてもいいの？」

言われて見た紅滯の目は、紅玉のように輝いて、それはどこか人外の気配を漂わせていた。

その瞳に捕らえられたら、目を反らせない。子供の時に感じたのと同じ畏怖が、ただ美玻を頷かせた。

「・・・んじゃ、遠慮なく、頂きます」

宣言するようにそう言って、紅滯が、美玻に顔を寄せる。

「目を閉じて・・・」

言われるままに、美玻は目を閉じた。

視界を遮られた途端に、間近に感じる紅滯の息遣いに、思わず身を固くする。一一と、ふわりと、柔らかい感触が、唇に下りた。

「・・・え？」

思わず目を開けた時には、紅滯はもう、美玻をそこに立たせていた。

「覚えてる？前に、猫の格好をしていた時にさ、僕、食べられそうになって、それを美玻が助けてくれたじゃない？」

「ああ・・・そんなこともあったかしら」

「命の恩人は、流石に食べられないというか・・・」

「そう・・・なの・・・？」

美玻がぎょとんとした顔をする。そんな美玻の様子に、紅滯は少し困ったような顔で笑った。

言うなればこの娘は、自分の人生というものをあの男の命と引き換えにしてしまったが為に、そこにもう何の希望も持っていないのだ。もっと言うなら、持つてはいけないと思っている。その思いこみのせいで、少しずつ心が無に浸食され始めているというのに、そのことに気づきもしないのだ。

——ここの空気は、人には薄すぎるんだよ。

無二の友に言われた言葉が身に染みた。

好きだから大事にしまって置きたかった。ただ傍にいて、その顔を見ていられるだけで良かった。だけど、鳥籠に入れてしまった時から、彼女は緩やかな死を迎えるためだけに生きる、そんな存在になってしまった。どんなに言葉を尽くしても、自分の言葉は——心は、今の彼女には届かない。

——そんな風だから。

「本当は、好きだから食べられないんだけどな」

「もう、また冗談ばかり」

ほおら、ね。ちっとも本気になんかしない。

——っくしょう・・・これ、気持ちの行き場、完璧に失われてるっていうか～～

正直、スズリのことでも心が一杯の美玻を食べても、自分には苦いだけ。そう思えば、やにわに決心というものが着いた。

「ま、いっか、別に。もう少しぐらい」

「え？」

龍の体に戻れなくても。人間の一生なんて、自分たちにしてみれば、ほんの一時のことなのだから。

——僕なら待てる。ていうか、そんだけ惚れぬいてる訳だから、さ。

『また、会いに行くから』

不意に紅濤の音が、遠くに聞こえた。

『気が向いたら、また、ね・・・』

「紅濤・・・？」

美玻の周りに霧が巻いて、視界が白一色になる。

驚いて瞬きをした時にはもう、目の前に見覚えのある眺望の広がる頂に佇んでいた。

「遠見の頂・・・あたし、戻って来たの？」

見上げた空は、深い青色を帯びていた。そこにはただ、白い雲が流れ行くばかりで、龍の気配などどこにもなかった。

辺りを見回して、美玻はすぐに見え方が前と違うことに気づいた。玻璃を必要とする程ではないが、遠見ほどには見えない。多分、これが普通の人間の見え方なのだろう。

「そこにおるのは、何者か？」

美玻が感慨にふけりながら、懐かしい景色を眺めていると、いきなり背後から誰何を受けた。

「こんな所で何をしている」

見れば、十人ほどの兵士が、槍を構えてこちらを見ていた。

――何で、こんな辺鄙な所に、こんな人たちがいるのよ。

地上では、頻発する戦のせいで、村が焼かれたり略奪を受けたりということがあちこちで起こっていると紅滯は言っていた。この兵士達も、そんな目的でうろついているのだろうか。美玻は警戒心を抱く。

――それにしたって、こんな山の中で一体何を・・

そこへ、凜とした女性の声が聞こえた。

「槍を収めなさい」

その声のままに、兵士達は槍を下げると、素早く左右に分かれて跪いた。

「波紅様・・」

そこに立っていたのは、比奈の王女、波紅だった。美玻は慌ててその場に跪いて頭を垂れる。

「何かと思えば・・遠見の娘ではないの。龍の谷で神隠しにあったのだと聞いていたけれど、この様な場所で会おうとは。全く面妖なことだわ・・ああ、構わないから、顔を上げなさい」

「・・はい」

美玻はおずおずと顔を上げて、波紅を見上げた。元々妖艶な雰囲気があった波紅であったが、その美しさには更に磨きが掛かり、同じ女である美玻でさえも、見とれてしまう程だ。

促されて、恐縮しながら傍の岩に並んで座ると、すぐ横で波紅の言う。

「懐かしいわね・・思えば、お前が城に参ってから、色々なことが変わり始めた。そんな気がするわ」

それは、美玻が災厄を持ちこんだということなのだろうか。美玻は身を固くする。

紅滯は違うと言ってくれたが、自分に関わった人たちに、災いが降りかかった。そんな思いは、まだ美玻の中に燻っていた。だが、美玻が思う程、波紅はそんなことは気にもしていないという様に、話はそこから離れていく。

「ここは、比奈の国が一番美しく見える場所なのだと、そう聞いたものだから、故郷の見収めにと、そう思ってわざわざ来てみたのよ」

「・・見収め・・？」

「ああ、私は十季に嫁ぐのよ。父上の急なご逝去で、この一年喪に服していたから、予定が遅れたけど」

鴻に新しい皇帝が立って、世界は良くも悪くも変わった。

新皇帝が龍の鱗という希物にさほどの興味を示さなかった為に、七国の中で比奈の序列は急落した。新しい皇帝の嗜好に会う希物探しに周辺国との戦と、比奈には次々に困難が押し寄せた。その最中、比奈王は病に倒れ、あっけなく逝去し、今は、王太子であった長子が新たな王となった。

波紅は簡単にそんな説明をした。

「それにしても、遠見の聖地だとも言われるこの場所には、やはり、何やら靈気が漂っているのかしらね。洗由兄さまが、同じように神隠しにあったというスズリを拾ったのも、この山の頂きだったというし・・・」

――スズリ。

その名前に、美玻は思わず腰を浮かせる。

「・・・スズリはっ・・・無事だったのでしょうか？」

「ええ。無数に矢傷を受けていて、到底助からないと思ったものだけれど、不思議と深手となる傷はなくて。傷の直りも思いの外、早くてね・・・けれど、まあ・・・探索の過酷さ故か、まるで人が変わったように、しばらく腑抜けたままで・・・ところでお前、気になるのは、スズリのことだけなの？」

波紅にからかうように言われて、付け加えるように訊く。

「えっ・・・あ、その洗由様の方は・・・」

洗由は、沖斗の死は確認したものの、他の二人についてはその生死を確かめる術もなく、失意のまま、ひとり帰路に付いた。満身創痍になりながらも、ようやくこの頂まで辿り着いた所で、傷だらけのスズリを見つけ、それを担いで山を下り、王城へ帰り着いたのだという。

「お前も、沖斗のことは・・・」

「はい・・・」

「そうか。もう龍の探索が行われることもないのであろうにな。最後の探索で・・・誠に残念なことをした」

波紅は、命を落とした沖斗を悼むように、目を閉じて天を仰いだ。美玻もしばし、その面影を思い、黙とうを捧げた。しばし訪れた静寂に、風の音が耳を掠める。遠くに鳥のさえずりが聞こえた。

「・・・スズリは」

波紅がふと思い出したように、再びその名を口にした。

「落ちているのを拾ったのは、確かに洸由兄さまだったけど、元は私のものだから・・・ちゃんと印だって付けてあるのだからと、半ば強引にあれを引き取って・・・」

常ならば、死んでいても可笑しくない程の傷で、直りが早かったとはいえ、目を覚ますまでに十日ほどかかり、起き上がれるようになるまでに、また更に半月程の日数を要したという。

「波紅様が御自らご看病を？」

「あたりまえじゃないの。あれは、私の、最上級のお気に入りなのよ」

「お気に入り・・・」

「そう。あのように美しいものを生み出す手は、世の七宝にも比する宝だと、お前はそうは思わなくて？」

「・・・はあ」

それはスズリが、というよりスズリの腕が、という解釈でいいのか。美玻は首を傾げる。波紅の感性は、どうやら美玻の理解の範囲を超えるようだ。要するに、良く分からない。少しの逡巡の後にそういう結論に至る。

「それなのに、目を覚ましたがいいが、目は虚ろで声を掛けても全く反応もせずで。まるで魂が抜け落ちてしまったようなありさまで、それはそれは気を揉まされたわ」

体の傷が完全に癒えても、随分と長い間、何をするでもなく日々ぼんやりと過ごすばかりであったのだという。話に聞くだけで、美玻は胸のつぶれる思いがした。それを傍で見守っていた波紅の心痛はいかばかりであったかと思う。

「それで、スズリは・・・」

心配そうに問いかけた美玻に、波紅が視線を向けて微笑んだ。

「そなたは、スズリを好いておるのだな」

言われた瞬間に、胸が苦しくなった。そして美玻は、観念したように頷いた。

「・・・はい」

「大丈夫。生きているし、きっと元気になっていることだろう。この私の手をあれ程煩わせたのだから、そうそう命を粗末になど出来ない筈だからな」

波紅の言葉によれば、それから半年ほど後。波紅の輿入れが正式に決まり、それを機に、彼女は自身の姿絵をスズリに描くように命じた。

初めはやはり、やる気のない風であったが、無理やりに絵筆を持たせると、本当にひと筆、ふた筆から始まって、少しずつスズリは手を動かすようになった。相変わらず人と言葉を交わすことはなかったものの、少し経つと、スズリは日がな一日絵を描くようになった。無心に、絵筆を動かす。ただ、そのことだけが、自分の全てであるかのように、寝食の他は絵筆を握り、描き続けた――

「そうして、気が付いてみれば、いつの間にか城から姿を消していたのだけど」

「・・・そうですか」

「まあ、あれは絵師だから。きっとまた、美しいものでも描きたくなって、どこかへ旅に出たの  
だろう」

「ええ、そうですね」

きっと、どこかで絵を描いている。そう、信じよう。

「ああ・・・そう言えば、姿を消す少し前に、そなたの話をしたな」

――あたしの？

「同じように神隠しに遭ったお前がこうして無事であるのに、どうしてあの娘だけが死んだと、  
そう決めつけるのかと」

波紅がそう言うと、スズリは意外そうな顔をして、それから何かを思い出した様にふと口元を  
綻ばせたという。

「その時、初めて生气のある顔をした。それを見て、もう大丈夫だと・・・そう、か・・・今思え  
ば、あの者はそなたを探しに行ったのやも知れぬな」

「え・・・」

「きっとそうだ」

波紅が、戸惑う表情を浮かべた美玻に向かって笑顔で言い切る。そのたった一言が、美玻の心  
をじんわりと温める。と、胸の奥から何かが込み上げて来て、目頭が熱くなった。

「どうした？」

「いえ・・・大丈夫です。何だか安心したのかも知れません」

「そうか。お前は、これからどうする？」

「あたしは・・・そう、鴻へ行こうと思います。掃き掃除を、途中で放り出して来てしまったか  
ら・・・」

「掃き掃除・・・？」

波紅が不思議そうな顔をする。

「はい」

美玻が笑うと、波紅も笑顔を見せた。

「そう言えば、洸由兄さまは、比奈の特使として鴻へ参っているから。もし、困ったことがあれ  
ば、頼っていくと良いわ」

恐らく波紅は、洸由と自分の経緯を知らないのだろう。美玻としては、

「はあ・・・」

と、すこし間の抜けた返事を返すことしか出来ない。

願わくば、都の人ごみでひょっこり出会わないことを祈るばかりである。

「それから、もしどこかでスズリに会うことがあったら・・・」

ほんのついで。そんな軽い風情で、波紅が言った。

「私は、今度は十季にいるから、もし来るのなら間違えずにそちらへ顔を出すようにとね」

当たり前のように言われて、美玻は思わず笑みを浮かべた。

本心を押し隠しながら、人との関わりを断ち切るように生きていた筈なのに、それでも世界は  
彼をひとりにはしない。その面影を思い浮かべて懐かしく微笑む者が、きっと自分たちの他にも

いることだろう。

いつになるかは分からないけれど、いつか。

託された言霊が、自分とスズリをまた引き合わせてくれる。

そんな気がした。

「ご伝言、確かに承りました」

美玻は丁寧に頭を下げた。

店の前に、箒を手に道を掃いている背中を見つけた。その箒は、間違いなく自分が道端に放り出して行ったものに違いない。

「あのう・・・」

おずおずと声を掛けると、その人物、浪瀬（シロセ）は勢いよく振り返り、美玻に怒ったような視線を向けた。そして、当然のごとく一喝される。

「お前は、掃除も満足に出来ないのかっ」

「申し訳ありませんでしたっ」

「・・・掃き掃除がお嫌で、たった一日で箒をほっぽり出して逃げ出した娘さんが、今更何の御用がおありなのでしょうね？」

言葉遣いが丁寧になった分、怒りが増大したと見ていいのだろう。

「本当に御免なさい。あたし、心を入れ替えて今度こそ、きっときちんとやり遂げますから、掃き掃除っ！」

体が二つに折れるぐらいの勢いで、美玻は頭を下げる。と、

「・・・いきなり姿を消したりして、旦那様が、どんなにご心配なさったと思うんだっ。全く、お前は・・・一年近くも、便りの一つも寄越さないで。まずは、旦那様に顔を見せに行け。それから、お前の仕事は、掃き掃除ではなく、倉庫の在庫の管理だそうだから。手順を説明するから、仕度が出来たら来い」

「・・・分かりました」

答えながら、店の中から小僧が手招きをしているのに気づく。どうやらその小僧が、鴿帆の所まで案内してくれるらしい。

その道々、

「浪瀬さんはですねえ・・・」

小僧が面白がって、何事か話し始める。

「それはそれは、美玻さんのことを心配なさっておいでだったんですよ。暇を見つけては、毎日毎日、箒片手に往来に出て、その辺にあなたの姿が見えないかと探しておいでで・・・」

「え・・・そうなの？」

言えば、旦那様がご心配なさっているからだ、そう言うのだろうが・・・。

まあ、根は良い人の様だ。彼の商人的思考に慣れるには、時間が掛かりそうだが。――というか・・・あたしの周りって、どうして、こう怒りっぽい人が多いのかしら。

そんなことを漠然と思いながら、ふと、自分はここにいることを許されたのだと気付く。

瞬間、美玻の心には感謝の思いが溢れた。

「・・・お姉さん、どうかした？」

笑い話をしたつもりが、思いがけず美玻が涙ぐんだことに、小僧が困惑したように訊く。

「ううん、何でもないよ」

「・・・あのさ、浪瀬さんは、よく怒るけど、それは僕たちがへました時だけで、根は良い人だから、大丈夫だよ？」

「うん、知ってるよ」

美玻が笑顔を見せると、小僧が安心したように笑った。

——大丈夫。あたしはもう、大丈夫だから。ねえ、あなたは？あなたはもう・・・大丈夫？

自分にその護符を与えてくれた人は、やはりその同じ護符を心に貼り付けて、どこかで元気にやっているのだろうか。

「浪瀬さあん、この包みは、どこに積めばいいんですかぁー？」

大きな声を出すと、倉庫の奥の方から、浪瀬の声が途切れ途切れに返って来る。

「それは・・・夕李（ユイ）から仕入れた薬草ですから・・・検品してみてください・・・」

「検品ってえー？」

「包みをっ・・・ひとつ開いて、中身を確認・・・ですっ」

「わかり、ましたっ」

美玻はがさごそと音を立てながら、商品を包んでいる紙を丁寧に開いていく。包みを開けると、ふわりと甘い花の香りが立った。中には、真紅の花弁を乾燥させて縮れた状態にしたものが入っていた。

「きれいな紅色・・・もしかして、これが玫瑰かしら」

何だか懐かしさを覚えて、しみじみと見入る。

「あれ・・・なんだろう、これ」

その花弁の下の紙に、何か落書きのようなものが描き込まれている。美玻は興味を引かれて、そっと花弁の山を崩して紙の隅へ寄せていく。寄せながら、その手が思わず止まった。

——これ・・・落書きなんかじゃない。

そこには見事な絵が描かれている。

誰かの肖像のようだと思いながら、注意深く花弁を掻き分ける。すると、円を描くように丸く避けた花弁の輪の中に、少女の顔が現れた。

「・・・これ・・・あたし・・・？」

思わず声が出た。そして、その瞬間に確信した。

——スズリ。

これを描いたのは、きっとスズリだ。

「何だ・・・元気でやってるんじゃないの・・・よかつ・・・た・・・」

止めようもなく涙が込み上げて来て、美玻は場所も憚らず声を上げて泣いた。

それから、驚いた浪瀬が駆け付けて来る途中で、荷物に躓いて捻挫をする羽目になった。そのせいで、ちょっとした騒ぎになり、結果、その絵のことは鴿帆の耳にも入った。

そして——

夕李へ向かう街道を、荷を積んだ馬車が行く。手綱を取っているのは、美玻だ。

「そろそろ代わろうか・・・？」

荷台の後ろから、鴿帆が声を掛けた。

「まだ、平気です。あの・・・本当に、店を放って来ちゃって良かったんですか？浪瀬さん、足が大変なのに・・・」

「なあに、座ってたって、采配は取れるし、心配ねえよ。それより、戦が終わったとはいえ、北の方はまだごたごたしてるしな。娘のひとり旅なんかさせらんねえよ。危なっかしくて」

「わがまま言って、済みません、本当に」

「本当は、そろそろ旅が恋しくなってきたとこだ。何しろ、浪瀬が危ない危ないと、鴻から外に出してくれなかったからよお。それに、一応は仕事、だしな」

鴿帆が、積み込んだ荷物をぱんぱんと叩く。

「そうですね、仕事ですね、仕事」

美玻が夕季に行くと言い出した時、初めは反対していた浪瀬だが、その決意が固いと知るや、いつの間にかそちら方面で商いする為の荷をまとめ上げていた。本当に頭が下がるばかりだ。ただ一枚の絵だけを手掛かりに、探しだせるかどうかは分からない。それでも、美玻は旅立つことを躊躇わなかった。

スズリがずっと出会いたいと願っていた、たった一人の人間に、自分になりたいから。

だから、再び会うことができたなら、嬉しいことも哀しいことも、抱え込んだこと全て、吐き出して話して欲しいと言おう—— そう心に決めていた。

スズリを探す旅は、雲を掴むようなものになるのだと思っていた美玻だったが、鴿帆曰く「俺たちは天を味方につけている」という、どうにも都合のよい言葉の通りに、数か月後、夕季に到着して程なく、彼らはあっけなくスズリ of 消息を知る事が出来た。鴿帆の能力について知らない美玻には、まさしく天を味方に・・・あるいは紅滯が何らかの力を貸してくれているような、そんな気にすらなったのであった。

あの運命の夏至の日から、三年の月日が流れていた。

そしてその同じ夏至の日、北の大地は短い夏を謳歌するように穏やかな光の中にあった。その光の中、玫瑰の花が咲き誇る野原の片隅に、美玻が会いたいと願い続けていた人の姿はあった

——

(ねえ・・・お願い、スズリ。目を・・・開けて)

きっと、玫瑰の花の甘い香りに誘われたのだろう。夏至の日の、長い午睡のまどろみの中で、自分はまた甘い夢を見ているのだ。そんなことを思いながら、スズリの意識は再び深い眠りに戻っていく――と、

「ねえ・・・目を開けてよ・・・」

忘れようもない声のはっきりと、今度は耳元で囁いた。

刹那、言いようもない懐かしさが込み上げて、目の際から涙がこめかみを伝い落ちた。と、そこに労わるような優しい口づけが落とされた。

――これは、夢か・・・？

幸せなまどろみから抜け出すのに少しの葛藤を生じながら、スズリはようやく目を開けた。

雲ひとつない初夏の明るい蒼天の中に、健康的に日焼けをした若い娘の笑顔があった。

その美しさに、思わず見入る。そして次の瞬間、そこに忘れ得ぬ人の面影があることに気付く、心に戸惑いが広がった。自分が胸の中に大切にしまっていた面影は、色白で小さく弱々しかった少女のものだ。それと目の前で自分の顔を覗きこんでいる娘が同じ人物だとは俄かには信じがたく、思わず、

「・・・美玻・・・か？」

と、確認するような問い掛けをしていた。

娘が少し首を傾げるようにして笑顔で頷く。

「・・・見違えた」

「そう？」

「美しくなった・・・」

そう言うと、美玻の頬にみるみる朱が差した。

「・・・相変わらず・・・口が上手」

「お世辞なんかじゃありません・・・本当に・・・」

「もう、黙ってて・・・」

美玻がはにかんだような笑みを浮かべ、不意にスズリに顔を寄せる。

「美・・・？」

何だと思う間もなく、やんわりと、その小さな唇がスズリの唇に重ね合わされた。美玻の思いが流れ込んでくる。そこから伝わる熱に融かされるようにして、重たい罪を抱え込んで硬直していた心が緩やかに解けていく。慈しむような優しい感情の波が、どこか乾いていたスズリの感情の岸に打ち寄せる。言いようもなく、甘く心地の良い波に心が揺らされた。

――こんな現実があっただけいいのか。

いつしか縋る様に、スズリは美玻の体を抱き寄せて深く口づけていた。またいつもの夢のよう

に消えてしまうのではないか。そんな不安を払しょくするように、美玻の戸惑うように漏れる息遣いに煽られながら、スズリの口づけは更に深くなっていく。

「・・・スズリ・・・どうしたの？・・・泣いてる・・・の？」

やがて美玻にそう声を掛けられて、我に返った。

——泣いてるなんて馬鹿なこと・・・

「・・・あれ・・・どうして・・・私は・・・」

涙が止まらない。哀しい訳でもないのに、泣くなんて。

「・・・良かったね。泣けるようになったんだね」

「泣けるように・・・」

改めて言われて、少し照れくさく思う。思えば自分は、美玻のことを思いながら、泣く練習をしていたのだと言っても過言ではないのだから。こんなにも、感情が自由にならないことがあるなんて、我ながら驚きを禁じ得ない。自嘲気味に起き上がって涙を拭い、大きく呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

「・・・何か、哀しいことを思い出したの？」

美玻が気遣うように身を寄せて訊く。

「いえ・・・この涙は、嬉しくて・・・ですね。・・・そう・・・多分。あなたが生きていてくれたから・・・」

そう言って向けられた真摯な顔に、美玻は胸が締め付けられる思いがした。

「・・・」

自分の命は、色々な人に生かして貰ったものだ。そんな命が後ろめたくて、重たくて嫌だったこともある。でも今、自分がここにいることで、こんな風にスズリが泣いてくれる。それが自分が生かされていた理由なのだとしたら・・・それはとても幸せなことではないのか。

「・・・やっぱり、泣きますか」

スズリが、まだ少し涙で滲んだままの目で笑った。

「これはっ、スズリの貰い泣きだもん」

ふわりとスズリの袖が翻って、慌てて涙を拭おうとした美玻の体を包み込んだ。

その懐かしい心地よさに、美玻はスズリの胸に顔を埋めた。

野原を風が渡り、玫瑰の花が揺れる音に、甘い香りが立ち上る。

——ああ。幸せって・・・こういうこと？

紅滯にいくら問うても分からなかった感覚が、不意に納得できた。

——だから・・・

どんなに辛い時でも、この腕の中で自分は幸せだったから。だから乗り越えて来られたのだ。沖斗でも洸由でも紅滯でもなく、スズリでなければならなかったのは、この幸せを失いたくなかったから。そうではなかったのか。

——大丈夫だよ、紅滯。あたしはここで幸せになれるから——

「・・・それにしても、よく私の居場所が分かりましたね」

「ああ、それは・・・」

美玻が野原の端の方へ目をやったのにつられて、スズリがそちらを見ると、そこにもう一人懐かしい顔があった。

「あれは、鶺鴒ですか？」

成程、芳聞は伊達ではないのかと思う。しかし、それにしても、いくら芳聞でも千里先の匂いを嗅ぎわけるといふ訳では・・・

「あたしね、今、鶺鴒さんのお店で働かせて貰っているの、それで・・・」

「ど・・・どうして、そんなことになっているんですか!？」

「ふっ。世の中って不思議でしょう?あのね、スズリ。あたし、あなたに話したいことがたくさんあるのよ?」

「・・・そうですか」

「うんっ」

——それは、聞きたいような聞きたくないような・・・

「・・・そうですね。私も・・・あなたに聞いて貰いたいことがあるかも知れません・・・」

「本当に?うん聞くよ。何でも」

美玻がいかにも嬉しそうな顔を見せる。

「・・・いえ・・・私のは、そんなに楽しい話という訳では・・・」

「うん。でも聞かせて」

嬉しいことも哀しいことも、抱え込んだこと全て——

「話してくれたら、嬉しいもの」

【 茜天の鱗鎖 完 】